
魔術師達のシン

ららら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔術師達のシン

【Nコード】

N7384W

【作者名】

ららら

【あらすじ】

2023年1月11日。魔術師である村雨零斗は『魔道書回収集団』と呼ばれる魔術師の敵であるはずの『人形』と出会う。

このことが発端に、事件へと巻き込まれる零斗。その先で零斗は何を思っているのか、何を見つけているのか。また、ある場所では桐野張月と澄崎鏡がギルドの者と出会っていた。

魔術師と黒魔道書（前書き）

初投稿の稚拙な文であります。少しでも面白い、と思っていただけ
たならば歓喜の限りですが、まだまだ修行も知識も足りない者でござ
います。何もかもが足りないのですが、なにか気になる点がござ
いましたら言ってください。 よろしくお願いします。

魔術師と黒魔道書

日常を守っている茜ヶ崎高校二年の男がいる。

彼はいつでも、それこそ常に眼鏡をかけている。

「……プロテクト防衛機構もそろそろ限界か」

彼——むらさめ れいと村雨零斗は学校で。否、あかねがさきし茜ヶ崎市であることを隠しながら

生きていた。

零斗は俗に言う魔術が使える。魔術の「ような」ではなく^{まじこ}真の魔術。

彼は魔術師と呼ばれる人間なのだ。

何故眼鏡をかけているかというと、プロテクト防衛機構という術式を眼鏡と

いう装飾品に施しているからだ（実際、両目とも裸眼で1・2）。

プロテクト防衛機構とは、無意識での魔術の使用を意識下にするためである。

人間は反射的に行動することがある。

例えば危険を察知した瞬間。例えば熱いものに触れた瞬間に体が反射的に反応する。反射という現象のことだ。

魔術師にとって魔術とは反射と同じなのだ。反射的に魔術を使用することだってある。

身体テレポルトの硬化。転送魔術など。

が、それは『人間』の物理法則に逆らう行為であり、一般の人間が思う普通とかけ離れている。

零斗の眼鏡にはプロテクト防衛機構という術式が施されている。

が、事実。眼鏡を掛け続けるというのは難しいこともある。水泳の時間には必ず取らなければならないことがあるからだ。

なので、零斗は別にもう1つプロテクト防衛機構を施した装飾品を持つ。

そういうことがあるのに何故眼鏡をかけ続けるのかといえば、小さいころには眼鏡が一般の中に溶け込みやすいという理由と——親の思いからだ。

魔術を使用しているところを見られたら魔術師は生きてきた場所

で生きていけなくなることがある。

同じ人間の体をしながら、全く違う力を使う人間。

それは人々の恐怖を煽り、魔術師は迫害されていることも少ない。

一瞬の油断。そこから来る一生の苦痛。

その辛さから、その代で絶えることも決して少なくはない。

同じく零斗も隠して生きている。

彼はずっとこうして生きてきた、生きていくのだと思っていた。

魔術師であることを周囲に隠し続けて17年、現在は2023年1月11日。

この日、零斗の日常は壊れようとしていた。

それはあるものの出現からだった。

2023年1月11日（水）

零斗はいつものように教室で1人座っていた。

高校へと通い、すでに2年が経つ。現在の零斗は周りから見ても

「1人でいたがる人」となっている。

その認識になんら間違いは無い。零斗は人との関わりを持たない、持ちたくもないと思っている。

彼らに、一般人に零斗が魔術師というのが明らかになってはいけないのだ。『魔術師』以外には。

放課後となり、零斗はゆっくりと歩きながら帰っていると不意に、感覚がした。

それは、魔力と魔力がぶつかり合っている感覚。

魔力というのは存在する。空気と同じように世界に漂っている。

それは場所によって濃度が違っていて、薄い場所では魔術の力も弱まり、濃い場所では強力となる。

ここ、茜ヶ崎市は魔力の濃度が特に濃く、『魔術特区』と呼ばれる。特別な地区だ。

世界に『魔術特区』は100箇所あり、そのうちの 하나가零斗の住む茜々崎市だ。

しかし、濃い場所ではメリットばかりではなく、デメリットもある。

それは、強力な魔術を使用するときの魔力の消費率が大きくなり、魔力がすぐに無くなることがあるのだ。

魔術師にとって魔力とは人間でいう精神力とほぼ同義だ。違う所があるとすれば魔力は消費し、後には回復するということだろう。

魔術師は人間の呼吸の際に魔力を吸収し回復する。

これは魔術師特有の体質でなせることであり、一般人に悟られることも無い。

少し戻し、魔力と魔力のぶつかり合い、それは魔術師同士の戦いを意味していた。

通常、魔術を使うときには魔力のぶれを感じることがある。けれど、微々たるものであることは間違いない。しかし、距離が近ければ近いほどその違和感は強くなる。

魔術師という存在同士の違いというのは無視しきれるものではない。

それが原因で零斗が魔術師だということが露見するか分かったものではないからだ。

一応、様子を見るべく零斗はその場へ向かって走り出す。

名も知らぬ者同士ならば様子を見て捨て置くつもりだが、あるいは別のものならば。

——そうであっては欲しくないがな。

ある1つの答えへと辿り着く、しかしそれはあって欲しくないことだ。

走り出して数秒後、感覚のする所から50メートル程後方、魔力の歪みがあった。

——……空間断絶魔術、か。

一際大きいと思った魔力のぶれの原因であり、あって欲しくな

った事象。

空間断絶魔術とはある組織特有の術式のことである。

空間を現在の世界から切り離すという拘束的魔術でもある。

存在は魔力を感じれる者のみが分かるが、一般人の中には稀に魔力を感じることが出来る人間がいるらしいが、あまり存在はしないらしい。零斗も見たことは無い。

……といっても、彼に友達と呼べる人など1人もいないわけなのだが。

零斗はその魔術の術式に手を触れる。術式を1部解析。ちょうど人が一人入るような穴を作る。

周りに人目がないことを確認してから、零斗は入り、目撃する。

目の前には2人の女性がいた。1人は同じ高校の制服だった。

——こんなところまで来たのか……。

もう1人。銀髪に少女の見た目、けれど腕につけられた紋章から判断するに『魔道書回収集団』日本では『図書館』と呼称される組織の魔術師。

あつて欲しくなかった事が今、零斗の眼前にあった。

「その魔術師、手伝うぞ」

見るからに女生徒の方が劣勢であり、十中八九零斗と同じ『魔術師』だろう。

「えっ？ 君は？」

女生徒は見るからに表情に映る感情は驚愕。けれどすぐに直り、状況を理解したのか引き締まった表情に戻る。

「ありがとう。でも逃げるつもりだから」

「ああ、そのほうが賢明だろうな」

相手は図書館の魔術師、普通に戦って勝てる相手ではない。

図書館とは魔術師の所持する『魔道書』を回収する組織である。

理由は分からないが、魔道書をとられるということに怯えている魔術師は多い。

なので、魔術師同士で徒党を組み、集団で身を守る道を選ぶ者も

多い。

それが魔術師の世界では『ギルド』と称される集団のことだ。
図書館には、逆らえば殺されることでもあるとのこと。

——ならば。

零斗は眼鏡に手をかけ、外す。

瞬間。零斗の体内を魔術回路を通し通常より多くの魔力が流れ込む。

体内に蓄積された魔力の総量は眼鏡をかけている通常時の約3倍。
零斗は普通の魔術師より、体内に多くの魔力を有しすることができ
きる。

眼鏡は多すぎる魔力を一定の量に抑えるための術式も施されているのだ。

何故なら大きすぎる魔力は本人の体には毒となるため。

零斗は1冊の白い本を手から取り出す。

それは魔道書、ホワイトスベル白魔道書呼ばれるものだ。

白魔道書とはこの世にある様々な魔術書へと成れる。

しかし、魔術師には魔術に対する適正というものがある。なので

零斗は3つの魔道書にしかない。

その中で白魔道書には成れないものがある、それは禁魔道書デイチャと呼ばれる種類の魔道書だ。

禁魔道書は五大元素から外れた物に干渉する魔道書の総称であり、
個別の魔道書のことではない。

女生徒も持っている携帯を握り締める。

彼女の『魔具まぐ』は携帯なのだろう、と零斗は思う。

「……………」

対し、図書館の魔術師は、何も持たず何も言わずにそこに立つ。

足を交差させ、ゆっくりとだが、歩み寄ってくる。

「っ！
アンサンディ火炎球！」

携帯より展開した術式から勢いよく炎が噴射される。炎は1つの球と成る。

それは圧縮された一種の爆弾。

「火か、赤魔道書」
フレイスベル

同系統の元素を使う援護を考えた零斗は白魔道書ホワイトスベルを赤魔道書へと変化させる。白かった本が次第に赤色へと染まっていき――、

「炎獄手！」
ヴォルカーム

零斗が唱え、本より円形の術式が零斗を護る盾のように展開され、術式の中心から炎を纏まとった右腕が魔術師を掴みかかる。

ほぼ同時に出された魔術に魔術師は、未だ何一つ動こうともせず
に立っている。

そして――2方向から放たれた火の魔術は直撃し、巨大な爆発音がする。

普通の人間ならば、飛び散り肉片となっていただろう。

魔術師ならば、防御術式を展開して重度の火傷といったところか
けれど、零斗たちに安心は無い。

この程度で図書館の魔術師がやられることはないだろう、という
思いが強いからだ。

しかし、足止めぐらいはできただろう、と零斗は思った。

「よっし！　じゃあ今のうちに脱出っ！　――っ！？」

女生徒の挙動が止まる、それだけでなく零斗の挙動も静止する。

今、2人同時に背筋に寒気が走った。ゆっくりと2人は後ろを向
くと――立っていた。

何も持っていないはずの魔術師が、平然と、当たり前のように存
在していた。

「……なあ、お前。あいつの魔具ってどこにある」

零斗は女生徒に聞く、始めの方から疑問には思っていた。

何も持っていない魔術師がどうやって魔術を使っているのかを。

魔具を持っていない魔術師に、どうしてこの女生徒は劣勢を強い
られているのか。

魔具とは、現代の魔術師にとって生命線と同義である場合が多い。
基本的には零斗の持つような本だ。だが、今では様々な物を利用

し、術式を展開することが可能となっている。携帯電話も魔具の代わりとなる術式展開装置インブットデバイスの1つだ。

が、どのような魔具であっても展開できる術式は1つ。

つまり一度に使える魔術は1つのみ、例外は無い、……はずだった。

しかし、現在目の前では2方向の魔術を受けて立っている。

さらに見ると魔術師を中心に3つの防御術式が展開されている。

三角形に3つの防御術式を展開し、全ての炎を防いでいた。様子を見るに、余波さえも届いてはいない。

——魔具はどこにある……。

一瞬、連立魔術というのも考えたがその可能性は消える。

連立魔術は魔具の中で魔道書を使用しなければ使えない。

それは、魔道書を並行して使用し、同時に術式を複数展開させることだ。

微細なまでの魔力コントロール。さらに複数の術式から放たれる魔術を操るだけの集中力。この2つを欠いて連立魔術は成立しない。普通の魔術師には到底できないことだ。

「ごめん、分かんないかな。私がここに入れられた時からだったからさ」

「……そうか」

その時、魔術師は疑問に思う行動をした。

急に上を向いたかと思うと、一瞬で消え去り、空間断絶魔術は解除され、元の世界へ戻ってきたのだ。

車の音、人々の喧騒が戻る。

「は……あ」

女生徒は腰を地面へとつける。腰が抜けてしまったようだった。

零斗は眼鏡をかけなおし、彼女に手を差し伸べる。

「立てるか」

女生徒は「ありがとう」と言いながらその手を掴み、ふらつきながらも立つ。

そのまま引きずられるようにして零斗は近くの公園のベンチへ移動する。

寂れた公園だ。放課後の時間でありながら子供は誰一人としていない。

取り壊されるのも時間の問題だろう。

「――俺は村雨零斗、あんたは」

「私は平真^{たいらま}華里^{かり}。助けてくれてありがと。……そういえば同じ制服

……ねえ、村雨君。君って何組？」

何組、と聞く辺り制服についている紋章の色から同学年だということ判断したのだろう。

「3組だが」

「……やっぱりっ！ 村雨ってやっぱり同じクラスの村雨君だ！」

「って……同じクラス……？」

零斗は少し記憶を遡る。

その間も平真は「へえ、私と同士だったなんて知らなかったなあ」と言っている。

思考の中。平真というキーワードから導き出される記憶は生徒会の選挙の記憶。

――……平真って、まさか。

「……平真って生徒会長の平真なのか」

その答えに平真はやや噴出しそうな顔をしながら、

「ははっ、他にどんな平真がいるの。他に平真って名前はほとんどいないと思うよ」

零斗は学校であろうと、表に出るような人が魔術師だとは思ったことが無いので、面を食らう。

しかし、なんとか持ち直し本題に入る。

「……それで、なんで図書館のやつに襲われていた」

「あ、ああ、うん。それはね」

何故か最初のほうに学校でのことを話したので省略する。

話によると、近道して裏道に入ったところで、空間断絶魔術の中

に入れられて魔術師が出てきた。腕の紋章から図書館のやつと判断した平真は、術式を展開、攻撃したが、魔具を持っていない図書館の魔術師は先ほどと同じように防いだという。

じわり、と迫ってきた時に零斗が現れて今の状況となる。

「ってことなんだけど」

「そう、か。ところでだ。平真は何か魔具を持っていたのか」

「……あるよ、黒魔道書が、ね」

黒魔道書は世界に100冊しか残っていない禁魔道書、その内の72冊は図書館がすでに回収していると言われている。

黒魔道書はほかの魔道書と違い、『有を無に有を2乗に』、などという魔術が使える。

黒魔道書を扱えるかどうかは才能に起因するところが多く。才能の無い魔術師では術式の展開すら出来ない。

暴走すると手がつけれられないこともある。

「この本。私だとうんともすんともしないんだよね」

つまり、平真には黒魔道書を使うことができない。

ならば何故、そのような魔道書を所持しているのか。今や数少ない魔道書を。

「黒魔道書ってどこにあるんだ？」

「えっと……ここに……あったあった」

平真が探し、取り出したのは通学鞆の中。

——……無用心だな。

繰り返しになるが、現代の魔術師にとって魔具は生命線と同義である。

零斗も白魔道書を分解し、表面上は見えないようにしてから常に所持している。

「黒魔道書。少し見せてもらっていいか」

「うん、いいけど。多分何も起らないよ」

それは零斗が黒魔道書を使えないという予想からだろう。

平真は「はい」と零斗に黒魔道書を渡し、零斗は中身を見る。

パラパラとめくり、ある1つの術式に目を留める。魔道書は本にもよるが約50ページから多いのでは200ページとあり、1ページ1ページに術式が描かれている（中には数ページ以上に及ぶ術式もある）。

魔道書に描かれた術式を魔術師自身が読み取り、魔力を流す。

次に術式が展開され、自動的に魔力を魔術へと変換し、発現する。これが現代の魔術師が使う魔具による魔術使用のプロセスである。「そういえばさ、その眼鏡が村雨のプロテクト？」

言いながら平真は眼鏡に手を伸ばそうとする。

瞬間。零斗の手が平真の手を叩き、いい音がした。

「すまない、この眼鏡には触らないでくれ」

「あ……えと、ごめん」

『……………』

2人の間に沈黙が流れる。それはこれ以上踏み込まないでくれという意思表示でもある。

察したのか、平真は急に笑顔になり、

「……じゃあ、今日はありがとう！　また明日ね、村雨君！」

言いながら、平真は走り去る。

「……………はあ」

残った零斗は溜息をつく。他の人と関ってしまった。加えて、自分が魔術師ということ。加えて、自分の魔具。

それらの存在を明らかにしてしまったことについてだ。

——どうして、こうなったんだか……。

考えても仕方がない、と思った零斗は帰ることにした。

道中、他の事を考えていた。

——けど何故今更、ここに図書館のやつが現れたんだ。

図書館。魔道書回収集団は魔術師にとって天敵である。

魔術師の生命線である魔具を奪い、フランスにある本部へと持ち帰る。

本部の場所までわかっているのに取り返そうともしない理由は、

まず第一に『勝てない』というのがあるためである。

しかも、逆らった魔術師は殺されるとも零斗は聞いたことがあった。

なので、零斗は今まで10年ほど前の父からの情報でそう考えていた。

実際、零斗が図書館の魔術師と会うのはこれが始めてである。

——…けど、やはりおかしい。

先ほどだけかと思ったが、平真の話を聞いたあたり、最初から最後まで図書館の魔術師は防御しているだけで、一切攻撃していないのだ。

何故だ、と零斗は考えたがわかることは無い、けど1つ思うことがあった。

——…明日からどうするか。

1月12日（木）

始業式から3日目の朝、零斗は目を覚まし学校へと向かう。

20分ほどかけて毎日歩いているのだが、零斗はあまり好きではない、かといって自転車は？　と言われても零斗の家は自転車に乗っている範囲のぎりぎり内側にいる。

つまり毎朝隣を自転車ですいすいに行く生徒を見なければならぬのだ。

いつもならば特に考えることも無い事柄なのだが、今日は違う。とにかく、人が多すぎるのだ。自転車に乗る生徒、歩く生徒、話す主婦、小中学校の子供。

昨日あんなことがあった直後だ。いつ狙われたか分かったものではない零斗は周囲に集中しなければならぬからである。

——結局、昨日の夜には何にもなかった、か。

昨夜、零斗は3時頃まで目を開けていた。

何故なら、図書館の魔術師が零斗の魔具を狙い追ってくるという可能性を否定できなかったからだ。

けれど、結局は誰も、何も来ることは無く。ただただ、体力の無駄遣いだった。

——…流石に、眠い。

疲れと寝不足が重り、足取りも自然と重くなる。

学校へと到着。教室へ入ると、数人が零の方を向き、すぐに元に戻る。

零斗は学校で、世間でそのような存在、誰も気にせず、誰も気にしない。

それでいい、と零斗は思っている、世の中1度変わるとうまくいかない時がある。

「おはよう！ 村雨君」

零斗はこの時、時が止まるとしたらこのような感じなのだろうか、と思っていた。

——……は？

「ん？ あれ、どったの村雨君」

目の前にいるのは昨日出会った生徒会長である平真華里。

少し話ただけでも分かる明るさは、零斗とはまるで正反対の人物である。

「いや、別に……」

「そう？ ……あっ！ 泉涼ちゃんおはよう！」
みすず

平真は零斗の前から去っていき、零斗は真顔のまま数分間停止する。

——なぜ、声をかける？

その思考が零斗には全く理解できず。それ以上考えることも無く、腕を枕代わりにして眠りについた。

放課後になり教室の人が少なくなった頃。

昨日持って来ていた冬休みに借りた本をロッカーの中から探していると少し遅れてしまったようだ。

終礼後、まだ掃除は無く。部活にいくか、さっさと帰る者が大半である。

ちょうどその時、零斗は声をかけられる。

「村雨君、ちょっと話があるんだけどいいかな？」

零斗は何の話か聞かずに平真に追従する、何についての話か、予想がついているからだ。

2人は屋上へ向かう。その道中廊下で物音に反応して零斗は物音の方を向く。

けれど、そこには何も無く。零斗も特に気にも留めずに歩き、屋上へ到着。

屋上は誰もいない。夏頃にはそれなりに人がいるが、冬では寒く誰もいなくなる。加えて高台という立地条件から風も強く、風を防ぐ壁も無い。

しかし、今の2人にとってはちょうどいい空間であることに間違いは無い。

放課後に。男女が。屋上で。2人きり。話。

これだけ見るとどこか青春な感じがあったりもするが今の2人、特に零斗にはまったく関係は無い。

「それで、話って何だ」

零斗がそう言うと、平真は一度頷き、

「うん、昨日のことなんだけど、ちょっと考えてみたらね……」

——そりゃあ、あの話だな。

「あれってさ、図書館じゃないかもよ！」

高々と、謎の宣言。

「……………」

「え？ あれ？ 何のリアクションも無いっ!？」

「……………」

「え……と、そんな真顔で見られるとすごい困るなあ……なんて」

「……根拠は？」

待ってました、と言わんばかりの勢いで平真は零斗の言葉に被さ

るのではないかぐらいの勢いで言う。

「魔道書取られなかったから！」

その一言がすべての理由らしく、平真は零斗の反応を待っていた。

「それだけか」

「それだけけど？」

不思議そうに首をかしげる平真。

『……………』

2人は黙る。平真は「あ、あれえ……………」という表情をして数秒後。

「…………平真ってさ——」

とりあえず、1つの答えを得た零斗が口を開き言う。

「馬鹿だったのか」

「ひどっ！」

疑問系でもなく零斗は決定したこととして言い、さらに続ける。

「『何も無かったから』ではなく、何かあるからとらなかったと考えるべきじゃないか」

魔具を取られなかった。

たったそれだけであの図書館の魔術師を『敵ではない』と考えるのはあまりにも樂觀的だ。

「じゃ、じゃあさ、その理由^{わけ}って？」

「…………先ず、何で平真を空間断絶魔術に入れたかって所だな」

零斗がそう言うのと「あっ」と平真は言う。

「…………そういうば、昨日思っただけど、向こうって防御魔術しか使ってなかったもんね」

それは零斗も思ったこと、しかし未だに理由がわからない。

「……！」

平真と零斗は同時に上空を見上げる。雲が止まり、風は止み、世界が止まる。

紛れも無い。空間断絶魔術である。

空間の発生と共に、零斗は白魔道書、^{ホワイトスベル}平真は携帯電話を手に持つ。

構えた瞬間。昨日の魔術師が目の前に現れる。

またも空間転移系統の魔術で一瞬にして眼前に現れた図書館の魔術師は2人を見る。

「またっ！」

平真が術式を展開しようとしている所に零斗は妨害魔術ジャミングを入り込ませ、平真の展開しようとした術式はひび割れ、崩れていく。

「何するの！」

妨害魔術ジャミングは魔術行使前の術式を強制的に崩壊させる魔術だ。

だが、妨害魔術ジャミングは精神状態がまともな状態ならば効かない。魔術のコントロールに集中力を払っているため、そのような邪魔も感知した瞬間に排除するのだ。

「落ち着け、あいつはまだ何もしてないだろ」

けれど、今の平真は図書館の魔術師を見ると術式を展開させたが、妨害魔術ジャミングで簡単に術式は崩壊した。これより今の平真の精神状態がぶれていることは間違いない。

「それで、その人。何か用があるのか」

零斗は警戒は決して解かずに、図書館の魔術師である少女に質問する。

「……質問、ある」

初めて口を開いた図書館の魔術師は、淡々とした口調で続ける。

「貴方達、協力してもらいたいことが、ある」

「きょう……りよく？」

平真は、その単語の意味も分からなくなるほど混乱していた。零斗も混乱はしていたがそこまでではない。けど、

——協力、だと……図書館の魔術師が俺たちに協力？

図書館の魔術師ならば魔術の力は絶大。何か魔術がらみの事柄ならば普通の魔術師に頼むことは無い、そもそも図書館が普通の魔術師に協力を求めるなどありえない。

けれど、もしその『頼んだ魔術師』が『普通』ではないとしたらどうだろうか。

「協力と言ったな。何をするつもりだ」

「ここ魔術特区を、守る。及びあるものを、破壊」

「断ったら、どうなる」

「この町が、消滅する」

淡々とした調子の口調で、図書館の魔術師は言い続ける。

――は？

「ちょ、ちょっと待って！ どういうこと？ いつ？ 何で？」

流石にこの言葉には平真も反応した。

「刻限は、13日」

魔術師は理由を答えずに、時間を答える。しかしその時間というのはあまりにも唐突過ぎる時間だった。

――2日後にこの町が潰れる……馬鹿な。

零斗は町を飲み込むような大きな魔力の流れを感じてはいない。

最近では平真と図書館の魔術師の魔力のぶつかり合いだけである。図書館が関わっているなら魔術師絡みなのは間違いないだろう。が、そうなるとうまます協力の理由が分からない。

『魔術師を倒す』ようなことであればこの図書館の魔術師だけで十分であろう。

「何故、俺たちなんだ」

零斗は質問する。

1月13日（金）

――……くそっ！

零斗は起床した時も就寝前もそう思った。それは昨日の魔術師の言葉のせいだ。

「何故、俺たちなんだ？」

質問の後、図書館の魔術師は人差し指を零斗へと向ける。

「貴方の力が、必要。それに」

図書館の魔術師はゆっくりと平真のほうを向き、再び指をさした。
「貴女の所持している、黒魔道書^{ブラックスペル}。それが、必要不可欠」

先ほどは必要、と言っていたのに今度はわざわざ「不可欠」と言葉に加える辺り、本当に必要なものなのだろうという憶測はできた。
「黒魔道書^{ブラックスペル}をどうするつもりだ」

零斗が言うと、今度は平真に向けられていた指を零斗の方へ向ける。

「貴方が、それを、使う」

零斗の顔が少しだが歪む、しかし図書館の魔術師はそのことに意も介さず続ける。

「貴方は、使える。それを、取れば」

魔術師は指をさらに上に上げ、零斗の眼鏡を指差す。

「つく……」

さらに零斗の顔は歪んでいく、

「それには、ある術式が、処^{しょ}されている。それを、解除すれば」

「待て……!」

零斗は自分でも驚くぐらいの大きな声で言った。

だが、今零斗達がいるのは世界から外された所。その声は、空間の中で響きながら次第に消えていく。

「せめて、明日まで待ってくれ……頼む」

「明日、同じ時に、此処へ」

図書館の魔術師は空間断絶魔術を解除し、消える。

「村雨、大丈夫？ すっごく怖い顔してるけど」

——そんな顔をしてるのか俺は……。

「いいや、何でもない」

それが昨日の屋上での会話の全て。

——ともかく、あの魔術師が今は敵でないことはわかった。けど……何故俺なんだ。

一体何のつもりか、あの魔術師は自分では使わず零斗に使えと言った。

そのことから、あの魔術師には何か事情があり黒魔道書ブラックスベルが使えないのだろう、という考えと、黒魔道書が無ければその『何か』をなすことが出来ないということ。

それ以前の問題もある。

——本当に2日後。この町が消滅するののか？

未だに信じがたい言葉。それがさらに零斗を混乱させる。

「村雨君、私たちどうすればいいのかな？」

昨日の帰り道。

不安からかそう言った平真の言葉に対して零斗は何も言うことができなかった。

零斗は5歳の頃から人と関わりを持たなくなった。心のほとんどを、閉じた。

その時から12年もの間、誰にも関わらず。誰からも関わらせず生きてきた。

しかし、たった2日で人と関わりを持っている。

あの図書館の魔術師が現れてから。

そして、今。

「おはよう！ 村雨君」

当然の如く零斗へ挨拶をする平真。

——何故、声をかけるんだこいつは。

また、そのようなことに疑問を持ちながら数秒遅れで挨拶を返す。その後、話し声が聞こえた。

零斗は聞き耳を立てるつもりはなかったが自分の名前が出てきたことで、自然と聞き耳を立てていた。声の主は平真と知らない女生徒だ。

「――村雨さんとはどこで知り合ったの?」「えーと、その辺で?」「屋上で何かしているって聞いたのですけど、何かしていたのですか?」「んー、友達同士の話?」「あの――」

その辺りで零斗は魔術を使い、耳に音が入らないようにした。今の零斗にはそんなことに聞き耳を立てている余裕は無い。

その日の授業は何1つとして集中どころか受けようとも思わなかった。

昼休み。零斗は教室の喧騒に耐えられなくなったので屋上へ向かった。

1人で考え事をしたかった。

――俺が……黒魔道書ブラックスベルを使えばいいのか、それとも。

実は、町は消滅しないのではないか? ああ魔術師が言っていることは総じて妄言なのではないか? と、青い空を見ていると零斗はそんな気持ちになった時。

鈍い金属音を上げながら、屋上と階段を分けているドアが開かれる。

今は冬、このように寒い時期は風も鋭く、冷たく。太陽が出ていても全く暖かくも無い。むしろ風が通る分寒い。そのような場所へ他に人は来ないはずだった。

女生徒はじっと零斗のことを見ている。それは奇異の目か分からないが、見ていた。

「……………何か用があるのか」

その目線に耐えかねて、零斗は言った。いつもなら自分で声をかけることをしない零斗が。

そのぐらい、女生徒の視線には耐え難いものがあった。

女生徒は、儚げな見た目に反して力強い目で、ずっと見ている。

そして、ゆっくりと零斗の方へと寄りながら、

「村雨さん……ですよね。私、黄希島泉涼ききしま みるずと申します」

彼女は自己紹介をし、間髪いれずに言葉を続ける。

「突然申し訳ありません。少しお時間よろしいでしょうか?」

今度は少し首を下に向けながら言う。

そのまま黄希島は動こうとしない、そして予鈴が鳴る。

「……何か用なのか？」

もう一度初めと同じ言葉を返す。今度はハツとした様子を黄希島は見せると、

「あの！ 華里ちゃんとは何をしているのですか？」

「……華里ちゃん？」

零斗は訳が分からない表情をしていると黄希島は、事を察したのか、名前を言う。

「平真華里、です。生徒会長の。今日は様子がおかしいといいますが、なんといえますか」

そこでやっと零斗は合点がいく。

「ああ、平真の……友達か」

「親友です！」

黄希島は即答した。零斗はやや困惑。

「え……と、それで何をしてるかって、どういうことだ」

「どうにも様子がおかしくて、何か隠しているみたいで……それで、昨日屋上で村雨さんといったいうことを聞いたので、何か知っているのではないかと思ひまして」

「……平真。嘘、得意そうじゃないからな。」

人間関係に希薄な零斗でも少しだけ平真の人間性というものを掴んでいた。

あくまで、表面上の、だが。

そこで零斗はふと空を見上げた。

——ん？

「何があったか村雨さんは知りませんか？ ここでの事について、私、心配で……」

「……すまない、俺には分からない」

零斗は嘘の言葉でその場を終わらせようとする。

「そう、ですか。ごめんなさい、変なこと聞いてしまって私、変な

子ですよ」

「いや、変じゃない。心配して俺にまで聞くってことは本当に平真を親友と思ってるからだろ」

——何言ってるんだ俺は……。

これも嘘、心配する人の気持ちは零斗には分からない。

「はい……急な話ですみません、でも村雨さんって優しいんですね。もっと怖い人かと思っていました」

疑問。

——今のどの辺りで俺が優しい印象なんか与えた？

その時、本鈴が鳴る。

『あっ』と、二人同時に絶句。その日、零斗は初めての遅刻をした。

そして——放課後。

昨日と同じように2人は屋上へと来ていた。

そこには2人だけがいて、他には誰もいない。

「あのさ……無理にとは言わないけど、その眼鏡に何かあるの？」
「そう言われ零斗は平真を見る。興味——ではない。好奇心——ではない。同情——でもない。その目を、零斗は分からなかったが、

「俺の眼鏡には黒魔道書を使えないように——防御機構《プロテクトを施してある」

自然と、口を開いていた。

「何でか、訊いてもいいかな？」

「俺は、11年前に父さんを殺した」

「……えっ!？」

「事故だったのかもしれない、けど発端は子供の俺と——黒魔道書
だった。ただの逃げかもしれない。けどそれ以降、使えないように
自分を戒めたんだ」

黒魔道書の力は当時5歳の零斗には強すぎた。

そして、魅力的過ぎた。

零位との父であり、魔術師である村雨玄界も、黒魔道書の暴走だ
けを止められず、息子を殺すなんてこともできず。

玄界は自らの犠牲とともに、暴走を収束させた。

村雨零斗は家1つと人1つの犠牲の上に立っているのだ。

零斗は黒魔道書ブラックスベルに対する才能を天才と称していい程有していた。

それこそ、父を超えるほどに。故に暴走してした時に、父でも止めることができなかったのだ。

「そう、だったの」

平真が言葉に窮している時、空間断絶魔術が展開され、図書館の魔術師が現れる。

同時に後ろでドアの音がしたが、風のせいと思い前を向く。

「……」 「村雨……」

図書館の魔術師は無言で待ち、平真は零斗を覗き込んでいる。

零斗は掛けている眼鏡を外し手に持ち、目を瞑る。

「解析……解除……解除……解除……解除……解析」

何かに祈るように零斗は幾重にも施されている術式を解除していく。

「……解除……解除……最終術式……解除」

——二度と、使うことはないと思ってたんだがな。

零斗は図書館の魔術師へと向き直り、

「わかった。協力する。ただし条件がある」

魔術師は無言で首を縦に振る。

「俺たちの魔具を取らないって事だ」

零斗の言葉を聴いてから、魔術師は考えているのか、何一つ身動きせず立っていた。

「できる限りは、する」

「そうか……それと1つ聞きたいことがある」

零斗は言いながら、右手の指を天空へと向ける。

「——空が、何で白い」

純白の空へと。

「え? ……あっ」

平真は今気づいたらしく、空に目を釘付けにされている。そこに

は灰色の雲、力強く輝く太陽、飛んでいる鳥の姿がある。けれど決定的に1つ、違うところがある。

それは空の青が全て無くなり白色へなっていたこと。

「今日、昼までは青空だった。けど何で白くなったか、お前には分からないか」

今日の天気は雲一つ無い快晴のはず、だった。

「それはある物による結界の、仕業」

「結界？」

聞きなれない言葉だ。結界とは広範囲に対し法則を書き換えるような魔術に対して言われる言葉だ。

「この町に、広げられた結界。あるものは、この世界に、存在していない」

その後、図書館の魔術師により話された内容は零斗達には俄かに信じ難いことばかりだった。結界は、ここ茜ヶ崎市を中心に広げられていて、あるものとやらはこの世界ではなく、作り出された結界の中の中心点に存在しているらしい。

そして、刻限と言ったとおり。明日の10時にここはのみこまれ、この茜ヶ崎市という世界は停止する。その後に零斗たちは存在しない。

さらに、結界の中へ入る瞬間はその10時にしかないという。

「最初に会った場所で、10時」

最後にそう言って、止める間もなく去っていった。

「明日の……10時……か」

「……そういえば、村雨。この町を消そうとしてるのって誰なんだろう」

その問いは分からず、2人は帰路へとついた。

1月14日（土）

零斗は華里から借りた黒魔道書ブラックスベルを持ち、初めて平真が図書館の魔術

師と会ったという裏道へと来ていた。

裏道、というので初め零斗は知らない場所だと思っていた。けれど、平真から屋上で教えられた場所は零斗もよく知る場所だったのだ。

裏道と言わすべき人間が二人、ぎりぎり通れるような細い道の後、やや広い空間が広がる。

そこは零斗の通学路。常に使っている近道と言うものだ。

現在時刻、9時50分。図書館の魔術師の言うとおりならば、残り10分である。

零斗はここに来るまでにこの町が変化しているのを見てきた。

看板などの赤、最近の暖かさで残っていた木の葉の緑が零斗の見る限り無くなっていた。

しかも、他の人はまったく気づいてもない。

茜々崎市が結界に取り込まれかけているという情報は確信に変わっていた。

「寂しいな、こうなると」

冬特有の寒い空気の中、零斗は快晴の白い空を見上げていた。

「おはよう、村雨君」

言葉にはいつもの元気はなく、平真は来た。

「ああ、おはよう」

そこで少し零斗は考え、

「本当に、来るのか。別にここで待って——」

「——行く、見てみぬ振りなんて、私にはできないから」

平真は即答する。よほど何かの思いがあるのか。

図書館の魔術師が現れる。今回は空間断絶魔術が必要ないらしく、レポート転送魔術を直接して来た。

「残り、2分32秒」

魔術師は時間を告げる。

刻限まで残り5秒となったところで、魔術師は詠唱を始める。

「空間侵防衛術式——」

図書館の魔術師の足元に術式が広がる。平真、零斗を円形である術式の範囲内へと入れる。

「ま、待ってください！」

瞬間。零斗の後ろからどこか聞き覚えのある声がする。

そして、零斗は背中に衝撃を受ける、何かがぶつかったらしい。

「——展開」

言葉と同時に、円の形をした防衛術式が展開される。

そして世界は。この、茜ヶ崎市は……一変した。

「なに？ これ？ は？」

初めに声を出したのは平真だった。いつもより疑問符の数が多い。眼前に広がる景色はまるで別物。漆黒の世界。何も見えないように見えるが、そこにうつすらと何かの輪郭がある。零斗がそれを建物だと分かるのには時間がかかった。

「ここはどこなのですか！？」

その声で、零斗はここに来る前に何があったのか思い出す。

「黄希島さん。何でここが……」

倒れている零斗の上から声する。そこにいるのは黄希島。

「泉涼ちゃん？ 何で？ どうして？ 何故？」

「あ、えと……と、とりあえず華里ちゃん。同じようなこと3回も聞かなくていいよ」

黄希島と平真。2人は話し出す。何でここにいいのか話しているんだろう、と零斗は思った。零斗は蚊帳の外、というか自ら外へと出た。あの2人の話に自分が入る場所など無いと悟っていた。

零斗は、ずっと黙りこんでいた魔術師の視線に気づく。

「それで、俺は何をすればいい」

魔術師はゆつくりと指を上へと向ける。零斗は、その指を追っていくと——存在した。^{あった}

「何だ、あれは」

そこにあるのは、漆黒の空に浮かぶ、白い球。

「あれが、この結界の、本体。『プリンカバリスパバレ白吸色球』」

図書館の魔術師がそう言った時、白い球の前にある男が現れる。

——誰だ。あれは。

その男に零斗は見覚えがあった。ありすぎた。

「と……うさん？」

宙に浮く男は、零斗の父、村雨玄界によく似た人物。いや、瓜二つと言っていい程零斗の記憶にある父と一致した。

「また、偉大な魔術師、村雨玄界の『模造品』」

「また、ということは以前にも同志を壊したのか……ビブリオドール図書館の人形」
「待て！ 何だ模造品って！ 何故父さんと似たやつがここにいる！？」

零斗の言葉には誰も、何も返されることは無かった。

「模造品を、確認。消去、開始」

図書館の魔術師は何も持たないまま3つの術式を同時展開する。

ドール「人形ごときが我を破壊できると思うのか」

「……………」

無言のまま展開した術式から火炎弾と風刃が男へと飛来する。火炎弾は弾丸のように、風刃は首を刈り取るかの如く襲い掛かる。男へと向かい、全弾命中。大きな爆発が起こり、零斗のところまで熱風にさらされる。

しかし、宙に浮く男は何事も無かったかのようにそこにいる。動いてもいない。

「やはり、届か、ないか」

図書館の魔術師が3つの術式の同時展開により攻撃したのと同じく、『模造品』もまた、3つの術式の同時展開により全ての魔術を防いでいた。

「再度問おう。ドール人形如きが、我を破壊できると思っているのか？」

「村雨！ どうしたの！？」

呆けていた零斗はその言葉で現実へと帰ってくる。

「……すまない、もう大丈夫だ」

実際、混乱はしているが今はそのような場合ではない。

零斗は黒魔道書を手に取る。

——俺に、本当に黒魔道書が使えるのか……。

黒魔道書は、多くの魔力と生命力を要する。これは禁魔道書全般デューチャに言える事だ。禁魔道書の中には魔力と同時に、生命力を要する魔術がある。

生命力とは人が活動する際に使うエネルギーのこと。

魔術師は魔力と生命力2つの力で生きている。

それを知っていたから、零斗はしっかりと休んできた。けれど、それでもまだ不安要素は拭えない。

昔あった事故。変えられない過去。そこからの精神的な疲労も大きい。

——けど……やるしか、ない。

「村雨さん！ 後ろ！」

黄希島の声が零斗へと届き、後ろを見る。

零斗は油断をしていたわけではない。余所見もしてはいない。

けれど、確かにそこに、風の刃が零斗を刈り取らんと迫ってきていた。

風刃は、一直線に零斗へと向かう。

防御術式の展開は間に合わない。零斗は反射的に目を閉じ、来るであろう衝撃、そして悲劇を思う。——が、来ると思っていた衝撃が、来る事は無かった。

「何してんの！ 早くして、もう持たないから！」

零斗の眼前に広がる円形の術式。平真の防御術式だ。

目の前で平真の術式はひび割れていく、魔術の力の差が歴然なのだ。

零斗は即座に真横へと横っ飛び。防御術式が壊れる瞬間。右肩の服を少し持っていかれたが何とか避けることに成功した。目立つ傷は無い。

「村雨、大丈夫!？」

「……ああ、すまない。もう大丈夫だ」

それだけを平真に伝え、零斗は男の方を向き直る。

——俺に、本当に黒魔道書を使えるのか。

使えるか、使えないかなど今はどうでもいい。——使うのだ。

強く、強く黒魔道書を持つ。

今一度、決意を握り締めて。しっかりと、揺るがぬように。過去に、別れを告げるように。

零斗は図書館の魔術師に言う。

「俺は、何をすればいい」

答えは簡単に返ってきた。

「貴方は、あの術式『プリンカバリスパバレ白吸色球』を、壊せばいい。あれの相手は、これがする」

どうやら、あの男の相手は図書館の魔術師がするようだ。『ドール人形』などと言われていたが、零斗は知っている。恐らく、今を生きる魔術師達は図書館の魔術師の知っている。

『魔道書回収集団』の『人形』——作られた魔術師のことを。

零斗は言われた通りにプリンカバリスパバレ白吸色球へと向かう。

図書館の魔術師を信じて。

——行くぞ。

グラビティアダム
「……重力の洪水!」

魔術には、特に空間に干渉する魔術には必ず有効範囲が視認は出来ないものの存在する。

プリンカバリスパバレ
零斗は『白吸色球』に座標をあわせ、術式を展開する。

そして、その球が少しづつ。本当に少しづつ落ちてくる。

今、零斗はその球の周りの重力に干渉し、重力を2倍以上にしている。

有効範囲外まで白吸色球プリンカバリスババレを降ろすことが出来れば、後は自然落下プリンカバリスババレを始める。ビルで言えば地上15階ほどの高さに存在している白吸色球は一度落下を始めたならば、地上へ墜落した時の衝撃に耐えられないはずだ。

だが、半径1メートルはあるであろう球に魔術を使うとなると、自然と使用範囲も大きくなってしまう。

それにより、同時に魔力の消耗も激しくなる。

さらに使っているのは黒魔道書ブラックスベル。同時に生命力も使用しているため、疲労が見え始めるのも早い。

「——がつ——」 「——は——」

後ろから爆発音に風きり音、様々な音が入り乱れている。けれど、それを気にしている余裕は零斗には無い。

——後、少し！

プリンカバリスババレ
白吸色球はふっ、と下方向への運動を始める。

見る見るうちに落下と同時に速度を増していき、

ガラスが割れたような粉碎音と同時に、世界に喧騒と色が戻った。
が、

零斗がつい声を出そうとした時、空間断絶魔術が展開され、1つの風刃が零斗を魂ごと刈り取らんと迫ってくる。

——なっ！？

零斗は体を無理矢理動かしその風刃を避ける。今度は腹部付近の服を持っていかれたが、外傷は無い。

「また……か。またお前達は」

唸るような声、聴いたことのないような声。そこに含まれているのは明らかな怒気。

「また！ 私から全部持っていくつもりか！」

声の主は、平真だ。声の先にいるのはあの——図書館の魔術師だった。

「お、まえ……何故」

そこにいる。

協力してくれた図書館の魔術師は対立するように立っている。そして、淡々とした口調で零斗達に告げられる。

「任務、更新。関係者を殲滅、及び……魔具を回収」

零斗は黒魔道書を分解し、しまう。代わりに白魔道書を手に持つ。
黒魔道書及び禁魔道書は特殊な術式の代わりにか、防御術式の展開が出来ない、よって自らの身を防御術式で守るにはもう1つ魔具が必要なのだ。

現在、零斗は立つのも少しだが辛くなってきた。魔力多大に使用したのもあるが、黒魔道書による生命力の同時消費も大きい。少しぐらつきながらも零斗は図書館の魔術師を見る。そこにはすでに術式が3つ展開されていた。

先ほどの、『模造品』もしていた、3つの術式の同時展開。

それは、普通の魔術師には到底無理なことであることは百も承知。同時に3つの魔術を操るなど、零斗には出来ない。

けれど、今は「連立魔術が出来るか出来ないか」が絶対的な勝敗条件ではないが、実力差があるという事実は否定できない。

図書館の魔術師が展開した3つの術式からそれぞれ火球、風刃が射出される。

平真、零斗は防御術式を使える。一直線方向に向かってくる魔術を2人は防ごうと防御術式を展開。

「――泉涼っ！」

平真が叫ぶ。同時に巻き込まれた存在を思い出す――黄希島を。
「つくそ！」

3つの術式は、それぞれ零斗、平真、黄希島を目標とされていた。零斗は防御術式を展開するとそれを背に向け、黒魔道書を構築し、開く。開くと同時に飛び込んできた術式の名を口にする。

「魔術断絶空間展開！」
イクテイスピエス

魔術断絶空間は「空間の魔力濃度に干渉すること」ができる。
イクテイスピエス
それを利用し、空間。つまり黄希島の周りを魔術断絶空間で囲んだのだ。

黄希島は一般人であり、魔術師ではない。なので魔力を奪うような空間だろうと関係は無い。

「きゃ——っ！」

火球は黄希島の目の前で、何かに吸い込まれるように消えていく。
イクテイスピエス
零斗の展開した魔術断絶空間により空間へと入った魔術は全て魔力ごと消滅したのだ。

魔力がなくなれば魔術は存在できないのである。

「はあ、はっ……あ、く、そっ」

膨大な魔力、生命力を要する黒魔道書は本来多用する物ではない。
ブラックスペル
一般的な魔術師の3倍以上の魔力を体内に蓄えられる零斗でも限界は勿論存在する。

「……魔術師」零斗は片膝をつきながら言う「お前、何故こんなことをする。あれを壊したらよかったんじゃないのか。約束もしたろ、魔具を取り上げないと。お前は、魔術師か？ それとも、本当に只の人形か？」

「村……雨」

後ろでは平真の声をする、恐らく黄希島を守りに行ったのだろう。そのほうが零斗も全面に集中できる。

図書館の魔術師は答えない。

無視しているのか、それとも考えているのか。それすらも分からない。

だからこそ、零斗も言葉が続ける。

「人形なら、お前が俺が聞いたような只の人形だっていうなら」

——本当に、そうなのだったら。

「俺が——俺が壊してやる！」

零斗は立ち上がる。

魔力も生命力もほとんど無いだろうに、黒魔道書ブラックスベルを使うための魔力もほとんど残っていないだろうに。

けれど零斗は立ち上がり、図書館の魔術師を見据える。

「――」

図書館の魔術師は、聞き取れないほどの小声で何かを言った瞬間。術式が再び2つ展開される。残り1つは防御に回したのだろうか。今度は、巨大な風刃が10個ほどの小さなブーメラン状になり、零斗の全方位から飛来する。

――防げない。

零斗の思考に言葉が浮かぶ。

防御術式は1方向に1つだけ展開できる、つまり全方位からの攻撃には対処できないという弱点を持っている。

零斗は苦肉の策にでる。

膝を曲げ、身を屈ませ自らの周りに、魔術断絶空間イクテイスピエスを展開し、迫る魔術を全て打ち消そうとする。

成功はした。零斗の目の前で全ての魔術が消えていく。

しかし、それは同時に自らの魔力も全て奪い取る。

「はあ、あつ……」

目が霞む。頭がふらつく。支えられない。膝をつきかける――。

霞む視界、薄れる思考の中爆音。何かが爆発した音が零斗の聴覚に届いた。

同時に、崩れかけた零斗を支える者。

「初めてだから、どうなるか分からないけどさ。ありがと、泉涼を守ってくれて」

耳元にした言葉が止むと、霞んでいた目が、ふらついていた体が、少し自由になる。

――動かせ……る。

「泉涼を、頼むね。村雨君」

何者かが倒れる音がし、同時に後ろを振り向くと、横たわり、呼吸が荒くなっている平真がいた。目も瞑られている。

「平真……」

零斗は倒れた平真に向かって大声は出さない、何をしたのか分かったから。

平真がしたことは他人に向かっての魔力供給。自分の魔力を他人に分け与える。

しかし、魔力を他人に分け与えるにはかなり微細な魔力コントロールがいる。

魔術師に備わっている自らの魔術回路と呼ばれるいわば魔力を通す血管のような物を理解し、さらに相手の魔術回路までも理解しなければならぬ。

その魔術回路に、魔力を供給するのだ。

そして、今平真は倒れて息も荒く、目も開けていない。

最低限の生命力と魔力を残しそのほかを全て零斗に渡したことは明らかだった。

そのことが分かったからそこ、零斗も騒がない。

「華里ちゃん！」

大きな声を出し、黄希島が近づいてくる、そして平真の隣に座り込む。仕方の無いことだろう。黄希島は平真の親友、と自ら豪語していた。そこに嘘は無いだろう。

「黄希島さん、平真は大丈夫だから、2人とも下がってくれ。あいつは、俺が止める」

「……はい、分かりました」

零斗は振り返りはせず、前へ進む。

魔術師の前へ、人形の前へ、黒と白の魔道書を持って。

——しかし、どうする。

決意を胸にしても、結果がついてこなければ意味が無い。今ここで、あの図書館の魔術師を止める手段を考える。

相手は術式を3つ。こちらは1つずつしか展開できない。実力の差は大きい。さらに魔力も有限、今から生命力から魔力を練る暇も無い。

——魔術断絶空間を使えば同時に魔術を消すことも……。そこで零斗の思考は途切れ、別の思考へと繋がる。何か引つかったのだ。

何故、あいつはそう言った。

『貴方たちに協力してもらいたいが、ある』『貴方は使える。それを、取れば』

あいつはなんて言った。

『人形如きが、これを破壊できているのか』

——まさか。

零斗は1つ、可能性にたどり着く。それは、この状況では唯一の光。

——やってみる、か。

いや、やるしかないのだ。この状況を好転させるには、それに賭けるしかない。

これ以上魔力は無駄にできない、平真から与えられた魔力だ。

状況は絶望的であることに間違いは無い。だが悲観はしていない。止まるなどという選択肢はもう無い、零斗は前へ歩み続ける。もう、決めたのだ。

魔術師は魔術を放つ、全て零斗へと向かっていく。

その全てを黒魔道書をもって消去する。

「水魔道書」

白は青となり、零斗の手に収まる。

これ以降。黒魔道書は最後の最後まで温存しておく必要があるのだ。

「上昇流」

零斗は術式を展開し、図書館の魔術師を囲むように水柱が噴出する。

約2秒後、瞬間的に水柱は吹き飛ばされ、飛散するのだが——次。

炎弾が魔術師の人間で言う死角より飛来する。

魔術師は防御術式で炎弾を防ぐものの、零斗は見逃さない。

一瞬、防御術式の展開が遅れたことに。

次、零斗は炎弾が防がれることを予想し、次なる死角へと回り込む。

今度こそ、ブラックスベル黒魔道書を手にする。

そう、これで終わりになるはずだ。

何故なら、イクティスジェス

「魔術断絶空間——」

今までの魔術は目くらまし、

「展開！」

本命は、やはりブラックスベル黒魔道書だ。

零斗は図書館の魔術師の後方、つまり人間で言う死角回り込んでいた。

もし、図書館の魔術師が360度の目を持っているなどということがあれば、この作戦は成り立たなかったであろう。

けれど、その前の魔術で確かにこの魔術師にも一瞬反応が遅れる箇所——死角があることを調べていた。

魔術師の周りに魔術断絶空間が展開され、次の瞬間には魔術師は、膝から崩れ、動かなくなり、世界に色も、音も全てが戻ってきた。

1度息を吐き、零斗は眼鏡をかけなおす。

——やはり、か

零斗の思ったとおりだった。もう一つの理由。

図書館の人形、それは人間でないことを意味する。

つまりは、「生きていない」。ブラックスベルだから、生命力を要する黒魔道書が使えない。

そして、「生きていない」が「動いている」、それに魔力を使っているということになる。

体を動かすのにも魔力を使っているのならば、イクティスジェス魔術断絶空間の効

果範圍内に入れると、全魔力が失われ動けなくなる、ということだ。図書館の魔術師は倒れたまま動かない、今は人間で言う仮死状態のようなものか。

「村雨さん！」

黄希島の声が届く。

「ああ、大丈夫だ。黄希島さん、俺の家が近くにあるから、一緒に平真を運んでくれないか」

本来ならば、男が1人で運ぶようなところかもしれないが、息も絶え絶えな零斗にそのような余裕はない。

零斗は図書館の魔術師も担ぎ、家へと向かった。

零斗のベッドに平真を寝かせ、図書館の魔術師を端に置く。

そこで、零斗は、気が緩んだのか——意識を失った。

1月？日（？）

零斗が目を覚まし、体を起こす。先ず時計が目に入り時間を見ると、1月15日15..45とデジタルな文字は言っていた。

1月15日（日）

その後、平真と黄希島は家へと来た。

というより、零斗の携帯に電話が来たのだ。留守電は5件ほどあった。

話を聞き、零斗は1日しっかりと寝ていたということを知る。

同時に、あの零斗の父の姿をしていた魔術師も、倒せたことも知った。

どうやら図書館の魔術師とともに、平真も協力していたらしい。今もあの魔術師は部屋の端にちょこんという。無論活動してはいない。

「——んでさ、いやゝ、ほんととあの時の泉涼面白かったんだよ」

少しの間、2人の話を聞く。

「そ、それは華里ちゃんが『これって、捨てていいのかな?』なんて言うから……」

「だ、だってさ、必至に『駄目!絶対に駄目!』なんていうから……あははっ!」

困惑し、慌てふためく黄希島をよそに平真は笑い続ける。

「まあまあ。落ち着いて泉涼。――あ、それでさ、村雨君」

急に平真に話を振られる、恐らく、今回の本題についてだろう。

「何だ」

「あれ、どうするの?」

あれ、とは図書館の魔術師のことだろう。部屋の隅に放置している状態なのである。

「頼む。少しでいい、あいつに魔力を供給できないか?」

「うん……分かった!」

言いながら、平真は魔術師の隣に移動する。

「……………」

数秒の沈黙の後、平真は顔を上げ、

「終わったよ」

と、宣言。その言葉と同時に図書館の魔術師はうつすらと目のみを開ける。

「何故、これを、壊さない」

開口一番、図書館の魔術師は自分を壊せと言う。通常ならばそうであろう。図書館に恨みを持っている魔術師というのは多い、動けない敵を見つけたならば壊す、という選択肢もありだろう。けれど、零斗はそうはしない。

「お前に聞きたいことがあるからだ」

零斗は即答し、続ける。

「どうして俺達を攻撃した。あれを壊したらそこで終わりじゃなかったのか」

「上からの、任務更新。けれど、今は、その連絡線が、復旧して、

いない」

魔術師は目と口だけを動かし話す。魔力がまだ回復しきっていないのだろう。

しかし、あと数分もしたら話せる時間も終わりだろう。

それまでに話を聞かなければならない。そして、話をつけなければならぬ。

プリンカバリスババレ

「白吸色球、あれは一体何だ」

気にはなっていた。けれど、訊く暇が無かったのも事実。

「推測。数年前からそこにあり、此処には無いもの――」

話によると、あの球は数年前からこの茜ヶ崎市の『向こう』で着々と準備が進んでいた巨大な術式。『特殊術式』と呼称される種類の術式だ。

『特殊術式』は元来、大人数の魔術師が同時に術式を展開したり、長年に渡り一定数の信者が祈りを捧げることで発現したりと様々な方法や種類があるが、やはり1人で展開するような代物ではないことは確かだ。

図書館のほうでもここ3日間で急に存在が確認されたのだと言う。向こう。とは世界の裏側。零斗たちのいる世界を表とするなら、それは裏。

そして、派遣されてきたのがこの名称不明の図書館の魔術師。

あの村雨の父に瓜二つの魔術師は11年前に死んだとある魔術師の遺言で動いている、とのこと。

その遺言の詳細までは分からないが、行動理念になっている言葉があるとのことだ。

ずっと魔術師は争いを続けてきた。

特に規模の大きな争いとなるとその中心はいつも『聖魔道書』通称『聖書』と呼ばれる魔道書の頂点に位置する物と、『魔術特区』である。と図書館の魔術師は語り続ける。

零斗達が、質問していないところまで。

「「「……………」」」

3人は黙る。否、絶句している。3人のうち1人はさらに全くわかっていないが。

「なんで」

初めに口を開いたのは平真だ。

「なんで、そんな事を知ってて、それに、話してるの？」

それは零斗も思ったことだ。重要であろう事をこうも簡単に話しているのか。

「……推測。魔力の、完全消滅による、機密術式の破損」

機密術式とは機密とされている言語を制限し、それを発言させないようにするための防衛機構プロジェクトの1つ。常時思考をしていると言っても過言ではない人間に施すようなものではなく、図書館の人形全てに施されている術式のことだ。

破損している、ということはこの図書館の魔術師が持っている知識を制限無く話すことができると言うことだろう。

「そう、か。なあ、あの魔術師は何なんだ」

あの魔術師。あの変な世界の中の零斗の父に瓜二つな魔術師。

「あれも、作られしもの。魔術師、村雨玄界の、『模造品』」

作られしもの、ということはどちらも同じ人形のようなもの、ということなのだろうか。

「……あれもお前らの仲間なのか」

もしかしたら、今回のことは仲間同士の争い、なのかもしれない。「違う。これらと、あれらは、似て非なるもの」

「じゃあ、あの魔術師は、何故父さんと同じ顔をしている……!」

「あれは、これらの、生成技術を、流用させた『王室』独自の『人形』」

『王室』とは、図書館と対立していたイギリスにある組織の名前らしい、数年前に図書館が争いに勝ち、滅んだとされているのとどこだ。

その残党が、今回の事件の首謀者。

——それが、あの魔術師の正体、なのか。

何故玄界の姿をしているのか、気にはなったのだが滅んでしまったと言い、さらにこの図書館の魔術師が話さないということはこのものには知らない事柄なのだろう。

図書館の魔術師は体を少しだが、動かし始める。少しずつだが魔力が回復しているのだ。

零斗が思ったより早くその時は近づいている。

図書館の魔術師が消えるその前に1つ。必ずしておかなければならないことがある。

「最後に頼みがある」

零斗は先に、それを口にする。

「図書館の奴らに言っといってくれないか。俺達の魔具を回収するな、と」

「できる、限り――」

そのあとすぐ、図書館の魔術師は――消失する。

「ねえ、村雨はあれでよかったの？ 逃がしちゃって」

「別に構わない。あいつは、何もしてないからな」

「そっ、か」

その言葉を最後に沈黙が訪れる。そして、その沈黙を破ったのも平真だった。

「――あ、そういえば！」

パンッ！ と、何かを思い出したように手を合わせながら、

「泉涼のこと、言っってなかったよね」

そういえば、と零斗は思う。何故あんなところに黄希島がいたのかと。

「泉涼は、魔力を感じれるみたいなの。でも、魔術師って訳じゃないよ」

体内に魔力が無いということは魔術断絶空間イクテイスピエスに入った時に証明されている。

そこで、黄希島は、

「だから、……昨日、なんだか変な感じがして、屋上に行ったら、2人がいて、入れそうに無い雰囲気だったから少し聞き耳を立ててしまったんです。そしたら、あの場所で10時って言っていましたので……」

親友である平真が心配で、来てしまったとのことだ。

「……えと、その。ごめんなさい!」

黄希島は素晴らしいほど思いっきり頭を下げる。多分135度はあるだろう。

——……はあ。

こうなってしまうては負けである。

「別に構わない。黄希島さん、頭をあげてくれ」

黄希島の件が一段落したところで平真は黄希島と零斗に対して言う。

「そういえばさ、2人とも今から暇?」

零斗はこの次にやらなければならないことを思いつく。

「……問題ない」

零斗は答え、

「華里ちゃん、何かするの?」

黄希島は疑問に思っていた。

けれど、平真と零斗にはまだやることは残っている。黄希島に対して。

そう、黄希島に零斗と平真が——魔術師だということを話すことが。

魔術師と黒魔道書（後書き）

ここまで読んでくださった方、真にありがとうございます。

今回書いた小説は魔術物と思っています。

色々と専門用語が多いので読みにくかったとも思います。

初めて投稿、ということでも前文でも触れていますがやはり稚拙な文です。

これから精進していききたいと思います。

一応、この魔術物のシリーズを書いていこうとは思っています。
一つ一つを2万〜3万文字程度で書いています。

……あとがきとは何を書けばいいのかわからなくなってきたので
ここで終わらせていただきます。
ありがとうございました。

1月11日

魔道書回収集団には、相反する魔術師達がいる。

元は魔具を守ろうとして、または魔道書回収集団の人形を壊すために組織された『ギルド』と呼ばれている魔術師達。

ギルドには本部と言うものが無い。それぞれの思想に同志が募り、複数の集団ができているのだ。

魔道書回収集団を目の敵にするもの。一般人に魔術師と知られて迫害された者達。

元々は魔具を守るためにできた集団だったが、姿を変え続けている。

そういった者達が集まり、ギルドは今なお増え続けている。

ギルドは全員魔術師で構成されている。最近の『図書館』の回収活動の活発化により、自衛のためという理由もある。

数十年かけても『図書館』が全ての魔具を回収できていないのは『ギルド』の影響も大きい。

2023年1月11日（水）

茜々崎市に住む一人の高校生がいる。彼は高一で、とある者である。

それは――魔術師。現代に生きる魔術を使う者。

「だああああ！ 面倒せええええ！」

そして彼――桐野張月きりの はりつきは魔術師である。その彼の隣にはある人がついている。

「本当に何もしていないとは、ある意味御見それしましたよ。張月」
彼女――澄崎鏡すみざき かがみは『想造家』クリエイターと言われる人だ。魔術師であり、魔具を、魔道書を創れる者。

それも、五大元素から外れた魔道書も創る。いわいる、『禁魔道チャデー

書』と呼ばれる魔具だ。

『禁魔道書』
デイチャ

それは五大元素と関連し、反応する普通の魔道書と違い。例えば、重力、濃度、音、触覚。等様ざまなものに対して関連する魔道書の総称である。

しかし、禁魔道書には欠点もあり防御術式が展開できない、及び魔力の多大な消費とある。

さらに、ここ茜々崎市は『魔術特区』と呼ばれる魔力濃度が極端に高いところである。

「悪かったよ！ ああ、悪かったって！ でもさ、やっと昨日見つけたんだってこのプリント！」

昼休み、学生である彼らは図書室にいた。何をしているかという宿題だ。二人の宿題というわけではない、張月の冬休みに残っていた宿題を教えてもらっているのだ。

張月は馬鹿だ。自他共に認める馬鹿だ。

昨日、張月は宿題のプリントを見つけたのまではよかったが、見つけるまでで力尽きてしまい眠ってしまったのだ。

無論、寝ている間に勝手に手が動いて宿題をしている等ということなど無く、今日の朝から格闘していた訳なのだが……張月の頭では終わるわけも無く、学年で一〇位以内に常に入っている幼馴染の鏡に助けを求めた、ということだ。

鏡は流石と言うべきか、張月の分からないところ（ほぼ全問）を少しヒントを出しながら、最後に答えを出させるのは張月という、教え方をしていた。それはさながら家庭教師のような感じであり、思わず「先生！」と口走りそうになってしまいそうだった。

「（全く、そんなだから私の魔道書を理解できないのですよ）」
鏡は途中で、張月にだけ聞こえるような声で言った。

「（……分かってるよ）」

張月は魔術師だ。しかし、魔具を扱えない。いや、扱えない。魔術師として理解を深める前に両親が亡くなり、魔具も失ったから。

「（おやおや、でしたら私の魔道書をお貸しますよ）」

魔具もなく、ある理由から一時期精神状態がまともではなかった頃があり、魔術というものを知ろうとしなかった。

故に、生きることに関一杯だった張月は魔術師としての常識が無い。無知と言って良いだろう。

「（いや、先ず読めないからいいや）」

……けれど、それ以前に、張月には「理解を深める」等という選択肢は無かったのかもしれない。

そして、予鈴が鳴り響いたのと同時に、

「やっと……終わったあ……」

昼休みの四〇分をフルに使い、やっと宿題が終わった。今日は六時間授業なのに七時間目があるような気分である。

——……あ、そういえば昼飯食ってない……。

ふと、鏡の方を見る。彼女は昼休みの初めから手伝ってくれていて、それに図書室は飲食禁止である。

「鏡」

「何か呼びましたか。それとも、今の自分の大変面白顔を見るための鏡ですか」

「え？　今俺そんな顔して……じゃなくて！　ありがとな、手伝ってくれて。助かった」

「……いえ、特に礼を言われることではありませんので。それに、それくらい自分でしゃがれ。ということですよ」

「はははっ、分かったよ。できる限りな」

そう言うのと、鏡は「全く……」と半ば飽きられたように言う。その通り、張月の「できる限り」は範囲がものすごく狭いのだ。そして二人は教室へ戻る。

魔術師、もしくはそれに順ずる者達は基本的にその正体を隠しながら生きている。それは今や魔術師にとって『当然』であり、常識ともなっている。魔術師は『防衛機構』と呼ばれる魔術の行使を故

意のものにするための術式を施した物を最低一つ身につけている。
例えば眼鏡、指輪、ネックレス等、基本的に装飾品が多い。

だが、張月はそれを持たない。否、持つ必要が無いのだ。魔術を使えないから。

放課後。お互い近くに住んでいる二人は一緒に下校している。

——…なんだ？

何か、変な感覚がした。何かがぶつかって歪んでいるような……
そんな言葉で表せない感覚。鏡を見る。鏡は無言で頷くと、鏡は張月の前をやや小走りに走り出し、その感覚の元へと向かう。

そして、二人は立ち止まる。そこは裏道なのだろうか、周りをコンクリートで囲まれているが、やや広いスペースのところだった。

——…あれ？ あれって、同じ制服？

張月の視界の端にそういう服装の人が見えた気がした。二人組みで、一人の肩にもう一人が支えてもらっているような図。

「……これは……火、ですかね。それに人数は三人……いや、二人？」

鏡は珍しく歯切れが悪そうにそう言った。疑問系を聞くなんて本当に何年振りであろうか。それほどに、鏡の疑問系というのは怖い。

「どうした、鏡」

「……人形……」

——は？

張月は全く言葉を理解できなかった。意味が分からない。

「それについて、詳しく教えてはくれないか？ その二人」

「！？」

急に、男の声が二人の間へと入ってきた。見るとそこには筋肉質で身長は一八〇オーバー。外見二〇代後半である。

「お前らは魔術師か。俺はギルド『魔閃の剣』エレクトユニエビのカーチェと言う」

「ぎル……ど？」

訳が分からなくなっている張月がいた。その姿を見てか、カーチ

エは顔をしかめる。

「ん？ 何だ、魔術師の癖にギルドも知らないのか」

カーチェはそれが常識だといわんばかりに言う。少し張月の癩に障る言い方だった。

「知らねえよ。てか何だ。急にできて訳の――」

そこで張月の右手に冷たい感触がする。それは鏡の手だ。鏡は両手で張月の右手をしっかりと掴みながら、

「申し訳ありません。私達はこれから用があるので貴方に付き合っている暇はありません」

鏡は張月の手を取りながら歩いていきカーチェの隣を通り過ぎる。その時、張月はふと後ろを振り返ると、そこにはこちらを見ているカーチェがいた。

「なあ、鏡どうしたんだ急に」

「……」

鏡は無言のまま歩き続ける。張月の右手を握ったまま。そして、近くの公園に来たところで手をやっと離し、向き直る。

「……張月、一つだけいますね」

そこで一度鏡は言葉を切って、

「あの男には、今後会っても、決して関わってはいけません」

「何で？」

「――関わっては、いけないのです」

はっきりと、その言葉を発する。それは鏡の強固な意志であり、他の追隨を許さない。

結果、張月は何も言うことはできない。ここまで、ここまで頑なに拒否しているのだ、恐らくこれ以上言っても同じ言葉が返ってくるだけであろうことは明らかだった。

――何なんだ……。

「……分かった」

その言葉を張月が発するのに、三〇秒はかかった。その間、じっ

と鏡は待っていた。

張月は家に帰るとすぐにベッドに突っ伏した。

——…疲れた。

肉体的な疲れよりも精神的な疲れだろう。一日かけて宿題をした後に、変な感覚。あの男。

そして——鏡の言葉。

——くそ……何だってんだ。ギルド？ エレクトユニエビー 魔閃の剣？ 関わるな……

わっかんねえ！

張月は頭を抱える。が、彼の無知な頭では理解はおろか、さわりを分かるという事もできないだろう。

ふと、立ち上がり、棚においてある写真を見る。両親との写真だ。三人、父、母、張月。と皆が笑って写っている。……両親が死ぬ三日前の写真だ。

あのときの張月は運がよかったに過ぎない。偶然、本当に偶然だった。友達の家に遊びに行っているまの出来事だった。家に戻っても、絶望しかそこにはなかった。

そして、その後張月は澄崎家に、つまりは鏡の家に引き取られた。元々交流も深く隣通しということからだ。その事件は魔術によって起こっている、よって普通の搜索では何の手がかりすらなくそのまま迷宮入りと言われる事件になった。そんな張月に魔術師について教えたのは澄崎家、というよりも鏡だ。

だが、張月はその頃無気力状態であり、精神的に参っていた。だから、魔術ではなく、魔術師について、自分なそんな存在なのだということのみ伝えている。

ピンポン、と部屋の中に軽快な機械音が響いた。

——誰だ？ こんな時間に……。

『私です。開けてくれませんか、両手がふさがっているのです』

「了解」

聞き覚えのあるその声がしたので、すぐに切り、ドアへ向かい開

ける。

「全く、母の料理好きにも困ったものです。三人しかないのに軽く五人前は作るのですから」

と、鏡が両手に鍋を持ちながら入ってきた。

「うお……これまた大量だな……」

「ええ、本当に。ついでにここで食事を取りますがいいですか」

「ああ、いいぞ。テーブルの上に置いておいてくれ」

――スプーンスプーン、それに皿つと……。

張月は台所へ向かい、必要なものを取り出す。鏡は、時折こうして張月と一緒に晩御飯を食べることがある。鏡も彼女の両親も張月のことが心配なのだろう。

――本当、仲いいよなあそこは。けど、いつものこととはいえ、一人で出かけさせるのはどうなのだろうか……？

そんなことを考えながら運ぶ、料理を特に温めなおす必要は無い。何故なら張月と鏡の家は徒歩で三分ほどの距離だからだ。今、鏡にあの男のことを聞こうとは思わなかった。『関わってはいけないです』その一言が全てを足止めしていた。

「張月、一つ聞きますね」

「はに？」

二人は持ってきてくれた大量のシチューを食べながら話す。

「『魔術刀』というのを知っていますか？」

「ひんや、ひんねえけど」

――相変わらず美味いな……どうやったらこんな美味くなるんだ？
実際、口に物を含みながら話しているのは張月だけだった。

「魔術刀は張月のような魔術の使えない魔術師の救済措置として作られました。まあ、ほとんどは魔具を使っているのでこれを使う人はあまりいませんが……普通は」

――何だろうな……本当に何を入れてるんだこれ？

「それを、張月に持ってもらいたいのですよ」

「は？」

そこでやつと張月の箸は止まり、そのまま鏡の顔を見る。

「それを俺が持ってどうなるんだ？ 別に魔術は使えないし、魔具だってもうなくなっちゃったし」

「あくまで自衛、です。魔術刀は魔具ではありません。故に、所持していても狙われることはありません」

「だから、何で俺が持たないといけないんだ？」

張月がそういうと、鏡は「はあ」とため息をついて。

「もう、狙われているのかもしれないですよ。私達は」

ギルドと呼ばれる集団の一つ。魔閃の剣。エレクトユニエビ構成員は数万にも及び、

それが世界中に散らばっているらしい。ギルド名の通り、彼らの大半は基本的に魔術刀を使用し、と戦いつている。そして、魔術刀を使っているため『図書館』からも狙われにくいという利点もある。

エレクトユニエビ近年魔閃の剣の巨大化が進んでいて、精神は「正々堂々」らしいが巨大化に伴い統率が難しくなり。その精神を守っていない人が多くなってきたるのが現状とのことだ。

「——ということです。分かりましたか、張月」

「……………、すまん、さっぱり分かん」

「はあ……だとは思いましたが、分かりやすく言うんですね」

そこで一度鏡は言葉を切り。

「『テメエの無事は保障できねえから自分を守る術を身に付けやがれ！』ということですよ」

「わ、分かりやすい説明ありがとう……」

やけに迫力のあったそれを聞いて、張月は頷く。

「いえ、それほどでも」

「……それで、何で俺たちが狙われるんだ？ 俺何も知らねえぞ？」

「そんな事、相手が知っていると違いますか？ 張月が馬鹿な事など知ってないと分からないのですから。そして、もし分かった場合でも、その張月を盾に何かしらのアクションを起こすかもしれない。ですから、そうなる前に自衛、ですよ」

「なるほどなあ……ほんと、鏡は色々知ってるんだな」

「『常識』あたりまえですよ」

わざわざそこを強調させて言った。

そして、明日の昼休みに屋上で渡すと言って、家へと送り今日を終えた。

間章 1

間章―1

フランス…魔道書回収集団本部 第三階

同刻。舞台は変わり、フランス。魔道書回収集団本部。

「おい『北』テメエどうなってんだ」

魔道書回収集団は第一階、第二階、第三階、と三つの上層部で構成されている。そして、『第三階』は魔道書回収集団の運営を任されている。それぞれ『北』『南』『東』『西』という四人で構成されていて、本名を知るものは第一階の魔道書回収集団のリーダーしか知らないという。

「はてさて、何のことかさっぱり分かりかねますが。ちゃんと主語をつけてくださいな」

『北』に対して、言い寄っているのは『東』だ。

「ぐ、うっせえな。あいつが何であそこに行ってるんだ、って聞いてんだよ」

「そうですね。あの魔術特区に何故「あれ」が行っているのか、知りたいかもしれません」

そこにもう一つ声が入ってくる、それは『南』と呼ばれる女性。

黒髪のアトレート、しかし外見は明らかに外国の人のそれ。透き通る声はまるで迷える子羊を導くかのような声であり、口調だ。

「おやおや、『南』さんまでいらしていたとは。……しかし、私は何も知りませんよ。全て『あれ』が独自の思考で向かったに過ぎませんし、考えを読むこともできません」

「『北』の命令ではないってのか？」

「そうしても、私にメリットが何一つとして存在しないのですが」

『東』の質問に、即座に『北』は答える。それは本当に知らないことを強調させていた。

「まあ、『北』さんもそこまで暇ではないでしょうからねえ。けど、

わたくしは『あれ』に少しばかりは興味がありますので」

『南』は、その意見に賛同した。

「『あれ』は本当に特別ですからね。……あの、『聖書』内包している人形は」

「あくまで人形扱いか、かわらねえなテメエはよ」

「ええ、それは勿論。ならば逆に『東』さん、『人形』は『人形』。それ以外のなんて言うのですか？」

「……けっ、オレはテメエのそういうところが嫌いなんだよ」

「嫌うなどご自由に、別に私に何も思いませんから」

「ほらほら、お二人とも、喧嘩はお止めなさい」

『北』と『東』は同じ組織に属していながらとにかく仲が悪い。そして、その二人の仲裁をしているのはいつも『南』だ。

1月12日

1月12日（木）

朝、伸びをして、欠伸をして、目をこすって、気持ちよく朝を迎えた。

「って！ もう七時五〇分！？」

……そんな気がただけだった。学校が始まるのは8時半。いつも起きる時は7時。つまりは遅刻しそうなのである。

——目覚ましは！ 何で鳴ってない！

そして、目覚まし（一二時間表記）を見ると見事に午前七時ではなく午後七時にセットされていた。簡単であり、迷惑なミスだ。これでは晩御飯の時に邪魔されてしまう。

——って、そうじゃねえ！ これだから十二時間表記ってやつは！ 仕方なく朝を抜いて学校へ行こうと準備を進める。着替えて、荷物の確認。今日は体育があるので体操服を持っている。

そして、仕方ないから今日が学食で昼食を済まそうと思い、財布を見ると——銀色の丸いのが三枚、三〇〇円だけが入っていた。

——しまった！ この間セールがあって買い置きしてるんだった！

きっと今、冷蔵庫の中では「料理してくれ〜料理してくれ〜」という野菜たちの叫びが聞こえそうな気までしたが、何とか振り切る。張月は基本的に自炊している、弁当も、食事も全てしている。

——畜生……俺はこいつらを料理する時間もないのか……。

ピンポン、と昨日と同じように軽快になる機械音。がっくしとうなだれ、今にも少し涙が出てきそうな感覚の中ドアへと向かう。そしてドアを開け……もう一度うなだれるはめになった。

「おや、何をしているのですか。もしや、さっき起きたとかではないですよね」

凶星を突く鏡の言葉とともに、彼女の手にいかにもおいしそうな

メロンパンが入った袋がぶら下がっていたのだ。

「イ、イヤ。ソナコトナッテバ！ ハハハ！」

そんな明らかに自分でも分かるくらいわざとらしい笑いをしながら張月は家の中へと戻りかばんを手に取りもう一度外に出た。

張月が歩き出そうとした時、

「どうぞ」

と、鏡が右手を張月の前に一つの物を差し出した。

「こ、これ……いいのか？」

「ええ、私はもう朝ごはんは食べましたし。それにこの二つは貰い物ですから」

「おおお！ ありがとう!!！」

張月はまるで神を崇めるかのごとく両手を合わせ拝み。その右手にあるメロンパンを食べ始める。

「ふまい！ あのおっちゃん何か入れたのか？」

「ええ、『これが、真・メロンパンだあああああああ!!！』
と言っていましたし……」

そこで鏡も一口食べる。

——ほんと、あのおっちゃんはテンション高いないつも。

「……確かに、いつもと違いますね。パンの知識は無いので何が、
と言うのは分かりませんが」

おっちゃんというと、鏡の家の近くにあるパン屋のオーナーのこ
とだ。おっちゃんに感謝しながら食べて……あとで気づいた。

——やべ、飲み物もってねえ……。

得てして、パンという物は喉がひどく渴く。口の中の水分を丸ごと
持っていかれる。そして、今日は昼飯まで何も買ってはいけない。
というか、買えない。

——あ。

さらに、思い出す。今日体育があることを、しかし、それと同時
にほかのことも思い出す。

それは、体育が終わったあとにみんなが群がるその機械。救世主

の名前は――。

「そう！ 給水機！」

「……急にどうしたのですか。黙り込んだかと思えば大声を出してハッ、となりまわりを見るとみんなの視線が突き刺さっていたので、気恥ずかしくなりやや早歩きで学校へと向かった。無論鏡も無言のままペースを合わせて歩いていく。

学校へと到着し、二人は別のクラスなので分かれる。最後に『昼休みに屋上で』と言う言葉を聞き、早速給水機へと向かう。

――のど渴いたなあ……みーず！ みーず！

だが、また張月はその場に跪くこととなった。そこに書かれていた無常なる三文字。

それは、故障中という奈落へ突き落とさんとばかりに図られた三文字。

そして、三時間目。運命(?)の体育の時間である。半そで半ズボンでグラウンドに出ている、そして特に持ち物はない。そう、今日の授業は――マラソンだ。

――いやだあああああああ！

「うっし！ マラソンはじめっぞー！」

無駄に熱血的な先生の指導の下。授業が始まる。張月は走るの嫌いだ。嫌いだ。嫌いだ。今は大嫌いだ。走り、息をするたびに喉に何か張り付く感じがする。

「けほっ、けほっ」

今が冬であることに感謝した。夏だったら確実に脱水症状になれそうな状態だ。ちなみに、体育は男女混合でしており、張月の三組と鏡のいる一組と一緒にしている。といっても、男女は別々にされているので、時折見えるだけだ。

時が過ぎ、昼休み。

こんなにも「喉が渴いた」と思うのは何年振りだろうか。周りの人が言う「喉渴いたな」と言うのはまだまだ甘いというのが身に

しみて分かった気がした。

屋上へと出る。

「さむっ!？」

とりあえず、それが最初の感想で最大の感想だ。風は吹き込み、さらに屋上であるが故、強い。そこに彼女は先に来ていた。

「お、お前。何でそんな平気そうな顔してんだ？」

「さあ、今はそこまで寒くありませんし。ということにしておきましよう」

「い、いや! 寒いだろこれ!」

「次第に慣れますよ。それと張月、これをどうぞ」

「これは……いいのか？」

鏡の差し出したその手中には、一本のペットボトル。見たらすぐに分かる、お茶だ。それもあつたかゝいのだ。張月は受け取るとすぐに飲み始め、一気に四分の三は飲み干す。

「ぶはー! 生き返ったって言うのはこういうことを言うんだな」

「それなら、張月は何度死に掛けているのですか」

と、そこで真剣な表情へと鏡はなる。はつきり言って、表情に変わりは無いが雰囲気はかなり変わった。

「では張月。これもどうぞ『魔術刀』です」

もう一度差し出された手を見るとそこには小さく丸い円柱が掌にてのひら乗っていた。

「へ？」

張月は妙な声を出す。刀という程なので、もっと何かすごいものと勝手に想像していたのだ。

しかし出てきたのは白い円柱。掌で握ると端が少し出るぐらいの大きさ。やや肩を落としながらも受け取るが――、

「何も起こらねえけど、本当にこれ自衛になるのか？」

「張月、貴方は魔術師です」

「いや、知って――」

「魔術師には、魔術回路と呼ばれるいわば魔力を通す血管のような

ものがあります。そこから手に魔力を通す……そうですね、手に入力を入れる感じでいいですかね。そのように『想像』^{イメージ}するので。魔術刀は使用者の想像通りに長くも、短くも、細くも、太くもなります。これを使う際に必要なのは想像^{イメージ}することなのです」

張月の言葉をさえぎっていい、鏡は言う。それ程に大事なことということだ。

——イメージ……か。

張月は魔術を使えない。使おうとしたこともないが、今始めて魔力というのを使おうとしている。

——……やってみっか！

張月はそれを掴み、目を瞑る。そしてイメージする。力を左手に、魔術刀を持っている手に力を——集める。

「張月！ やめるのです！」

眼を閉じている張月の耳に大きな声で鏡の声が聞こえる。

——……え？ 大きな声？

その違和感に目を開けると、何かがあった。

「うわっ！」

目の前には幾重にも折れ曲がり、伸び、まるで歪んだジャングルジムのような形の光の交差。

魔術刀から手を離すと、光は一瞬で消え去り、元の白い円柱へと戻る。

「な、何だったんだ……今の」

「暴走する前に止まったようですね。今、魔力の流れしかイメージしていなかったでしょう」

「……」

張月は自分の手を見ながら開いたり閉じたりしている。

——これが……魔力？

張月は内心驚きと共に喜び、楽しみがあった。初めて自分の中に魔力という物があり、そしてそれを使ったという事実。

それらが今の張月を、笑顔にした。

「――ですので、魔力の流れだけではなく同時に魔術刀の形成も……張月、聞いているのですか」

「ふえ？ ……あ、すまん。聞いてなかった」

「だとは思いましたが……少し落ち着いてください」

そして、先ほどしていたであろう説明をもう一度始める。それを張月は今度こそ聞く。

張月は魔力を流すという行為に集中しすぎている。たいていの魔術師ならば「魔力を流す」という行為は反射と同じようにできるのだと言う。けれど、張月は違う。さらに魔術刀の形成。つまりは刀を『想像』し、『構築』し、そして『保存』する。それらを一度に行うのが魔術刀だ。

そして、魔術刀には慣れれば問題は無いとのことだが、初めて魔力を扱う張月にとってそれは当分後の話だろう。

「――今度こそ、分かりましたか」

「ああ、やってみる」

もう一度、張月は左手に魔術刀を持つ。そして集中する。

――左手に力を流す……それに刀の形のイメージ……。

張月が思い浮かべるのはRPG等でよくありそうな長い、両刃の剣。刀の知識は張月の頭にはゲームで得た知識ぐらいしかない。ゆっくと閉じた目を開け、眼前の刀を見る。目の前の手の中に納まっているそれを。

「……やった！」

そこには確かに思い浮かべたとおりの剣があったが――、

「うわっ!？」

今度は一際激しい光を放ちながら、光の収束と共に消えていった。――あれ？

「やはりまだまだできていませんね。『保存』が全くできていないからすぐに消えてしまうのです。それでは役に立ちませんよ」

「それって、どうすりゃいいんだ？」

「何度も言いますが、大切なのは想像イメージです。これはここに存在して

いる。そう強く思うのです。……ふむ、今のところはこれで終わりですかね、家でちゃんとしておくことです」

そう言うのとすつ、と張月の横を通り過ぎ、屋上と学校を隔てるドアへ手をかける。

「何をしているのですか、早くしないと授業に遅刻しますよ、張月」
張月は意外と深い制服のポケットに魔術刀を入れて、教室へと戻った。

放課後。

今日、鏡は何か用事があるらしく、張月は適当に図書室へ向かっていた。……というよりも、忘れ物をしていたのだ。

昨日の宿題の時であろう、シャープペンシルを一本忘れていたのに気がついたのだ。

廊下を歩いていると、ガタタ！と何かを蹴るような音がし、張月の視線の先には一人の先輩（上履きの色から判断）がいた。

その人はなんだか慌てている様子で、ゴミ箱を蹴ってしまったのか、ゴミが床に散らばっている。

さらに何故かゴミを手で拾おうとしている。

——箒、使ってしないと……。

確実に今のままでは効率が悪い、それどころか終わらないだろう。張月は踵を返し、走り出す。

「あの、これ使ったほうがいいですよ。早いし」

戻ってきた張月は案の定まだ手でゴミを拾い続けている先輩へと差し出す。

「え？」

先輩は不思議そうに張月の顔を見上げ、手をみる。そこには箒と塵取りが握られていた。

「あ、ありがとうございます。……えーと、貴方は？」

「俺は一年三組の桐野張月です」

「桐野くん、ね。私は二年一組の黄希島泉涼きんぎしま みずずといいます。親切にと

うも、では箒の方を頼めますでしょうか？」

「あ、はい。分かりましたです」

と、黄希島は塵取りを構え、張月は掃いていく、やはり文明の利器というか、早い。すぐに掃き終わると片付けた。

「どうもありがとう桐野くん」

「あ、いえ。どういたしましてです」

そして二人は別れ、図書室で忘れ物を無事引き取り張月は家へ帰った。

家の中でもう一度張月は魔術刀を握る。鏡に言われたとおり練習というのをしてみた。

——イメージ……イメージ……。

そう、何度も呟きながら目を瞑る。今のイメージはゲームで海賊が持っていたサーベルの形。

——それと……。

そこに存在すると想像する。鏡曰く、それらが三秒以内にできれば上出来とのことで、今の張月は三〇秒程。一〇倍以上の時間がかかっている。

「ふう」

そこでふと時計を見ると七時になっていた。なので、晩御飯を作ろうとして、材料を一通りそろえようとしたところ……。

「あ」

——今日はつくづく不幸な日だなあ……。

調味料を揃えようとしたら、胡椒が無かったのだ。さらに今から作ろうと思っているのは炒飯。張月的に胡椒が無ければ（張月の中では）完成しない。

結局、昼を抜いている張月は晩御飯ぐらい食べたいものを食べたくて、残っている三〇〇円を握り締め、スーパーへと向かうことにした。

徒歩で五分ほどのところにスーパーはあり、大体の料理を作るの

に必要なものはそろっている。スーパーへと向かい、二九八円で買う。残ったお金は手の中にある二枚の一円玉だ。

——駄菓子も買えないなこれ……。

と、そんなどうでもいい考え事をしていると、ふと、一本の脇道が目に入った。そこは、昨日通った裏道、カーチェと会った場所。張月はポケットの魔術刀を静かに握る、それは本当に小さく細い。ズボンのポケットにも軽く入ってしまう。

鏡は狙われているかもしれないと言った、しかし今の所そんな兆候は無い。

——本当にこれは、持つてる意味あるのか？

その裏道に何かが見えた気がして、目を凝らす、そこには、一人の人が立っていた。

——誰……だ？ 鏡でも、あの男でもない……。

口がなぜか渴く、そして張月は——ゆっくりとそちらへ歩き出した。

まるで、何かに惹かれるように。

「なあ、そこで何してるんだ？ あんた」

そこにいたのは小柄の少女。銀色の髪をしているところから、日本語通じるかな？ と少し疑問を持ったが話しかけていた。

「……」

張月が声をかけると、少女はゆっくりと振り返る。そして、ただじつと張月の目を見る。そこに写る感情を何も読み取れない。

「どうして、ここに、いる」

「いや、何でって言われても……通りすがっただけだから、なんとも」

「貴方は、魔術師、なるほど」

何か一人で納得しているが、張月には何もわからない。

——……って、ん？ 魔術師？ 今魔術師って言ったのか？

「ついに見つけたぞ——殺人人形」

——っ!?

聞き覚えのある声が、張月の視線の向こうからする。そして、ゆっくりとだがその姿を現す。同時に鏡の言葉も思い出す。

『——関わっては、いけないのです』

足が見え、体が見え、そして最後に顔が見えてくる。それは間違えようも無い、カーチェが、そこにいた。

カーチェの鋭い目からは力強い、さらに黒い感情がにじみ出ている。

「お前は……そうか、お前のこいつらの仲間か。ということは、あの女もそうか」

カーチェはすぐさま何かを持つ。それは張月も見ることがある。そう白い円柱、魔術刀だ。

「愚かな人形よ。我が刃の前に駆逐されよ」

カーチェが言うのと右手に持っている魔術刀が一際激しい光を放ち形を変える。それは、巨大な斧のようなもの。その一番先には突き刺すための刃物がついている。

「ハァ!!」

カーチェは問答無用に振り下げ、地面を叩く。ドゴォ!! という轟音とともに地面のコンクリートが抉れ、飛散し張月達へと向かう。

「うわっ!」

張月は反射的に目を瞑る。しかし、来ると思った衝撃が来ない。

——あれ……?

ゆっくりと目を開ける、そこには——、

「お前……何で」

先ほどの少女が目の前に立っていた。よく見ると、少女の前に何かの陣のようなものが広がっている。

「防御術式を二つ……やはり、な」

ちっ、と小さくカーチェが舌打ちした。

「貴方は、部外者。故に、守らなければ、ならない」

そのとき気づく、張月の周りから町の喧騒、風、等が全て無くなっていることに。今あるのは静寂。そしてこれから――、「いくぞ、殺人人形！」

魔術師と魔術刀の戦いが繰り広げられることになった。

張月の目には始めて見る理解できない光景が広がっていた。カーチェの魔術刀が周りのものを容赦なく切り裂いていく。しかし、ただ一つも少女に刃は届かない。

カーチェは思う。

――やはり、空間断絶魔術か……ちようどいい。

魔道書回収集団独自の術式の一つ空間断絶魔術。世界から一部を断絶する空間を展開する術式のことだ。空間内では何が起こっても魔術師以外には場所をつかまれることもなく、何も分からない。

――見られてはいけないということか。

魔道書回収手段の人形がここに何かを仕掛け、そして、それを見られたくないというのならそれは、

――それは破壊せねばならない！

カーチェはギルドの一員だ。目的は人形の破壊という、復讐。それ故カーチェはただ魔術刀を振る。それは生きがいといわんばかりに。

もはや張月には理解できる範疇を超えていた。

――何だ……何なんだこれ……。

そんな最中、張月の左手はゆっくりと動き、何かを握ろうとしていた。

カーチェは間髪いれずに魔術刀で斬る。横なぎ、突き、振り下ろし、多段に攻撃を重ね反撃の隙も与えない。

しかし、それらはすべて二重の防御術式によってそらされ、防がれる。

——チツ、やはり届かぬか。

カーチェは小さく舌打ちをしながら水魔道書スエースベルを手につ。魔術刀は防がれているだけではなく、人形は動きながらも術式を展開させているのだ。

人形は火球を複数出現させ、それらは全てカーチェへと降り注ぐ。

「水断衝フラクチャ」

瞬間、カーチェの周囲、円形に水壁が現れ飛来してくる火球を全て打ち消す。

「壊れろ！」

再度魔術刀の構築。それにより、水壁の中より出現した二メートルはあろう刃が人形へと向かい。鈍い音と手応えを感じる。

——まずは……一回。

水壁が崩れ、カーチェの目の前にあった光景は……。

「何が……」

張月の目の前には張月を庇い、刃を肩に貫通させている少女がいた。しかし、そこからは血が一滴として出ていない。それどころか、表情にも何一つ変化は無い。

少女はその肩に貫通した刃を握り、抜く。

そこには空洞。何も無いように見えたが、その穴はすぐに塞がり、跡すらも残らない。

——何だ……何なんだこいつは、こいつらは……。

張月は再度少女を見る。

今は背中を向けているが、何度も張月を庇うかのような行動をしている。

今だってそうだ。

——いや、そうなんだ、こいつは。

初めから少女は張月を守っているのだ。この張月の理解を越している状況から。

張月は無知だ。魔術的な事に関しては何も知らないと言っても差し支えはない。それこそ知識、常識を知らない赤ん坊と同じレベルで。

だけど、そのことは、分かった。

——……俺は。

動かなければ、でなければこの少女にとって足枷にしかない。けれど、どうすればよいのか？

今なおカーチェの魔術刀は振り下ろされる。

叩きつけられたコンクリートの破片はスピードを保ったまま張月へと迫るってくる。それを避けたり、防いだりする術を張月は持っていない。

全て、少女によって守られているに過ぎない。無理に動き出したら逆に少女にとって邪魔かもしれない。

張月は左手にある物を持つ。

——くそっ！ 何が自衛だ！ 俺自身が動けなけりや意味ねえじゃねえか！

彼は強く、それを握り締める。

二人の攻防は続いている。人形は必要最低限の動きと防御術式でカーチェの全てを防いでいる。届いたのは先の一回だけだ。

「（破壊する）」

カーチェは小さな声で言う。

「（親を、家を、そして友を殺したこいつらは、破壊せねばならぬ……）」

一五年前、カーチェが当時一〇歳頃のこただ。図書館の人形に親を、家を、友を、全てを奪われた。

そしてカーチェのみが生き残った。

何故なら、カーチェの師匠である者が襲ってきた人形の最後の一個と差し違えたのだ。師匠は兄のような人であり、魔術師であり、剣士だった。

その後は流れるままだ。

ギルド魔閃の剣へと入り、人形を破壊し続けてきた。その数二八。
魔閃の剣の中では上のほうであり、かなりの実力者。リーダーにも数回会った事がある。

すうーはあー……。

カーチェは一度深く、深く深呼吸をする。

——戦いの最中昔を思い出すとはな。

今一度カーチェは人形を見据える。

カーチェは剣士であり魔術師だ。左手に持つ水魔道書、先の魔術がそれを証明する。

だが、人形を相手にする場合に魔術は滅多に使用しない。それを人形は『連立魔術』と呼ばれる同時複数術式展開。それを軽々とやっつてのける。

しかし、今の人形はおかしい。後ろでへたりこんでいる男を守りながら戦っている。

それは——後で利用価値があるのか。

それは——図書館の仲間だから守っているのか。

どちらにしろ、使用している術式の一つをその男に回しているのは事実。

——今なら……壊れる。

ふと、男の方に視線を投げた時。

男の左手には、刀を握り締められており、その場に立っていた。

鏡は大切なのは想像力と言っていた。

ならば『人を斬らない刀』というのもイメージ出来るのではないか？

ならば『全てを切り捨てる刀』というのもイメージ出来るのではないか？

少女は張月を守ってくれた。それに間違いは無い。

「貴方は、逃げる、得策」

少女の言葉が耳に響く。けど、張月は即座に、

「無理だ」

そう答えた。

これは単なる俺のわがままだ、と張月は思う。

前に出たところだか知れているだろうし、魔術というのでフオロー等も出来ない。

けど、

——こんな状況に……守ってくれたこいつを、置いて行けるか！
イメージ
想像する。

全てを切り捨て、人は斬らないそんな夢のような刀を。
イメージ
創造する。

張月の手に一番馴染む刀を。

——イメージしろ、その全てを。

手に発現したのはカーチェの魔術刀よりも更に長い。そして、R
PGにありそうな両刃の刀。

その巨大な魔術刀を張月は片手で軽く横に薙ぐ。

横にあるコンクリートの壁は真一文字に両断され、粒さえも出ない。ずれもしない。

「何だ、その魔術刀は……」

カーチェは絶句していた、その切断能力に、その規格外の大きさに、そしてそれを軽々と振る張月に。

同時に少女の動きも止まっていた。

魔術師の常識から外れすぎた魔術刀。

カーチェは何かの陣を展開させる。それは先ほどまで張月を守っていた陣に似ていた。

カーチェは反射的に、攻めではなく、守りを選んだ。しかし、その陣は脆くも崩れ去ることになる。

「何だ！ 何なのだそれは！」

張月は一つ。ヒュン、という風を切る音と共に刀を振る。世界が切れた気がした。そう思わせるほどの速さに、切れ味。一撃でその陣は消え去る。

そして、続けてカーチェ本人を張月は斬りにかかる。

「やめろおおおおおおおおおおおおお！」

ただし、張月が狙っているのは別のものだ。張月の刀は足がすぐんでいるカーチェの体ごとそれを両断する。

狙いはただ一点。カーチェの魔術刀。

右手に持っている魔術刀ごとカーチェを斬る。

カラン、と軽く乾いた音が無音の空間に響き、消える。カーチェの体は何一つの傷も無い。そう張月はイメージしたから。

カーチェの足元には白い円柱が真つ二つにされて落ちている。

繰り返すが、張月は馬鹿だ。無知だ。

魔術というのをまったく知らないし、初めて見たといっていいレベルだ。

昔、鏡の家で見せてもらっていたが、詳細には覚えてはいない。「おおおおおおおおおおお！」

唐突に、咆哮が張月の耳を貫く。そこには、両手に魔術刀を持っ

たカーチェがいた。

目は赤くなり、狂っているかのように叫び続ける。

右手に小型の手斧を、左手には右手のよりやや大きめ。ゲーム等ではショートソードと称されそうな刀をそれぞれ持っていた。

そして、正気を失いかけているカーチェは、そのまま襲い掛かってくる。

刃が向かったとき、何かの光が張月たちを包んだ。

――何……だ？

明らかにおかしかった。それ以外に張月は言葉のボキャブラリーを持っていない。疑問だけが頭の中を駆け回る。しかし、答えが出ることは無いだろう。張月は馬鹿なのだから。

しかし、一体何人もの魔術師が集まったところでこの状況を説明できるのだろうか。

少女の後ろに、まるで守護するかのように『人』が現れたことに。純白の衣を身に包んだ人のようなものが。

「おおおおおおおおおおおおお！！！」

カーチェはかまわず突撃する。先ほどよりも苛烈に、多段に両手に持った魔術刀を振るう。刃が小さくなったことによりさらに勢いを増す。

しかし、

その全ては光に阻まれ何一つとして少女に、その後ろにいる張月にも届くことは無い。

「す……げえ」

もはやその言葉しか出てこない。その光景を見て自然とそう感想を漏らした。それ程に圧倒的で、そして美しかった。

けれど――、

「つて。お、おい！ どうしたんだよ！？」

急に少女が倒れたのだ。その『人』はまだ出現していて、カーチェの攻撃は続いている。張月は無い頭をフルに回転させて考え、ある一つのことを考えつく。

「これが、こいつを弱らせているのか？」

張月はその『人』を見る。この『人』が出現してから少女は倒れた。それまでは動き、会話していたのに。

——イメージしろ！

この『人』を消す刀を。

保存はせずに即座に斬りかかる。碎けて消える間に終わらせてしまおうと思ったから。

『—————』

張月が即座に生成した刃を振るうと、『人』は声にならない叫びを上げてゆつくりと、光となり、霧散していく。

同時にカーチェと二人を遮っていた光が消える。

「シねええエエええ！！」

「つたく、うるせえんだよてめえは！！」

次に、張月はその魔術刀を受け止めようと魔術刀を向ける。

——あれ？

しかし、手中には白い円柱があるのみだ。先ほど保存をしていなかったから消えている。さらに今から保存までは張月の実力では間に合わない。

——しまっ！？

そして、目の前に刃が迫り、死を目の前にした時。先ほどの光とは違う何かが間を裂く。

「全く、何があるのかと思えば。関わらないこと、と言ったと思います」

その何かの陣はカーチェの魔術刀を完全に防ぐ。そして、その陣の主はカーチェの後ろから現れた。

彼女、澄崎鏡は右手に日本刀の形状をした刀を持ち、恐らく魔術刀だろう。左手には手のひらに収まるサイズの魔道書を持っていた。カーチェは何かの陣を斬り付け続ける。しかし、それが壊れるような様子は無い。

「それは私が書いた新しい術式。その防御術式は私を倒さなければ

解けることはありませんよ」

鏡はそう言うと同時に、カーチェへと向かい歩いていく。

「鏡！　ここから逃げろ！」

こいつは強い。それはあらゆることに素人である張月にも感じ取れた。

けれど、鏡は逃げるところか張月達のほうへと向かっていく。張月は逃げろと叫んだ。

しかし、確実に鏡とカーチェの間は無くなっていく。カーチェもまた、少女と同じく無傷だった。張月のが当たったのはまぐれ、もしくは混乱していたからに過ぎない。カーチェは鏡の存在を認識すると張月へと向けられていた刃を鏡へと返す。

「知りませんでしたか、張月。私は――」

剣戟があつた。金属と金属のぶつかり合う音がし、火花が散る。

「想造家であり、魔術師であり、さらにそれ以前に剣士なのですよ」
クリエイター

鏡の目つきが変わる。それはいつもの鋭いながらも暖かい目ではない。

ただ、鋭く冷たい目。

二人の剣が幾度も交わる。鏡は綺麗に受け流し、カーチェの懐へと一気に潜る。そこで掌にある魔道書を前に差し出し。

ブルール
「燃えろ」

そう唱えると、その魔道書から炎がカーチェの周囲を囲むように炎の網が広がっていく、カーチェは魔術刀から何かの陣を出現させ、その炎の延焼を防いだ。

――あんなこともできるのか……。

「これは……何だ」

そこで、冷静さを取り戻したのか、カーチェは問う。鏡はもう一冊小さな本を取り出しながら、

「これは音に反応する魔道書の応用ですよ。私の声にのみ反応するようにし、そして言った言葉によって展開する術式が変わるのです。これは白と音の複合魔道書^{ミキシングスベル}。といったところでしょうか」

わざわざ説明し鏡は再度カーチェへと向かう。

ジュ・クレイブ
「爆ぜろ」

鏡のその言葉と共に魔道書から陣が出現し――次の瞬間そこは白煙に包まれる。

魔道書が轟音を立てて爆発した。煙が立ちこめ張月の視界が奪われるが、刃の交わる音は断続的に聞こえてくる。その間、張月は腕に抱えている少女を見る。

見たところ外傷は無い。いや、無さ過ぎる。肩を刺されたのに、張月はしっかりとそれを見ていたのに、まるでその事実が無かったかのように、傷は消えていた。

その時、鏡の言葉を思い出す。

『人形』。

少女の右腕には張月の頭でも分かることが、刻まれていた。一度だけ見たことのある紋章。そして鏡から注意するようにと言われていた紋章。

「魔道書……回収集団？」

張月の両親を殺した組織のものだった。

「ぐっ」

煙の中から声がする。白煙は薄れ、張月によりやく視界が戻ってくる。そこに見えたのは、

「本当にギルドの連中は厄介ですね」

「お前は、何者だ。俺と戦って何の意味がある？」

鏡とカーチェはおそらく互角なのか、双方に焦りは見られない。

「おや、言ってみませんでしたか。私はギルドが大が何個もつくほど嫌いなのですよ。それに」

そこで一度言葉を切り、カーチェを見据える。

「お前は、張月を傷つけました」

その時張月は初めて聞いた。鏡が、『お前』と使うことなど初めてだった。少なくともこれまでに一回も聞いたことがない。その様

子を張月は見ながら思う。

——…一人で、やらせられるわけねえだろ！！

張月は腕の中にいる少女を見る。カーチェはこの少女を狙っている素振りだった。

もしかしたら、この少女をカーチェに渡せばこの戦いは終わるかもしれない。

だが、少女は何度も張月を守ってくれた。単なる巻き添えの張月を、通りすがりの張月を。

ただの一般人と同義といっても過言ではない張月の命、守ってくれたのだ。

ただ、それだけのことだが。

——それだけのことをしてくれたんだからな。

だから、

——俺は……

この状況で、

——こいつを！

一度決意したら張月は揺るがない。馬鹿で、無知で、先を考えない張月だからこそ。今の状況をよしとしない。時間は鏡のおかげで作れた。魔術刀を構築し、保存する。

そして——鏡の陣を切り裂いた。

「張月！ 何をしているのですか！」

「ごめんな」

張月は謝る。鏡は張月を守ろうとしていたのだから。けれど、それを自ら破壊したのだから。

「でも、俺だってやるときゃやるんだぜ？」

後ろにあの少女を置き、前へ進む。その場所は鏡の隣。

「貴様らはどうして邪魔をする！ そいつが何か分かっているのか！」

「知らねえよ。俺は、こいつに守ってもらったんだ」

「お前は、張月を傷つけようとした」

二人の口から出てくる言葉。それぞれがそれぞれを守りたいと思う。

「全く、あの術式を組み上げるのに何時間かかったと思っているのですか」

「はは、すまん。後で何かおごるから許してくれ」

鏡は内心驚きを隠せなかった。鏡の頭では『理解できない』ことがあったからだ。

それは、あの術式を張月が一撃で打ち破ったこと。

——あの刀は……一体何なのでしょうか。

完璧な術式、無敵の術式などはない。どんな防御術式も何度も攻撃されれば効果は薄れるし、いつかは破られる。

けれど、張月は一振りですその術式を切り裂いた。

——あれは私の魔力を吸い取り、存在し続ける防御術式。それを一撃で壊すなど……。

そう、普通は『ありえない』。カーチェが何度斬っても壊れなかった術式なのに。

鏡も魔術刀を使う。だが、それはできない。絶対に不可能だ。

鏡は魔術師として常識を知っている。防御術式で身を守れる、など当たり前だ。

有能であるが故に、鏡は何も分らない。

——……、と。今は気にしている場合ではありませんね。

鏡はカーチェのほうに向き直り、魔道書を取り出す。
リターン
「廻れ」

冷たい鏡の言葉が口から出てくる。魔道書から小さい陣が飛び出

し、地面を駆ける。そして、カーチェの足元へ。

カーチェはすぐさま横へと飛び、その陣から出た次の瞬間、陣の中で天地が逆転した。地面のコンクリートが丸形に消失したかと思うと、次は上空よりその直径一メートルはありそうなコンクリートの塊が数十メートル上より落下してくる。

それは地面への着地と同時に、大きな音を立てて砕け散り、飛散する。あの上に人がいたのだとしたら、確実に骨は折れたことだろう。

次にカーチェはその陣から抜け出すと同時に前へ走り出す。そして、魔術刀を振りかざし、鏡へと切りかかる。

「させるかよ!!」

前へと駆け出し、張月は魔術刀を振るう。それはカーチェに軽々と避けられる。

しかし、張月は即座に次の行動に移行する。縦に振り、横に切り返すには時間が普通はかかる動作だが、一瞬にして横薙ぎへ移行。その方向転換の早さも異常だ。

けれど、カーチェは迫っているにもかかわらず、避ける動作はせず、ただ腕を下げる。

たったそれだけで、張月の魔術刀はカーチェの体を通過し、何も斬らない。

『人は切らない』それが張月の魔術刀。だから、魔術刀が目標から避けられてしまえば、何も起らない。

何も、切れない。

「死ね。図書館の犬よ」

非情な声が耳に突き刺さる。同時に魔術刀も突き出され、張月の腹へと向かう。

——避けられねえ……。

この時張月の頭には三つの文字が並んでいた。「ごめん」とその三文字だけが。

腹が、何かに抉られる感覚がする。けれど、痛みはない。ただ、

何かが抜けていく感覚。

「張月……、張月！」

後ろから女性の声がする。今までに聞いたことのない大きな声だ。
——あー……本当、バカだな俺って。

後ろを見たくなかった。そこには何か見てはいけないことがあり
そうだったから。

刹那、光が張月を包み込む。

魔術刀ごとカーチェはその光から吐き出され、後ろへと大きく吹き飛ばされる。

——あ……れ？ どう、なってんだ……今？

目の前には光だけが広がっている。その他には何も見えない。

——俺……どうなったんだ？

分からない。刺されたところまでは覚えているが、その後何があったのか覚えていない。

次第に光は薄れ、視界が戻ってくる。

まず見えたのは今までに見たことも無い鏡の顔だった。

「何を……しているのですか張月は」

「おー……どうした？」

その今まで見せたことのない表情に、張月はそのようなことしか
言えなくなる。

「少しで良いです。黙ってください……」

張月は腹へ手を置く。すると、違和感があつた。

——あれ？

そこには、傷があるから違和感があるのではなく、傷が無くなっていたことに違和感があつたのだ。目線を少し泳がせ、前を見る。

そこには、またあの『人』がいた。先ほどあの少女を倒れさせた
『人』が。

「お前。大丈夫なのか……？」

また先程のように倒れられたら困る、と張月は思う。

「先は、定時魔力総量を、越した。今、流動魔力総量を、調整」

「は？ え？」

「要約、平気」

ああ、なるほど。と張月が最後の言葉だけ理解したところで、少女の目線は前、カーチェのほうへ向く。

「鏡、ごめんな。俺、行かなくちゃ」

張月はゆっくりと立ち上がりながら、魔術刀を手にした時。

「へえ、楽しそうなことしてんじゃねえかあ」

第四の声が、上から響いてきたと思ったら、人が上から降ってきた。カーチェと三人の間に割り込み、カーチェのほうを向き、言う。

「おいおい、何だこの状況はよお。テメエ、それでも魔閃エレクトロニエビの剣の一員かよ」

その女性、身長は一七〇程で、手には、魔道書を持っていた。

——あいつも、魔術師？

「誰だお前は。お前も俺の邪魔をするのか！」

「邪魔するつもりはねえよ。ただ、テメエを殺しに来ただけだったのお」

「あ？ ……貴様。まさか『あそこ』のギルドの奴か」

——あそこ？ 何が……？

「そうだ、オレは慟哭クロイクス・ラメイションの十字架のフィラス。ま、自己紹介なんざ意味ねえけどなあ」

フィラスがそう言った次の瞬間、フィラスの周囲が崩壊を開始する。

「張月！ 私の後ろに！ 早く！」

鏡は張月の前に即座に出て、陣を展開する。張月の目には、もう理解が及ばない。

「ふん、範囲はこんなもんかあ」

フィラスを中心に円形に半径二メートルほどだろうか。その範囲の全てが、フィラスのいるところ以外、消失した。

「く……そ、貴様よくも……」

カーチェは体を引きずっていた。何故かと言うと、先の魔術（？）で右足を太ももから無くなっていた。肉が見え、血が流れ、カーチェは苦痛に顔を歪めている。

「言っただろお」

フィラスはその状況でも、冷たい声で言い放つ。

「オレはテメエを殺しに來ただけだってなあ！」

いつの間にかフィラスの周りには大量の針が浮かんでいた。裁縫道具に入っというような大きさの針が幾千と。

それらは全て、カーチェへと向けられており、フィラスが手首をクイ、とカーチェのほうへ曲げた瞬間、

「ぐっ、あああああああああああああああああ！！」

苦痛の叫びが、断末魔の叫びが響いた。その幾千もの細い針は全てカーチェへと突き刺さる。そして、その断末魔の叫びさえもが――消えた。

「しゅーりよー。クハハッ！」

――な、あ。……え、あ……なに、が。

張月の頭は追いつかない。けれど、一つ言うことがあるとすれば、
「何、笑ってんだよ……」

フィラスという魔術師に対してだ。

「ああ？」

張月は拳を握り締める。皮が破れ、血が出そうなくらい、強く。

「こんなことしといて何笑ってんだよ！ お前は！」

「黙れクソガキがあ！ ……それともお、命がけで守ってくれた奴をテメエは見殺しにすんのかあ？」

「え？」

張月は後ろを見る。そこには鏡は身動き一つせずに倒れていた。

「かが……み？ ……鏡！？」

張月は即座に鏡の元へ向かう。他はどうでも良くなった、鏡がとにかく心配だった。

「しっかしまあ、良くそいつ生きてたなあ。いつか、大物になるか

もしんねえ。けどよ、さっさとしねえと、死ぬかもしれないぞお、そいつ」

そこで、フィラスはカーチェを担ぎ上げ、この場にいるもう一人のものに言う。

「ところでよお、何もしねえのかあ？」

「これは、貴女と、敵対する理由、無い」

「そおかい。じゃあよお、せめて『これ』ぐらい解いてやらねえと電波送受術式ぐれえしか通らねえぞお」
テレバス

そして、フィラスはその場から、姿を消した。

「残量魔力を、確認。……総量6%。現時点、回復術式の展開、不可」

その言葉と同時に、街に人の喧騒が戻ってくる。

——そうだ！ 救急車！

張月は携帯を取り出し、一一九と押した。

1月13日 14日

1月13日（金）

放課後、張月は茜々崎総合病院に来ていた。

目的は勿論鏡の見舞いだ。張月は目の下に真っ黒なくまを作り、やや不自然な足取りにもなっている。

病院の中へ入り、ある一室の戸をノックする。

「どうぞ」

入ると、そこには上半身を起こして、こちらを見ている鏡がいた。起きて――いた。

「誰かと思えば張月でしたか。学校が終わってからまだ一〇分ほどしか経ってないと思うのですがね。まさか、サボりましたか」

「ははっ……、はっ……」

血こそ出ていたが、重症というわけでも、意識不明でもないことは知っていた。だから、起きていてもなんら不思議は無いのだが、自然と笑みが零れた。

「何を笑っているのです。いつも馬鹿な頭がさらにバカになりましたか」

「はは、悪い」

「そういえば、あの魔術師はどうになりましたか」

「ん？ あ、ああ。あいつなら気が付いたらいなくなってたよ」

あの魔術師とはあの少女のことだろう。それ以外の魔術師達の最後は……知っているから。そう言うとき鏡は少し考える様子を見せる。

「どうした？」

「いや……でも……」

どうやら長考状態に入ってしまったらしく、こちらの声がまったく届いていない。張月は諦めて近くに置いてあった椅子に座る。

――本当に……良かつた……。

急な眠気に襲われ、そのまま張月は目を閉じた。

「……き、張月」

「んあ？」

変な声を出しながら張月は目覚める。

「張月は……この世界についてどこまで知ってしまいましたか」

「この世界？」

「魔術師の世界、ですよ」

冬だからというのものもあるだろう、外はすでに暗くなっていた。

同刻。茜々崎市のとあるビルの屋上。

「たあくよお、こんなヤツが上位だったのかあ？」

エレクトユニエビ
魔閃の剣ももう

ダメかなあ」

フィラスは屋上で見下ろす。眼下に広がるは茜々崎市。『聖魔道書』、通称『聖書』が封印されていると言われている『魔術特区』。その真偽自体は定かではなかった。だが、今回のことでフィラスは確信し、断言する。

「ここには『聖書』がある」

「上機嫌だな、フィラスさん」

後ろから男の声がする。

「ああ、そりゃあそうだぜ！」

「だけど、残念だったな。——『上』からの命令だ」

「ちい！ こんな時にかよお。少しは時と場合を考えろってんだあ！」

「まあ、仕方ないさ。『上』に逆らったらそれこそどうなる分からんからな」

この日から、茜々崎市より一時的にだがクロイクス・ラメイション慟哭の十字架はいなくな

った。

——魔術師の世界……？

「んー、全然分かん」

それは本当だ。見たし、感じた。けど、それと分かるのは別だ。張月は何の理解もしてない。できていないし、する気もないかもしれない。

「……では、一つだけ、大事なことを言いますね」

張月は無言のまま頷く。

「張月は魔術師の中でも稀有な存在です。正確には『張月』ではなく、張月の『頭』が、ですけどね」

「俺の頭？ ……ただバカなだけだろ？」

自分で言っていて若干悲しくなったが、事実なのだからしょうがない。

「……それが、ですよ」

鏡はその言葉を即座に肯定する。

「張月は馬鹿で無知です。魔術については何も知らない。そうですよね」

「……ああ」

「『だからこそ』の力、と私は結論付けました。あの時私の『術式を消す』という類のことを思い、構築したと思います。それこそ、張月の『頭』だからできた技なのですよ」

「……確かにそう思ったけどさ。それだけだぞ？」

「『そんなにも』ですよ。例えば私が張月と同じことをしろ、と言われても出来ません。張月の魔術刀というのは、あまりにも魔術師の『常識』から外れすぎているのです。ですから……」

その続きを聞きたくない、と張月は思った。けど、聞かなければならないのだろう。とも思っていた。

「……これから、その『頭』を狙う人が出るかもしれません」

「——っ！」

「と、言うのは冗談ですよ」

「はえ？」

急に気が抜ける。冗談、と言う言葉が聞こえた気がした。

「ま、待てよ！？ あんな雰囲気だったのに最後は冗談なのか！？」

「はい、たまには冗談、と言うのを言ってみたくなりまして」

「お前……基本真面目なんだから冗談が冗談に見えないんだよ！」
無駄に精神的に疲れた気がした。

「……ふう」

病室の中、鏡は漆黒の空を見上げる。

——確かに、張月の頭を狙う人はいないでしょうが。

『張月』という個人が狙われる可能性は低くはない。あれほどの力を出せるのだから。さらに今回のことを知る魔術師もいる。何らかの形で接触があるかもしれない。

鏡は、これ以上張月を魔術師の世界に引き込みたくない。張月は普通に生きるべきなのだ。

そういう世界を知るのは私だけで十分だ、と鏡は思う。

魔道書回収集団にギルド、魔術師界の巨大組織である二つに今日だけで全て接触した。それがどれだけおかしいことか、張月は分かっている。

鏡は月曜日に退院予定だ。逆に言えば、それまでは行動できないことを意味する。

——それまでに、『スカウト』という形で何らかの接触があるかもしれない。

もしくは、強硬手段か。

張月は真っ直ぐだ。だからこそ、心配だ。

——……いけませんね。

病は気から、今は退院することを考えよう、と鏡は思った。

1月14日（土）

休日、何故か張月は十時には目が覚めた。いつもなら昼過ぎまで寝ているのだが、眠れなかった。

――仕方ない、簡単に朝飯作るか。
簡単にパンを焼き、食べる。食べ終わる頃には十時半になっていた。

――何してようかな……。

課題テストも近いので、本当なら勉強しなければならいだろうが、どうにもやる気が出ない。いつものことだが、張月はギリギリになるまでやる気が出ない。冬休みの宿題もやり始めるのは終わる三日前からだ。

そして、ふと空を見上げたとき。

「ん？」

違和感があった、何か、いつもと違うような。……けど、分からない。つけていたテレビに天気予報が流れる。ここら辺の予報は『雲ひとつない快晴』。

「ど、どうなってんだこれ……」

張月の目に見えているのは、青空などではなく、言うなれば白空。空から青が……消えていた。

張月はすぐに鏡の元へと向かった。何故かすぐにそうしないといけない気がしたのだ。流石に病院内に入ると歩き、戸を開ける。

「鏡！」

「どうしたのですか、こんな朝早くに」

そこには起きている鏡がいた。今起っていることが分かってないのか、いつもどおりだ。

「なあ！ 何が起ってるのか分からない——っ」

「静かに、です」

鏡は自身の唇に指を当て、張月を諭すかのように言う。そこで張月は自分が知らず知らず大きな声を出していたことを知る。

「……すまん」

そして、張月は今度は本当に小さな声で、

「（一体、何が起ってるんだこれ？）」

「（大丈夫ですよ）」

鏡はそう返した。何が起ってるか言わずに。

「（この現象については私達ではどうしようもありません。なるようになりますよ）」

鏡はやはりこの状況を分かっていた。分かっているながら、この冷静さだ。別に諦めている、という様子もない。

ただ、今を見ている目をしている。

「（張月、不安ならここにいればいいのですよ）」

「……ほんっとさ。昔から立場逆だよなあ。俺は、お前を守ってやりたいってのに」

張月は下を向きながら言う。先の言葉は、前にも聞いた覚えがある。あの、張月が張月でないときに。

「いっつも俺は分からなくて、いつも助けられて、守られてばかりで」

「いいですよ、張月。貴方は、いいですよ」

その時、体に異変が起こる。上下左右が急に無くなり、まるで無重力の空間に放り出されたような感覚。そんな言葉にするのが難しい感覚が体に襲い掛かる。そして精神までが、眠りについた。

夢を見た気がした。昔、張月の両親が殺害されてから翌日のことを。

何もする気がなく、する気も出ず、ただ部屋の隅で張月は蹲^{うずくま}っている。

ここは澄崎家の一室。そして張月の隣には鏡がある。虚ろな目の張月の頭を抱えながら諭すように張月へと語りかける。

「張月、不安ならばここにいればいいのですよ、いいのですからね」

「――張月、起きてください」

また、鏡の声が耳に響き、張月の意識は覚醒する。張月は床に倒れていた。手を動かす、ちゃんと動く。それに体も重さを感じる。

「あれ？ 俺どうして……」

起き上がりながら、ゆっくりと周りを見渡し、その視線は外へ向かう。

「あっ……元に、戻った？」

そこには雲ひとつ無い青い空があった。

「ほんと、何があったんだ……？」

「張月、知る時がくれば話します。それまで、待つてはくれませんか？」

その言葉に、張月はすぐに「分かった」と答える。鏡は嘘をつかない。冗談は……昨日のがあったが、「今はダメ」というのならダメなのだ。

ならば、張月は待つ。話してくれるその時を。

「一つだけ言わせてもらっていいかな？」

「……どうぞ」

そこで一つ張月は深呼吸。

「俺は、鏡を守るぐらい強くなる。今は守ってもらってばかりだけど、いつかなるから。だから、いつか俺が『頼れる人』になれたら。その時にでも話してくれ」

今までに受けてきた鏡の恩は計り知れない。だから、張月は宣誓した。

その言葉に、鏡は何ヶ月、何年ぶりであろうか、ほんの少し、微笑^わって、

「ええ、分かっています」

そう、答えた。

1月13日 14日（後書き）

こんにちこんばんはようございます。魔術物を目指して書いた第二作目。目指したのは「主人公らしい主人公」。元々これは第一章の外伝作品として書いていました。ですが、長さが第一章を超えてしまったのでこの作品を第二章と銘打つことに相成りました。

此処でよんでくださった人。ありがとうございます。ほんの少しでも面白い、と思っただけならばとても嬉しいです。

1月19日(1) (前書き)

第三章・聖書と魔術師です。

1月19日(1)

『聖書』と呼ばれる魔道書がある。その周りでは常に争いが絶えなかった。

聖書とは『聖魔道書』の通称であり、世界に三〇冊しか存在しないとのこと。それらは全て『暗号術式』と呼ばれる術式により封印されており、何故封印されているのかと言うと、危険だからだ。

聖書は世界中で一番強力な力を有する魔道書であり、争いの火種。先人たちはこの魔道書を悪用することを危惧し、暗号術式という現代では誰にも解読できない術式で封印した。

今それらは世界の中に封印されている。

内、三冊は『魔道書回収集団』によって回収されているとのことだが。他の聖書は未だ封印されていて、消息さえもつかめていない。そして、魔道書回収集団もそうだが、ギルドの中でも聖書を求めているところは多い。

その力は言うなれば魔術界の核兵器。

しかし、前述のとおり全ての聖書には暗号術式が施されており、誰にも解読できないため、入手しても何もできはしない。

最近ではあることが分かった。

世界には、『魔術特区』と呼ばれる魔力濃度が極端に高い地区がある。

魔術特区は世界で一〇〇ヶ所存在し、自然にできたのと、もう一つ要因があった。

それは、聖書の封印場所。一〇〇ヶ所の内、三〇ヶ所の魔術特区。その中心に聖書が封印されているのだ。

2023年 1月19日(木)

本日、茜々崎高校は課題テストの日である。冬休みの勉強を問われる試験だ。

3時間目で終わるので、午後はフリータイムになるといういい時間割。そこで、周りが必死になって最後の復習。もとい、詰め込みをしている生徒をよそに――寝ていた。

彼、村雨零斗むらさめ れいとは別に諦めているわけではない。ただ、勉強をする必要がないだけだ。零斗は学年二四〇人中常に三〇位以内に入っているのだ。それがいつもの零斗であり、最後の最後で焦ったりもしない。

それに、1月14日の疲れがまだ残っているというのもある。

――……はあ。

流石に始まる直前となり、騒がしさが人一倍増したところで目が覚める。同時に声をかけられる。

「おはよう村雨！ ……およ？ 元氣ないみたいだけど、どうかし
た？」

零斗は逆に聞きたかった。何故そこまで元氣なのか、と。

「おーい、耳聞こえてるー？」

零斗の目の前でパタパタと手を左右させる女生徒は平真華里たいらま かり。茜々崎高校の生徒会長。さらに人望はあり嘘は苦手とにかく元氣だ。零斗と平真は1月11日に初めて会話をした。

零斗も平真も正体を隠している者達だ。

――魔術師。零斗と平真は現代に生きる魔術を使う者なのだ。

キーンコンカン。と、一部の生徒には無常な鐘の音が響く。零斗は基本頭がいい。テスト時間である五〇分中、二〇分を費やしたところで、すでに腕を枕にして寝ていた。

だが、先生は起こしたりはしない。どれだけ早くても、別に雑にしているわけでも諦めているわけでもないのだから。

二時間目、三時間目も同じように過ごし。テストは終わり、早速放課後。

帰宅部であり、特にすることのない零斗はさつさと靴を履き替え、帰宅への準備を整える。

そこで、

「だー！ 終わった！ 色々な意味で終わった！」

「全く、ですからあれほど勉強をしておきなさい。と言いましたのに、自業自得ですよ」

ひととき大きな男の声が響いた。

——……一年か。

その男女の二人組みは零斗の横を通り抜けていく。

——ん？

ちらり、と女性の方の視線が零斗を貫いた気がした。しかし、零斗が改めて見ると、その女生徒は前を向きながら歩き、去っていった。

「はぁ……」

そこで零斗は溜息をつく。今日の残りの暇な時間をどうしようかと。

零斗に興味は特に無い。料理も食べるためであり、運動も別に好きではない。勉強も然り。

——……何もすることないな。

特に読みたい本や漫画。雑誌があるわけでもない。テレビで見る番組と言うのもニュース位である。

無趣味というよりは無興味。周りのことに特に関心がないのだ。

——別のことであれば色々聞きたいことはある。あの図書館の魔術師に。けれど、その魔術師は今ここにいない。

あの日零斗が逃がした。ある約束を言い含めて。

そこを通るのが常のように裏道を通る。零斗は自転車で通学可能範囲のギリギリ入っていない。なので、近道を探していたら見つけたのがこの道だ。それに、あの図書館の魔術師と、そして平真と出会ったのもこの辺り。

人通りはなく、周りもコンクリートで家があるわけでもない。細い道を抜け角を曲がった先、やや広めの場所に出るのだが……人がいた。

——珍しいな、ここに人なんて。

なんて思いながらその人の横を通ろうとした時、

「ごめんなさい」

一つ、声がした。女性の声だ。しかし、何に謝っているのか分からない。

「本当に、ごめんなさい」

また謝る。一体何に、誰に謝っているのか。その女性の左手が動き、何かを手にする。それは、本。

「貴方を……殺します」

零斗の耳に言葉が響いた。瞬間、世界が闇に染まる。だが女性と零斗の姿ははつきりと視認できる。

——魔術師！

気づいたときには遅かった。零斗の視界はもう女性以外は闇で染め上げられている。
ジャッジメント

「断罪の斧」

零斗の頭上に巨大なギロチンの様な刃が出現する。刃は真一文字に零斗の体を引き裂かんと瞬間的に落下してくる。

「くそっ！」

この魔術。闇の正体が分かるまで動きたくはなかったが、瞬間的に「防御術式では防げない」と悟るや否や前方へ跳躍。零斗の体を切り裂くことに失敗した刃は闇の地面へ到達すると音もなく消失。零斗と女性は女性が見下す形で対峙する。

「お前は誰だ」

「へえ、今の一瞬で避けるをこと選択する、か。なかなかやるわね」
ほんの少し、違和感があった。

初めに聞いた謝罪。その謝罪はどこか悲しい感じを思わせる話し方だったのだが、今のは違う。冷たい、感情が言葉にない感じ。

まるで、今の自分のような感情が言葉に無い。

「でも、それだけじゃダメ。このままじゃ貴方死ぬわよ？」

冷たい声が無音の世界に響く。零斗は危険を感じ、白魔道書^{ホワイトスベル}を手に取り出す。次、術式を展開しようとした時、

「無駄。ここは私の世界。この理は全て私のもの^{ことわり}」

女性の言葉と共に、零斗の展開しようとした術式は粉々に、砕け散った。

術式はそう簡単に崩壊するものではない。驚愕する。このような事態を彼は知らない。

「なんっ……」

「だから、お願い。私に殺されて」

背筋に電気が走ったような気がした。こいつはまずい、と。本能の声がする。

「縛羅終刑^{エクスカッション}」

——…つく。

零斗は眼鏡を外し、もう一つ所持している魔道書を手に取る。

それは『黒魔道書^{ブラックスベル}』。

1月14日の後、平真から借用していた黒魔道書を返そうとしたとき、「私には使えないし、使える人が持つての方がいいよ」ということで平真から譲り受けられた。

しかし、零斗は黒魔道書を人に向けて使うのは精神的に辛い。

別に、相手の命を奪うような魔術ではない、ではないが。昔の記憶が思い出されるから。

それは、零斗が父を殺してしまったときの記憶。

「魔力断絶空間^{イクティスベエス}」

この魔術は一メートル四方の立方体が基本の範囲であり、その範囲から魔力を消し去る魔術。

正確には『その区域の魔力濃度を0にする』ということ。

魔力を全て奪うということは魔術も存在できないということである。それを女性と零斗の間に展開させる。

「ふうん、『黒』ねえ。よくそんなの持ってるわね。ほとんど残ってないはずだけど？」

そう、女の言うとおり黒魔道書は『禁魔道書』^{ディーチャ}と呼ばれる特殊な魔道書の中でもさらに特殊な魔道書である。世界に一〇〇冊のみ存在し、その内七二冊は『魔道書回収集団』日本では通称『図書館』と呼ばれる組織が回収済みとされている。

加えて、世界の魔道書を書く者、『想造家』^{クリエイター}でも黒魔道書の複製、もしくは創造はできないという。

「それはどこで手に入れたの？」

「……知るか」

零斗は本当に知らない。ただ、平真に借りているだけなのだから。――……待てよ。

そこで一つ疑問が出る。何故、平真は使えないのに今や世界に残された数も少ない黒魔道書を持っていたのか、と。

「……っち。時間切れ、かあ……」

女性が言いながら膝から崩れていく。同時に世界が元に戻り、女性性はコンクリートの床へと突っ伏した。

「本当に、何なんだこいつは……」

零斗は改めてその女性を見る。髪は赤みがかった茶色で長い、腰の近くまであるだろう。見た目は……同年代か少し年上といったところか。

この女性が何者なのか、憶測はいくらでも立てられるものの、どれも決定力に欠けている。

――……はあ。

「う……ん」

目が覚める。ベッドの上。なにやら知らないうちに眠っていたのか、運ばれたのか。

——あれ？ 私、確か目標を見つけて……それから。

そこからの記憶が無い。完全に欠落していた。

「また……か」

こうなった理由は一つしか考えられない。それは分かっていた。飲まれたくないのに、飲まれてしまわないとまともに戦えない。

けれど、このままでは——『自分』が『自分』でなくなるような気さえた。

「目、覚めたか」

下を向き、うなだれているところに、男の声がし、声の主の姿を確認する。瞬間、表情は急速冷凍された魚のように凝固。

零斗は運んできた女性に声をかける。無論、寝かせるときに手に持っていた魔具は回収済みだ。

魔具は現代の魔術師にとって生命線と同義であり、魔具が無ければ今の魔術師は魔術すら使えない。この女がよほどの筋力を持っている零斗をねじ伏せることができれば……そんなことはまず無いだろう。

「——っ！？ 貴方は……どうして」

女は固まり、目を見開く。それもそうだろう、何せ殺すといった相手が目の前にいるのだから。

「どうして、はこちらの台詞だ。何故俺を殺す、等と言った」

「それは……。あ、れ？ 無い……」

魔術で対抗しようとしたのか、女は手を弄るも、そこに在るべきものが無いことに気づく。

「魔具は俺の方で預かっている。言いたくなければ処分するだけだ」「やめてっ！」

女はとても大きな声で即座に制止する。それほどに大事なのか、必死さが垣間見える。同時に、頭を振った振動で手首にはめている

銀の腕輪から光が反射し零斗の眼へと入射。――恐らく、この腕輪がこの女性の『防御機構』^{プロテクト}なのだろう。

大多数の魔術師は魔具と呼ばれる魔術を使用するのに必要な術式を展開するための道具を持っている。

魔具を取られると一般人と同じようになってしまう。ただ、魔力を感じれる人となる。

それでも何か出来るのでは？　と言われたりもするが、魔具は魔術師にとっていわば『常識』。

持ち歩いていないだけでかなりの違和感を覚える。それは零斗も同じだ。

零斗自身も常に魔道書を分解して持ち歩いている。魔術師という存在を知られてはいけないのに、持ち歩く。魔術師にとって魔具とは当たり前の物なのだ。それを取り上げている以上この女に今害は無い。

むしろ、今まで魔術に頼ってきた分だけ常人よりも弱い、と言えるだろう。

「だったら、だ」

そこで零斗は一度溜めをつくり、

「もう一度言う。何故、俺を殺す等と言った」

「そ、それは……『上』からの命令で……」

その聞きなれない単語の使い方に零斗は聞き返す。

「『上』？　『上』って何だ。どこかの組織のことか」

「私は……『ギルド』、『慟哭の十字架』^{クロイクス・ラメイション}所属。ノエル・カーリスエッジ」

聞きたい所はたくさんあるが、今の言葉の一言が特に気になった。
――ギルド……だと。

この前は図書館、それもかなり最近のことだ。そして次にギルドと来たものだ。

「目的は何だ」

質問すると、ノエルは小さい悲鳴と共に自らの体を抱きしめ、小

さく震えだす。

「それハ……だメ、イえない。いってシマったら……ワタシの……」
ノエルの震えはだんだんと大きくなり、歯もかちかちと音を鳴らし、次第に大きく響いていく。

「おい、どうした!」

「ホントウに、ダメ……」

ノエルから急にふっ、と力が抜け、倒れる。そのまま動かず、ただ浅い息を繰り返す。

「おい!」

零斗は再三声をかけるが、答えることは無い。完全に気絶しているようだ。

——なんだってんだ……。

言いたくないのは分かる。だが、ここまでの怖がりようはおかしい。まるで、他の何かに怯えているようではないか。

ピリリリリ。携帯のアラートが鳴る。この機械音は電話のアラートだ。

——誰だ、こんな時に。

零斗はそう思いながらも、電話をとる。

『あ! ねえねえ! ちょっと話したいことあるんだけど、今から家に行っていいかな?』

電話を取るなりいきなり話し出したのは平真だ。

「話って、何の話だ」

一気に話したのに肝心の「何について」を何も言っていない。

『うん、……あのさ。図書館についてなんだけど』

図書館といってもこの二人には二つの意味がある。一つは本を借りたり読んだりする図書館。もう一つは、『魔道書回収集団』の通称である図書館。

そして、平真の声のトーンが下がったことにより、零斗は後者と悟る。

けれど、今は。

——…この状況なんだけどな……。

『ん？　どうかした？　あー……もしかして今タイミング悪いときに電話かけちゃった？』

少しの沈黙を察したのか、平真は言う。

「いや、問題ない」

とっさにそんな言葉が零斗の口から出る。

『そう？　じゃあ、今から行くねっ！』

言い終わると、ぶつつ、という音と共に電話は切れる。

——さて、どうしようか……。

零斗は珍しく本気で悩んでいた。しかし、悩んだところでこの状況は好転どころか、変わりもしない。

数分後、ピンポーン。と無常にも何もできずに時はやってきた。

「おっじやますいー……つます！？」

ぴょん、と無駄に飛び跳ねつつ平真は家の中へ入り——硬直しながら首だけを起用に零斗へと向ける。

「……でさ、これどういう状況？」

「まあ、何だ。見たとおりだ」

ちなみに、零斗の住んでいるアパートはワンルームの部屋だ。つまり、部屋に入ればすぐにベッドがあり、そこで寝ている（気絶している）ノエルがすぐに視認できるのだ。

「村雨！　まさか！」

「まさか、で言葉を止めるな。その次に何が続こうとも俺が変な人になるだろ」

若干諦めかけている零斗はそこで溜息をつく。

「はあ、それについては説明するから座ってくれ」

説明が終わる。それ自体は五分ほどの話だ。

「——てな訳だ」

「……………」

「だー！ 終わった！ 色々な意味で終わった！」

「全く、ですからあれほど勉強をしておきなさい。と言いましたのに、自業自得ですよ」

課題テスト終了後、桐野張月と澄崎鏡は靴を履き替えようとしていた。

張月はかなり沈んでいた。テストの結果がいつも通り悪かったからだ。返却自体はまだだが、もう分かりきっていた。嫌というほどに。

「ああ……」

若干の後悔をしながら、靴を履き替え、外へ出たら、まだ鏡は校舎の中にいて何やら後ろを向いている。

「どうした？ 鏡」

鏡はその言葉にすぐに反応し、

「いえ、別に何でもありません」

相変わらずのやや平坦な抑揚の無い口調。それに、髪は短いながらも何故か前髪だけは伸びており、表情を読み取りにくい。

張月はやや不思議に思ったが、そっか、なら行くか。と特に気にせず言い、帰り道。

「おや、張月どうしたのですか。そこまでテストが悪かったのですか」

「ん、いや。……テストの結果が酷いのは目に見えてるけどさ。この前のこと考えてて」

この前、とは1月11日のことだ。初めてギルド、図書館と会った日である。そして、最後に鏡を傷つけた慟哭の十字架のフィラスという女。

それに——あの少女。

腕にあった魔道書回収集団の紋章。しいてはあの『人』。分からないことだらけだ。

鏡には聞けない、あの日に約束したから。

「張月」

と、そこで一つ鏡の音が張月の耳に届く。

「貴方は一応魔術師ではありますが、限りなく『一般人』に近いのです。そのあたり分かってますよね」

張月も鏡も魔術師と呼ばれる者である。しかし、張月には魔術は使えない。

「ああ、分かってるけどさ」

張月には魔術に対する知識、常識がまるで無い。それは12日にいやというほど自覚させられている。

けれど、どうしても魔術と言うのを理解する気にはなれなかった。そして、張月には考えていることがあった。それは、15日のこと。

1月15日

1月15日（日）

昨日の宣言のせいか、早めに目が覚めた張月は同時に鏡の言葉を思い出していた。

『知るときがくれば話します』

その言葉が深く胸突き刺さり、その刃は残る。恐らく消えることは無いだろう。

適当に朝飯を食べ、着替え、見舞いに行こうとして、ドアを開ける。

図ったように開けると同時に、ピンポーン。と後ろでインターフォンが鳴り、目の前には見知らぬ男が立っていた。

「どうもこんにちは」

「……どなたでしょうか？」

やけに爽やかに挨拶をする男が立っていた。身長は一八〇ぐらいであり、張月は見上げてしまう。男はそのままの調子で、

「今日は一つお願いがあつてきたんですけど」

「……はあ」

何かの勧誘か？ などと思いつつ答える。怪しむ顔をしている張月の反面、にこやかに笑っている男は、突然言い出した。

「私達の仲間になりませんか？」

「は？」

——仲間？ どっかの新聞の勧誘？

「……すいませんが、俺急いでるんですよ。だから——」

「貴方は桐野張月。そして、魔術師。合っていますよね？」

初対面の男は張月の名前を言い当てる。

だが、現時点でそこは重要ではない。今の時代やろうと思えば名前を入手することは不可能ではない。

問題は、その後。

——こいつ、今なんて……。

今、『魔術師』という単語が聞こえた気がした。いや、確実に言っていた。それが何を意味するか。

「お前、何者だ……」

ひどく嫌な予感がする。否、それしかなかった。

「一つ取引をしましょうか」

男は張月の言葉を見無視し、話を続ける。今の口調は先ほどのような飄々とした風ではなく、冷静だ。

「今この周りには私のほかに数人の仲間がいます。そして、彼らは別に貴方を狙っている訳ではない」

冬の冷たく鋭い風が二人の間を突き抜ける。

沈黙は一瞬。

「誰を、狙うつもりなんだよ」

その言葉には明らかに怒気が含まれている。何を狙おうとしているのか、その予測をする。——一人しかいないではないか。

「それは——貴方が一番分かっているのでは？」

「デメエ!!!」

その言葉の瞬間。反射的に張月は叫び、その男を殴ろうとした、が。

「あれ？」

目の前には誰もいなくなっていた。まるでマジックショーの様に。だが決定的な違いはネタがまったく分からないところだ。

「まったく、本当に。本当に無知だよ君は」

男の声が張月の真後ろから聞こえてくる。いつの間に移動したのか、それとも何か奇術的なことをしたのか。それは馬鹿な張月には分からない。

「さて、話を戻そうか。どうしますか？ 私達の仲間になるか、それともあの人を殺されるか」

突きつけられる二択。しかし、どちらが正解というものもない。

だけど、

「っざ……けんな！ く、そ」

もう一方に決めれるはずが無い。ありえない。

張月は歯が砕けそうなほどに食いしぼる。けど、一瞬でもそのリスクを考えてしまうとその手は出せなくなってしまう。それほどに、大事なものだから。

そして張月は次の瞬間、全身から力を抜いた。

「……分かった……」

もしも、男が言ったことが嘘だろうと、そこに一パーセントでも真実という可能性があるのなら、張月は、その人を盾にされた張月は強くて脆い。

パチパチパチパチ、と乾ききった嫌味たらしい拍手が響き、近づきながら言う。

「ようこそ、クロイクス・ラメイション 慟哭の十字架へ我々は君を歓迎するよ」

——それって……？

何か聞き覚えがある単語だった。過去の記憶がリフレインされる。そう、1月12日鏡を傷つけたフィラスと名乗っていた女の言っていたギルドの名前だ。

男は目の前でそれを告げると、張月の右の二の腕に触れる。

「っ！」

ほんの少しの痛みが走り、やや顔をしかめる。痛みの元を見るが何も無いように見える。

「何を……」

そう、呟いたときにはすでに男は張月の視界から消えていた。そして、最後に声が響く。

『五日後、君にはやってもらうことがある』

——く、そ。何だってんだ今は……。

張月は、そのまま病院へと向かう、彼女の見舞いへと。少し痛む右腕を気にしながら。

その頃、一人の女性は病室から外を眺めていた。ここは四階、それなりに眺めもいい。

ここは茜々崎総合病院。茜々崎市にある唯一の総合病院だ。

——…遅いですね。

彼女——澄崎鏡にとって張月は大事な人だ。守らなければならぬ対象でもある。彼を愛しているわけではない。ただ、責任が重く、重く鏡の背中にのしかかる。

張月をこの世界へここまで引きずり込んでしまったのは鏡なのだから。

正当防衛。

仕方ない。

しょうがない。

そのような言葉で逃げ道を作れるほどその責任は軽くない。

——だから、私は張月を守らなければなりません。

改めて、心の中で決める。

「——？」

その時、ふとおかしな感覚がする。それは、魔力が使われている感覚。

けれど、その感覚はすぐに消失する。それに、前のような魔力のぶつかりあいではない。

魔術師というのは世界中に存在する。なので、今のように魔力が使われるというのは対して珍しいわけではない。

前のような衝突の感覚ではなかった。そこから鏡は危険性皆無と判断する。

今一度空を眺める。今は一〇時、彼はまだ来ない。

1月19日(2)

村雨零斗は平真の話を聞いていた。先ほどまでのテンションと違い平真の表情は真剣そのもの。

平真という人間を零斗はよく分かっていないところが多い。
ブラックスベール

黒魔道書もだが、あの時図書館の人形に投げかけたあの言葉。

『私から全部持っていくつもりか!』

と、確かに言っていた。零斗の知る限りいつも笑顔で、無駄に元気な平真が表情を歪め、怒気を露わ^{あら}にしたまま。

だが、零斗には詮索するつもりはない。聞いたところで、一体自分に何が出来るのだろうか。

「――でさ、ここって『魔術特区』でしょ？　それで、聞いたんだけど――」

と、そこで平真は言葉を一度きり、深く呼吸をしてから零斗を見る。

「ここに、この町に、『聖書』があるかもしれない」

「……は？」

あまりにも唐突に告げられたその言葉に零斗は絶句。

――今……なんて……。

聖書と聞こえた気がした。けど、それは……。空耳でありたかった。

聖書は『聖魔道書』と呼ばれる魔道書であり、魔術師の世界で争いの火種になる一番の理由。

現に、一〇年程前に図書館と王室の戦争に近い抗争があった。

それまでに力は莫大であり、普通の魔術師に制御できるかも疑わしい。

平真は、そんなものがここ茜々崎市にあるというのだ。

「信憑性は……いや、どこでそんな話を」

「……ごめん、それは言うこと出来ない。でも、かなり信憑性が高

情報ってことは言える」

「そう……か」

唐突すぎて零斗の頭は処理が追いついていない。そのまま沈黙へと向かっていこうとしたところ、

「う、ん」

三人目の声がした。それはベッドの上で気絶していたノエル・カリスエッジの声だ。

上半身を起こし、まだ焦点があっていない目で周りを見渡す。

「あれ？ 私……」

「かつ!!」

いきなり平真は立ち上がり、目にもとまらぬ早業と言ってもいい程の速さで跳躍。

「わいいいい!!」

「ゲホッ!!」

ノエルに抱きついていった。否、タックルを食らわしたと言うべきか、それほどの勢いだ。人によっては首をもっていかれていたかもしれない。

「な、なな何ですか貴女は!？」

「こんにちわ! 私は平真華里。よろしくねノエルちゃん!」

「は、はあ」

「……はあ。」

零斗は隠れて心の中で溜息をつく。

一応、ノエルはギルドの人間なのだ。それなのに何をよろしくなのかと。

零斗は二人が何をしていようと止めることはしない。先に言った通り魔具を取り上げている以上ノエルに害は無い。

むしろ、今の状況の方が平真に抑えられている分話しやすい。

「それで、だ」

二人が会話している（平真がほぼ一方的に話しかけている）所に零斗の声が入る。

「何でさっきはあんなに怖がっていた。言ったら何かあるのか」

「そ、それは……」

また、歯をガチガチと音を立てながら震える。何かにそれを抑制されているかのように。

「村雨！ 待って！」

平真が割って入る。

「これ、多分だけど『機密術式』じゃないかな。それもカウンターがものすごく強いのに」

「機密術式？ ……それは」

「うん、人に施すものじゃない。……村雨、一つお願いがあるんだけど」

機密術式とは『プロテクト防衛機構』の一つであり、魔道書回収集団独自の術式の一つ。『ある特定の知識、言語を抑制し述べる、呼び思考した者には強力なカウンターが返ってくる』術式だ。図書館の人形には施されているが、人間に施すとなると話は別となる。人間は人形と違い思考をする。気づかぬ間に深くまで。

「……何だ」

零斗はなんとなくだが、次に平真が言う言葉が分かった気がした。
イクティスビエス「魔力断絶空間。あれをノエルに使ってもらえないかな」

その提案が出たのは1月15日の出来事からというのは想像に難くなかった。

あの人形の時。魔力の完全消滅による機密術式の破損。

「村雨には辛い、ってのは分かっているつもり……けど、ごめん。放っておけないの」

——……くそっ。

平真は正直だ。行動にも、言動にも、表情にも、色がある。だからこそ、そんな顔をされて見られると零斗は大いに困る。真剣と分かるから、色々なことに疎い零斗でも、どうしても分かっってしまうから。

「……………気を失わない保証は無いからな」

それに、一一年前のように暴走する可能性だって零^{ぜろ}じゃない。

——考えるな……。

昔を思い出したくは無い。それから逃げることで出来るわけが、無い。

「平真、どいてろ」

零斗はノエルの前まで来て黒魔道書^{ブラックスベル}を取り出す。まだ、ノエルは自らの体を抱き、震えている。顔は下を向き、何かに耐えているような印象を受ける。

——誰だ、こんな……。

そして、零斗は術式を展開する。ノエルの周りから魔力が消失し、ノエル本人の魔力も消える。

図書館の人形の時と違い、人間には生命力がある。だから魔力の
みが無くなっても特に問題は無い。

ただ、少しの間魔術を使えなくなるだけだ。

「……はあ」

零斗は一息つく、体力的と言うよりは精神的に疲れたのだ。やはり、黒魔道書を人に使うのは慣れない。

「ノエルちゃん大丈夫？」

「あ、はい。やや体が重いですが大丈夫です」

「今から言うことに答えれば魔具は返す。いいな」

ノエルは真剣な表情で無言のまま零斗の言葉に頷く。あの魔道書はよほど大事な物なのだろう。

「俺を殺せ、と命令したのは誰だ」

「それは……。はい、慟哭^{クロイクス・ラメイション}の十字架のフィラスっていう人から……

『上』からの命令だ、と。まだまだ『下』の私に防御機構をかけ、

『あの場所へと近づいた者を、及び私の姿を見たものを殺せ』、と
その防御機構が機密術式だったのだろう。しかし、ノエルの言葉は分からない単語が多い。

「ギルドってのは分かったんだけどさ。上とか下とかその辺りはそのえーと……くろ、なんたら^の固有名詞なのかな？」

そこで平真が入ってくる。

「あ、私達のギルドは上下関係が激しく、『上』と呼ばれる人達は魔術の力がトップの人達のことを指します。ですが、姿を見た人はほとんどいない。少なくとも私は知りません。そして、私のような何も知らない者を『下』と呼びます。『下』の人達は『上』の人の命令には絶対なんです、逆らえばどうなるか分かりません」

「……それで、その絶対の命令、に失敗したお前はどうなる」

その言葉にノエルは下を向く、そしてまるで全てを諦めたかのような表情を見せる。

「……多分、ですけど私は処分される。これだけ内情について話してしまったし」

「……そんな危険性があって、何故ここまで話す？」

「でも、けれど。あの魔具だけは、見捨てることなんて出来ない」

ノエルはあの魔具をどうにかして取り戻したいだけなのだろうか。命を懸けるような代物なのだろうか。

「お前は、これからどうするつもりだ」

「そ、そうだよ！ 今戻っても……そう、なっちゃうんでしょ？」

言葉を濁すが、つまり待っているのは死。

「そう、ですが……」

『おしゃべりしすぎだぞ。ノエル・カーリスエッジ』

突然頭に響いたその言葉。反応を見る限りこの場にいる全員がその言葉を聞いている。

次の瞬間、一人の男が部屋の中心へと出現した。

「やれやれ、やはりこいつに行かせたのが間違いじゃないか……回収させてもらうぞ」

男はノエルに手を伸ばす。ノエルは今魔具を持っていない。加えてノエル自信の蓄積している魔力は零に等しい。魔具を持っていたところで何も出来ない。

「誰——」

そう、零斗が声を発した時には既にノエルと男の姿は消えていた。

「空間、転移？」

平真がそう呟く、残された二人にはただただ突っ立っているしかなかった。

——何……だ。

同日夜、とある公園。二人の人は立っていた。一人は遅刻ギリギリに、一人は集合五分前に。

現在の時刻は十時。遅刻ギリギリに来た人は両手を合わせもう一人の人に営業マンの如くぺこぺこ腰を曲げ、頭を下げる。

許してもらえたのか頭をあげ、頭をかきながら苦笑いを浮かべる。

「今日、何があったのですか」

もう一人はさらりと本題へと入る。そう、全て今日の事。

1月20日

1月20日（金）

昨日の出来事を思い出しながら結局のところ何も出来ることも無く、放課後となる。

——…くそっ。

唯、思うことはそれだけ。

ノエルはギルドの一員で特に零斗や平真とも親しくなった訳でもない。

しかし、だけど、どうしても、気になっていた。

男と共に消える前の何かを求めている眼。それに、まだ魔具は零斗の家に置かれているのだ。

零斗自身何故かわからない、けど昨日のあの後からずっとなのだ。だからといって何か出来ることは無い。あの急に現れた男の正体もわかっていないわけではない。

つまりは、何かしたくても、何も出来ない。

「くそっ」

また小さくそう言った。これで一体何回目なのだろうか。

「少しよろしいでしょうか、村雨さん」

不意に後ろから声をかけられる、聞き覚えの無い声だ。後ろを振り向くと一人の女子が立っていた。制服の色から察するに一年生だろう。髪は長く、前髪に眼が半分程度隠れている為、表情は読めない。

零斗に一年の知り合いなどいない。そもそも最近まで一人も友達といえる人もいなかった。

「何か用か」

「ええ、用があるので声をかけました。時間、少しよろしいでしょうか」

淡々と少女は語る。背は一五〇後半ぐらいだろうか、不意に見える凜とした顔立ちには何か秘めたものを感じるが、表情からは何も感じ取ることが出来ない。どこか不思議な雰囲気をする女生徒だった。

「何だ？」

「1月14日」

女生徒は口にする。その一言、たった一言に零斗はかなり動揺する。さらに彼女は続けて、

「私は澄崎鏡^{すみとみかがみ}。間接的にも『あの事件』の関係者ですよ」
そう、自己紹介をした。

……そして、結果として二人はあの誰も人がいない寂れた公園へと来ていた。ベンチに二人は座る。

「――先ず、確認がしたい。澄崎はそうなのか？」

曖昧な言い方だが、それで伝わったのか。零斗の言葉に即座に澄崎は右手を前に差し出し、手に握られた白い円柱から『ある』物を構築する。

それは、『魔術刀』。魔力を扱える者のみが構築できる武器だ。
つまり澄崎は――彼女は魔術師。

「これでいいでしょうか」

「……分かった。代わりといったては難だが、澄崎の言った『関係』
つてのを教えてくれないか」

「ええ、勿論」

そして零斗は話す。あの四日間を。そして澄崎は話す。あの事件を。

先ず零斗が話し終わる。しばしの沈黙の後、澄崎から口を開く。
「やはりあれは『特殊術式』でしたか……」

澄崎の口にした『特殊術式』。それは大規模な術式であり、ある特定の状況下でのみ展開できる術式のことだ。

それは、展開する場所が『魔術特区』であること。さらに膨大の魔力を必要とする。

元来、特殊術式は魔術師がもつと世界の前面へと出ていて、いわゆる魔術信仰が深かった頃に大人数で展開させるような術式だ。

しかし、それを1月14日に『王室』の『模造品』は単独での特殊術式の展開に成功していた。この魔術特区・茜々崎市の境界を入れ替え魔術特区ごと茜々崎市という存在を消そうとしていた。世界の存在という物質を入れ替えるため、当事者以外誰も違和感を持つものはいない、とのこと。

それ程、世界を歪ませるほどの力を持つ術式が特殊術式だ。

「ああ、名前は確か……『プリンカバリスパレ白吸色球』」

「……ふむ、それは初耳の術式ですね。まあ、特殊術式を見る機会などそうそうありませんが」

『模造品』が零斗の父、村雨玄界によく酷似していることは黙っていた。理由は特に無いが、零斗の身の内話しをしたところで彼女にはわからないだろう。

そして、これだけの事を話しても何一つ動じない澄崎。そこに異常な程の胆力、知識があることを悟る。

「……澄崎は、何者なんだ？」

零斗はふと、そのようなことを質問した。だが、澄崎は、

「私はただの魔術師ですよ。それ以上でも以下でもありません」
その言葉に零斗はそれ以上の追求を出来ないと悟る。

「じゃあ、澄崎。何があったか教えてくれ」

「ええ、わかりました。それでは——」

そして、澄崎は話し始める。

「……くそっ」

張月は帰り道一人でそう呟いた。今日は鏡は何か用があるらしく「先に帰っててください」と言われた。張月はそのことに対して呟いてるわけではない。四日前、12日あの男と出会った事について、だ。

『五日後、君にはやってもらうことがある』

その五日後が明日に迫っているのだ。何かあるのかわからない、何が起こるのもわからない。憶測すら出来ない。

——俺は……どうなるんだ。

鏡に相談も出来なかった。心配をかけたくなかった。そして——約束したから。

『頼れる人』になる、と。

家へと着く、が何もすることは無い。やる気も出なかった。

真っ直ぐで、馬鹿な張月だからこそ迷っていた。

チクリ、とどこかが痛んだ気がした。

「……それって」

澄崎の話聞き、零斗は珍しく驚いた表情を見せていた。

「あいつが、そんなことをしていたのか」

あいつ、とは『図書館の魔術師』のこと。

「ええ、私も助けてくれました。それに——張月も守ってくれましたし」

澄崎はあまり口調に変化は無いが、なんとなくその張月という人を大切に思っているのだろう、ということは分かった気がした。

やはりあくまで、憶測の域は出ないが。

「それで、その『人』は何なんだ？ 俺は見たこと無いが……」

「——聖書」

ぽつりと澄崎が言う言葉、しかし、その言葉はあまりにも重い。

「あの人形は聖書を持っている。私はそう考えます」

「……聖、書を？　だが……」

「俺が『模造品』と戦ったときには何も無かったぞ」

そう、あの時にはそのような『人』が出てくることなど無かった。

「それは、あの『特殊術式』の中では干渉が無かったのでしょう。

それに、出てきた後もそこは裏通りではなかった、ですよね」

「ああ」

だが、今それを確認するために聞くことも出来ない。今ここに、図書館の魔術師はいないのだから。

「……って、ん？」

ふと、そこで一つの疑問が浮かび上がる。何故、あの図書館の魔術師は――、

「あいつは何故聖書を使えた。あれには暗号術式が施されているはずだ」

「ですから、先ほど言いましたが『干渉』したからですよ」

「何に……だ」

「聖書に、ですよ」

「――っ。少し待て、それは」

暗号術式が解読されていない今。可能性は一つ。ここに、茜々崎市に、平真が言っていたように。

「ここに――この町に聖書が封印されて、いるということか？」
今それが繋がる。

「封印場所は恐らく、あの裏道」

澄崎は淡々と述べていく。

「……俺は毎日あそこを通っているんだぞ。普通、気づくものではない――」

「そこに存在しているからこそ、貴方は常にそこを通ってしまうのですよ」

存在感。

零斗は知らず知らずにその聖書という存在に惹かれていた。他の

魔術師も然りである。

魔力を体内に持つ魔術師、及びそれに順ずる者。さらに魔力を感じれる稀有な一般人。

そういった魔力を感じる者は近くを通るとそこを見てしまう。まるで群衆が見ているほうをつい見てしまうように、目立つ人に視線が向いてしまうように。

そこにある聖書に惹かれ、零斗はあの道を通っていたというのだ。
「そう……か」

零斗は上手く言葉を紡げなかった。魔術師の歴史の中で争いの根幹に位置する莫大な力を持つといわれている聖書。それはこの町にあるというのだから。

刹那、一陣の風が吹き抜けた。

「よく、気が付いたな」

そして、別の男の音がする。それは、聞き覚えがあり、忘れられない声。

「どこだ！」

零斗は滅多に見せない怒声で言う。あまり崩れない表情までもが歪んでいた。

男は――真後ろに出現した。

気配は無かった。いや、零斗が単に取り乱していて気づくのが遅れただけかもしれないが。

突然したその気配に零斗と澄崎は勢いよく距離をとるため後ろへ下がる。

「貴方は、誰で――」

「ノエルをどうした！」

零斗は澄崎の言葉を遮り叫ぶ。零斗本人には澄崎の言葉を遮ったという自覚は無いだろう、それだけその男に向けて敵意を向けていた。

しかし、男は零斗の言葉を意にも介さずに言う。

「これは警告だ。その女、これ以上探るのはやめろ。大事な人が

「どうなっても良いのか」

女、ということは澄崎へと向けられた言葉。この男は、澄崎とも面識があるのか。

「はて、それは一体誰のことでしょうか。分かりかねますね」

「つふ、まあいい。どのような結果になろうと後悔するのはお前だからな」

「貴方は誰ですか」

澄崎は途切れた質問をもう一度言う。それに男は両手を広げ、

「ふっ、私はギルドクロイクス・ラメイション慟哭の十字架の一員。警告はしたぞ。魔術師ども」

また、そのギルドの名前が出る。零斗も知っているノエルもいるギルドだ。

そう。この男はあの時ノエルを連れ、消えた男。

男は二人に背を向ける。そして再び――消えた。

「待てっ!!」

「空間転移。それも指定場所のタイプですね。恐らく何者か共犯者もいるはずです。それと、今追いかけるのは無駄です」

零斗のその叫び虚しく男は消える。澄崎の考察から導き出された答えにより、残されたのは静寂のみ。

「村雨さん、二つだけ宜しいでしょうか」

「……ああ」

「ノエルさんとは、誰のことか、そして何がありましたか」

協力できることなら協力しますよ、と澄崎は付け加える。

「……これは……俺の問題だ」

零斗は苦い顔をしながら言う。

協力の申し出は嬉しい、話すだけで分かるほどの多くの知識を澄崎は持っている。

だけれど、巻き込むことは出来ない。

魔術師とはいえ、澄崎には何の関係も無いのだ。こんな事には――巻き込むわけにはいかない。

「先のギルドの名前には聞き覚えがあります。それに、私はあのギルドに用が出来ました。目的の相手が一致しているなら協力した方が効率的だと思いますが」

その言葉に、零斗は静かに答える。

1月21日

1月21日（土）

「……ん……」

目を開くと光が眼に入ってきて眩しい。少しずつ身体感覚が戻ってくる。共に、今の状況に気づく。

——縛られてる……。

手を逆手に縛られ、身動きが全く出来ないまま横たわっている。彼女——ノエル・カーリスエッジは寝起きの所為か思いのほか冷静に物事を考えられた。

いや、ここは上手く考えられていない、と言うべきか。

「起きたか。ノエル・カーリスエッジ」

急に出てきた男には驚かなかった。その男は知っているから。ラグイア、それが男の名前だ。けれどノエルの知っているラグイアと口調がまったく違うことに違和感を覚える。どこか一線が切れた感じだった記憶がある。

「私を……殺しますか？」

ノエルは任務に失敗した。

それは許されることではない。さらにはギルドについて、つまりはこのギルドから言う敵に対して情報を教えたのだ。

当然の処分ともいえるだろう。

「いいや」

しかし、返ってきた答えは意外にも否定。

「お前にはまだ利用価値がある。ここで殺してしまうのは簡単だが、殺すのは惜しい。そのための『あっち』なんだからな」

「それっ、て……」

「よお、持ってきたぜえ」

「——っ！」

ノエルには聞き覚えのある声がする。――今は聞きたくなかった、その声が。

「フィラス、遅かったな何か邪魔でも入っていたのか？」

「ああ？ んだそのしゃべり方は、気持ちわりいぞ」

「それは失礼。……アツハハハ！ ありがとよお、これでやつと取り出せるなあ」

「すまねえ、やっぱどっちでも気持ち悪いわ。……んあ？ ノエルじゃねえか」

ノエルが視線を向けると見覚えの無い男を肩に担いだフィラスがそこに立っていた。

けれど、今のノエルにその男のことまで気にする余裕は無い。

「フィラス……さん」

ノエルの主、という立場を手に入れている女魔術師フィラス。『上』から発せられたノエルへの命令はフィラスを通される。

「おいしい！ こいつ、もしかしてミスったのかあ？」

だから、フィラスはノエルがここにいると言う意味をすぐに理解する。

「ああ！ そうだよ。目撃者を殺し損ねた挙句このギルドのこともぺちやくちやとなあ」

ノエルを見るフィラスの視線はさらに強く、鋭くなる。

「てめえは……」

「――だがまあ落ち着け。見ちまったんだぜえ？ 俺はよ『黒魔道書』に、それを扱う男をよお」

「っは、それはなかなかいい冗談だ。こんなちっぽけな町にそんな希少な奴がいるわけあるかよお」

――まさ、か。あの人のこと……。

そこでフィラスは「さて」、と言葉を切ると、

「この役立たずにはもう少し眠っててもらおおかあ」

ノエルの眼前へとフィラスの手が迫り……意識は闇の中へと落ちていく。

そして、最後に残った聴覚が微かにその言葉を聞いた。

『——って、全ては今日の夜、だなあ』

——きょうの……よ、る……？

ノエルの意識は完全に落ちた。

同時にある存在が眼を覚ます。

——ふふっ、やっと出てこれるわね。

不気味な笑いを漏らしつつ、立ち上がる。

ノエルの気がつく数十分前。

本日、課題テストから二日後、そしてあの男と会って五日目だ。

張月は……正体不明の痛みと格闘していた。

——く、っそ！ 何だこれ！

右腕を抱え、倒れこみながらも抑える。しかし、右腕のどこを触っても痛みが和らぐどころか痛みの元にあたってる感覚さえない。

寒気がした。確かに今は冬だが寒さでの寒気とは違う。何か、何かが自分の中へ入ってくる気持ち悪い感触。

そして、目が閉じられかけ、意識も朦朧とする。

「く……そ……」

とっ、と意識を失いかけた張月の掠れた視界に足が見える。

「はあ、めんどくせえなあ戻ってきて早々こんなことなんてよお」

聞き覚えがあるような気がした声。——張月の意識は完全に闇に落ちた。

同刻

あの事件、『プリンカバリスババレ白吸色球』から一週間が経つ。

零斗は一人公園へと来ていた。考え事と、一つ約束があったからだ。

——今日は……あれから一週間か、また休めないな。

ノエルはどこにいろのだろう。聖書はこの町にある。この二つの事柄は今の零斗にはどうしようも無い。

「——村雨さん」

呼ばれ、その声のした方を見るとそこには澄崎がいた。

——ん？

しかし、その澄崎の姿を見て零斗は何処か違和感を覚えた。

表情にこそ（恐らく）変わりはないが、どこか覇気というか、そういう感覚的なところで違和感があった。

「何かあったのか」

「張月が——攫われました」

澄崎は、軽くその言葉を告げる。

「攫われ、た……？」

「——はい、先ほど家に行くとき残留魔力がありました」

話によると張月という魔術師は魔術を使えないらしい。

つまり魔術を使った痕跡が残っているのがおかしいのだという。

「ですが、現状私にはどうすることも出来ません。ですので本題から入りましょう。実は——」

「ふざけるな」

その、あまりにも簡単に言われたその言葉に零斗は言う。

低く、何かを含んだような声で、零斗自身何が入っているかわかっていない。

「そいつはお前にとって大事な人なんだろう。だったら、何か方法を探すぞ」

「村雨……さん、それは」

「ごめんっ！ 待たせちゃった！」

そんな空気の中、場違いな声が響く。その声の主を――零斗は知っている。

「平真……お前、何で……」

「ほえ？ 鏡ちゃんまだ話してなかったの？」

「ええ、その前に少し話がありましたから」

「何々？」

零斗を置いてけぼりに話は進んでいく。その場に乱入した平真たいらま華里へ澄崎が先と同じことを説明すると平真は静かに頷く。

「そんなことが……」

平真はその言葉とともに目線を零斗へと向ける。

先ほどから二人で話していたのでやや後ろに下がっていたが、急に目線向けられてやや驚く（尤も、表情に変化は無いが）。

――何だ……。

その目は零斗には形容できない目だ。あの日と同じ、零斗にはわからない。

「一ついいか」

そこで零斗は、声を発する。

「ん？ どうかした？」

「どうかした、じゃない。何で平真がここにいる。それに澄崎のことも知っているのか」

「あー、うん。知ってるよ。だって私が合わせたようなものだし」

「どういう――」

「あー！ 細かいこと今は無しでOK？ 後で説明するからさ。とりあえず、私も協力する。それだけはわかって」

平真はやや叫びながら言う。対して零斗はそこで黙る。

「話を戻すけどね。私は村雨の意見に賛成かな？ でも多分だけど

――全部の目標は一度で解決できるかもしれない」

1月22日 第三章・終

1月22日（日）

深夜、一日の二十四時間が過ぎ日付は次の日へと変わる。今現在どこにいるかというあの裏道だ。直接その場にいるわけではなく覗き込んでいる形となっている。

待ち続け、三〇分は経った頃。四人の人が現れる。

たいらま平真の言ったことはこうだ。『聖書を狙っているのに間違いは無い。だったら、そこに張り込んでいれば自然と現れるはず』と。

「――」 「――」 「――」

何を話しているかは聞こえない。わかったのはノエル・カーリスエッジが縛られて横に置かれているということだ。

他には二〇代後半ぐらいの女性に、あの見覚えのある男。

そして張月と呼ばれる魔術師だろう。

――あれが桐野張月。きりの はりつき

特に変わり映えの無い学生だ。零斗にはそう見えた。けれど、おかしい点がある。

――何故、縛られていない？

そう、張月はノエルと違い何も縛られてもいない。よく見えないので表情から何かを読み取ることも出来ない。

「――つまええ」

女性の言葉が少し聞こえ、張月は魔術刀を時間をかけて構築していく。

大きく振りかざし、何も無い空間を――切断。

そこには確実に存在していた。

「行くぞ」

零斗れいとの声に呼応し、三人は飛び出す。

三人の足音に先ず反応したのは二〇代後半ぐらいの女——フィラスだった。

「ああ？　んだ、ってあの時の女じゃねえか、やっぱ来やがったなあ」

「へえ！　こんなところまでご苦労なこった」

続けて男——ラグイアが言う。

零斗は二度その男を見たことはあったが、口調がまったく違っているが。零斗はこれが素なのだろう、と思った。

「張月を返してもらいますよ」「ノエルを解放しろ」

澄崎と零斗、二人もそれぞれに目的を口にする。

しかし、言葉に反応する前にフィラスは張月が斬り開いた闇の切り口に手を突っ込む。

「ぐっ……」

フィラスは顔をしかめ苦しむ素振りを見せるが、構わず手を抜くと、そこには一冊の本が握られていた。

「さあて、よくやった桐野張月。後は……あの女を殺せ」

ラグイアは張月に対してそう言う。張月はそれに逆らうこともせず女——澄崎鏡すみぎきへと刃を翻す。かがみ同時にノエルの拘束を解いていく。

「っへ、やっと出てきたのかよお。めんどくせえやつだなあほんによ」

フィラスの声に応じるかのようにノエルは立ち上がる。

フィラスからその本を受け取り、笑みを浮かべる。

「別に良いじゃない。こうして私が使うんだから——聖書を」

その言葉とともに、世界は夜より深い闇に包まれた。

「やはり、あいつだけかあ」

フィラスは右腕を抱えながら一人呟く。その場にいる全員に見える光景はもはや先に見ていた夜ではない。

人の姿ははっきりと見え、けれどそれ以外は全て闇。左右、東西南北すらもわからない。ただ上下だけが設定されている空間。

鏡と平真。二人の目にはフィラス、ラグイア、張月が前に立っているのはわかる。けれど、

「村雨は!？」

その場には零斗とノエル、その二人の姿だけが見えない。

ここはどういう所なのか、平真は少しだけだが感じていた。前にも同じような感覚があった、と。

「もうわかってるとはおもうけどよお! あいつらは完全に『裏側』へ行った。助けになど行けない、そして聖書にあの男は……殺されるだろうよ」

「特殊、術式……」

平真がその答えを言う。それは1月14日にあった感覚と同じだった。『特殊術式』の中にいる感覚と。

プリンカバリスパレ

平真の言うとおりだ。ここは白吸色球の時と同じく、境界の中。

しかし、その答えはあまりにも不可解。

「一人で特殊術式を展開できる訳がありません」

鏡はそう反論する。けれど、平真の感覚は拭えない。体がこの感覚を覚えている。

「ううん、そうだよ。ここは特殊術式の中」

平真はそう断言する。実際それは間違いではない。ここは聖書が展開させた特殊術式の中で合っている。

「フィラス、お前は聖書に触れたせいで腕が使えねえだろ? さつさと後ろに下がってろよ。こいつらは、俺とこの魔術師で十分だ」

「つけ、いつもいけすかねえが時折本気でいけすかねえなあおい!」
そう悪態はつくがフィラスはラグイアの言うとおりに後ろへと下がる。

右腕が動かないというのは真実。過剰な魔力が体に悪影響なのと同じく、聖書という莫大な魔力は持つだけで耐性の無い者は体に不具合が現れる。今のフィラスの右腕のように。

「さて、魔術師。お前はあの女を殺して来い」

ラグイアの言葉を聞き、張月は鏡の前へと自ら進み、刃を構えた。

零斗は反射にも近い感覚で黒魔道書ブラックスベルを使っていた。そして、目を開けると――あの時の、ノエルと初めて会ったときのような空間が広がっている。

闇以外の何も見えず。人以外の形は無い。

「やはり、貴方だけ入ってきたのね」

冷たい、鋭い声でノエルは言う。

「だけど、一人で勝てると思っているの？ 聖書相手に」

「……ああ、できる。勝って、元のノエルに戻ってもらうぞ」

そして零斗は、眼鏡を外した。

男と張月が前へと出てくる。そして後ろに女が下がるのを見ながら平真は力強く歯を噛む。

「お前等はあああああっ!!」

そして叫ぶ。その叫びには怒気が含まれている。目の前に立つ男へと向けて。

張月はどうやら鏡のほうへ向かったらしく、少し離れた所で対峙していた。

助力に行きたいところだったがすぐに平真は諦める。

張月と鏡、この二人には他の人が介入できない何かがあるような気がしていたからだ。

「うっせえ雑魚が。お呼びじゃねえんだよ」

目の前の男が本を取り出し、円形の術式を平真の上空に展開する。術式は大きく、中心から複数の槍が出現。男が手首を平真の方へ向け、曲げる。

曲がると同時にその数十もの槍が全て射出される。平真を串刺しにしようと迫る――が、業火の炎が全てを燃やし尽くす。

その業火の中心に、平真は立つ。立ちながら、男を見据え、言う。
「私は魔術師が嫌いだ」

自らの意思を、確かめるように。自らに言い聞かせるように。

「図書館なんて、ギルドなんて大嫌いだ。何でみんな争うの。殺しあうの？」

炎が消え始め、平真の顔が見えた時顔からは一筋の水滴が落ちてきていた。水滴は――炎により蒸発する。

「私はっ！ 私の好きな人を傷つける者全員を許さない！」

平真は魔術師が嫌いだ。

「だから――」

一つ、決めていることがある。

それは『魔道書を決して使わない』ということ。

魔道書に限った話ではないが『魔道書』『杖』『四大元素武器』『短剣』『タロット』等、しいては『黒猫』。持っていてまるで『魔女』のような印象を受けるような魔具、そして使い魔を使用したくない。

初めて村雨に会ったときもそうだ。

ブラックスベル

何故あそこにあったのか、平真は黒魔道書を、父の形見である魔道書を消去しようとしていた。

けれど、結果として出来なかった。それは思い出からか、ただ自分が未練がましいだけなのか。

ふらついている間にそこへと辿り着き、あの人形と――村雨と出会った。

平真の母はギルドの人間で、父は一般の人だった。

子供、平真が生まれてからはギルドから退いていたが強制招集がかかった。それは図書館との抗争のためだったと聞いている。

平真の母は、その抗争の巻き添えになり、帰ってくることはなかった、返してほしかった。

平真の父は母を溺愛していた。

母の突然すぎる死という現実には精神は不安定になり、入院した後――自殺した。

残ったのは平真一人、彼女は図書館とギルド。魔術師によって全てを失った。

それでも、平真はその悲しみにくれる表情を黄希島や村雨。学校全員にも見せたことがない。

それは彼女の強さか、弱さか。

ここ、茜々崎市に転校したのと、泉涼という親友に会ったのは中学三年のこと。

そして今に至る。

「だから……」

その先の言葉は出ない。

けれど、そこにあるのは強い決意の眼。改めて携帯を手を持ち術式を展開する。その目線が捕らえるのは、男。そして、平真は言う。

「いくよ」

自らの中に有る様々な感情を持ち、平真は対峙する。

無限の闇の中鏡と張月、二人は立っている。

鏡は張月と話がしたかった。だから他の人とは離れるような場所取りをしている。

「張月……」

鏡も魔術刀を構築し、鏡と張月。お互いに刃を向けそのまま動か

ない。

「何を、しているのです貴方は」

張月は何も答えない。鏡は自分を悔いていた。わかっていたから、何故相談もしてくれなかったのか推測が付いていたから。

——何故、気づけなかったのでしょうか……。

何度も張月の悩んでいる顔を鏡は見ていた。なのに、気づけられなかった。

悔しい。

どこか自分の中で「そんなことはない」と樂觀視していたのかもしれないし、ただ見過ごしてただけかもしれない。

今、何を悔いても遅いことぐらいわかっている。

しかし、わかっているだけで心は追いついてくれない。

何をすべきなのかも迷っている。

一瞬、鏡の体が震え——全てが、動き出した。

張月は刀を構え進んでくる。張月の手に持っているもの、それは二メートルほどの魔術刀。

さらに先ほど張月が斬り、取り出された聖書が使用できたことからその切断能力は計り知れない。

今や、張月の魔術刀は暗号術式まで切り裂く切断応力を持っている。

張月の魔術刀は魔術だろうと、特殊術式だろうと、今のこの空間だろうと。やろうとさえ思ってしまうえば魔術的な物は何もかも切り裂ける。

張月には魔術としての常識が無いから。

横薙ぎに魔術刀が振るわれる。それに対して鏡は後ろに下がるしか選択肢がない。

「……廻れ」
リ・ターン

鏡の作り出した魔道書。イージースペル簡易魔道書を取り出し唱える。

瞬間、鏡の手の上にあった魔道書が光を放ち術式が展開され、元

の魔道書は一瞬にして粉々の塵となる。

展開された術式は地面を這い、張月の下へと向かう。

しかし、張月の元まで向かう約一秒間。張月はその間に地面ごとその術式を斬る。

「くっ……」

術式は斬られ、張月の魔術刀は防御術式では防ぐことが出来ない。ましてや近づけば防御術式ごと斬られる可能性だってある。

——どうすればいいのでしょうか……。

それに、鏡に張月を傷つけるなんてことは出来ない、したくない。先の術式だってかなりの覚悟の上での展開。

張月は魔術刀を振るう。

齒に自然と力が入る。

——全部、私の責任です。

おそらく今回の案件は前回の事が関係している。

それと思うとさらに悔しくなり、齒を食いしぼる力も強くなる。

そもそも、あの時に——。

その思考が鏡の動きを鈍らせる。足が縛^{もつ}れ、体勢を崩す。

張月の刃が、眼前へと迫る。

「——ごめん」

一言が発せられる。

それはどちらが発した言葉であろうか。もしかしたら、両方なのかも知れない。

鏡は倒れ、張月と向き合う。そこで鏡の視線は止まる。

「……っざっけんな……」

男の声をする。その男の左手に持った魔術刀は鏡の頭の数十センチ横で止まっている。

「ふざけるなあああああああああああああ!!」

張月は刃を翻す。その刃が向かう先は——張月自らの右腕。そして、右腕を魔術刀で斬った。

「何をっ!」

張月の右腕からは血が噴出——したかのように見えたが、鏡の見る限り腕はきちんと繋がっている。

「こんな……こんなっ！」

張月は叫ぶ。それは今日対峙してから初めて発する言葉だった。

「はり……つき……」

「……鏡。ごめんな。また俺、守られてた」

だから、と張月は決意の目を鏡へと向け、言う。

前にしたような『決意』を。

「今度こそ。絶対に俺が守ってやる」

そして決意を言い放つ。……少し恥ずかしくなったのか張月は視線を少しずらし、

「だから、今は休んでろ」

と、付け足す。

「……わかりました」

鏡も少し下を向きつつ言う。もう、双方ともお互いに顔は見ない。見られない。

「じゃあ、行ってくる」

そして、張月は鏡の傍から離れ、フィラスの下へ向かう。鏡を傷つけた、あの女の。

——くそっ！

張月は心の中で呟く。

その感情は先ほどの光景からだ。張月は右腕を斬るまで意識も記憶も深層心理に押し込められているような感覚だったが、今でははつきりとしている。

——誰だ……。

そして初めに見えた光景が『あれ』だったのだ。

張月は憤慨している。

もう、二度と見たくも無い光景だったのに。

二度と、見させてやるものかと自らに誓った光景だったのに。
その光景は、前にもあった。

1月12日。忘れられないあの日に。

——あんな鏡の泣き顔なんて、二度も見たくもねえんだよ!!

「ツチ、テメエ何者だ^{なにもん}」

そう声を発したのは魔術師の男だ。男の真正面に立つ魔術師は答える。

「私はただの魔術師だよ」

平真華里は魔術師が嫌いなただの魔術師だ。

零斗のように『才能』を持っているわけでもないし、鏡のように博識で魔道書を構築できるわけでもない。

けれど、平真の周囲になるのは『二つ』の術式。

「あんまり人には見せたくなかったんだけどね……」

平真が展開させたのは、連立魔術と呼ばれる同時複数術式展開。

平真はあの時の『人形』そして『模造品』のように三つの術式を同時展開できるわけではない。

けれど、『二つ』同時に平真は展開できる。

その中、平真と他の連立魔術を使うものとは、決定的な相違点が見て取れる。

魔具は一つにつき術式は一つ。例外は無い——はずだった。

あの『人形』に『模造品』は初めから魔具をその体内に複数内蔵しており、一つから一つの術式を幾つも展開させていた。

が、平真は違う。

平真は一つの魔具から二つの術式を展開しているのだ。

たかが一つ増えた、ではない。一つの魔具に一つの術式という魔術師の常識を覆すほどの出来事が今ここに起こっている。

新たな魔具として出てきた携帯という術式展開装置。インプットデバイス

それが魔術師の常識を覆した瞬間。

「殺しはしないよ。……けどね、少し黙ってて」

二つの術式が展開されその二つは一つの術式へと成る。微細なま
でに魔力を制御出来る平真だからこそ。コントロール
バーゲット

「煉獄」

男の周囲から巨大な炎柱が噴出し、二〇〇〇度近くの炎が男を包む。

「ヒヤッハハッハハハハハ！」

その中でも男は笑い続ける。

次の瞬間その炎柱の一部に大穴が開き、そこから男は悠々と出てくる。

「いやー、まさかこんなところでここまでの人材を見つけるとは思わなか——っ！」

男の挙動は一瞬止まる。そして視線は平真からも外れる。

「ふざけるなああああああああああ！！」

もう一人の男——張月の叫び声が響く。

「く、馬鹿な……枷は時間をかけて仕掛けたというのに……」

男はよろめく、それほどの何かがあったのだろう、と平真は解釈する。

張月の叫び声で確信に近い何かを得る。

——鏡ちゃん、上手くいったみたいだね。

それがわかったような気がした。だとすれば、残っていることは、
「——お前にみんな邪魔はさせない。私と遊んでればいいんだよ」

この男を、抑える。

張月の見据える先にはフィラスがいた。1月12日に鏡を傷つけた女の魔術師。なにやら右腕を抱えている。

——関係ねえ……。

あの日、鏡を傷つけた。あの日、あの男を殺した。あの日、張月は思ったのだ。

「行くぞ、魔術師。全部、斬り捨ててやるからよ！」

「っは、舐めてんじゃねえぞガキがあああ！」

フィラスは動かない右腕をよそに左腕だけで地面に何かを書いていく。ガリガリガリ、とその音が響く。張月は走る。その何かを書かせる間もなく斬り捨てようと。

「ここじゃ何をしてもお、どこにも関係ねえんだ。だったら——オレがこんなことしても問題ねえってことお！」

フィラスの真下から光が噴出した。二人の距離はおおよそ十メートルといったところか。

張月は目を閉じる。

次に開けたときには巨大な『物』があった。

闇のように黒く巨大な異形の『物』。

よく見ればだが足、腕、体、とパーツが分かれているように見えなくも無い。

張月は構わず突っ込む——けれど、

「——っがあっ」

横からとてつもない衝撃が入る。息が止まり、肺からは空気を押し出される。そのまま数メートルか飛ばされ止まる。

「な……んだ」

体を起こし、改めてよく見る。その巨大なものは人を形作っていた。それは吼える。

縦には二、三メートルはあり、横にも大きい。闇のように黒い塊が張月に迫る。

「魔具が使えねえからって、魔術が使えねえと思うなよお」
フィラスは言う、けれど張月は意にも介さない。

今日の前にある巨大な物を見たら普通の人なら腰が抜けるか逃げるかするところだろう。

けれど、今の張月は怖気づかない。

逃げない。

普通の人なのに。張月は言ってしまう一般人の部類だ。

別に頭がいいわけでもない。運動が特別できるわけでもない。喧嘩だって滅多にしない。魔術師だからといって魔術も使えない。

張月は馬鹿で、無知で、自分から答えを出せないことだって多い。今回のように自分で溜め込んでしまった結果がこれだ。

何故張月は怖がらないのか、逃げないのか、その理由^{わけ}は決まっている。

変えることだって、変わることだってないだろう。

「おおおおおおお!!」

それがあれば張月は強くなれる、戦える。何とだって。

張月はその魔術刀を振るう。重さは0に等しく、人は斬らない魔術刀。それが張月の魔術刀。

振るわれる刃は巨大な物の腕を切り落とし、ズドン! とかなりの重量の音がする。

まともに食らっているのは骨の一本や二本ではなく、内臓を潰されていそうな質量。

「はあっ!!」

さらに張月は追い討ちをかける。その刃を即座に翻し、胴体を真一文字に切り裂く。

『物』上下が二分され、ずれていく。そして崩れ落ちる。

「レプリカはいくらでも作れるんだぜえ? あの男が死に、この世界が元に戻るまではよお」

「お前は、お前……達……は」

張月はそこで力尽きる。魔力の使いすぎによる過労。フィラスの巨大な物の腕が迫る。

「つぐ、くそ……」

零斗は膝をついていた。客観的に見てもその状況はあまりに零斗が劣勢。

聖書の力を甘く見ていたわけではない。

ただ圧倒的な力量の差。それだけなのだ。

「しぶといわね。何でそこまでして粘るの？」

それでも、零斗はまだ倒れてはいなかった。しかし、それは零斗がしぶといという訳ではない。

「うる、さい……っぐ!!」

ノエルは無言のまま零斗を数メートルと吹き飛ばす。

魔術の仕業だろうが、黒魔道書は間に合わない。ブラックスベル

黒魔道書でも防げない。速すぎる。

零斗の所持するもう一つの魔具。ホワイトスベル白魔道書の方を持ち出して防御

術式で軽減するので精一杯だ。

だが、軽減できているだけでも奇跡と呼べるかもしれない。

だが一方でそんな奇跡など起きるわけが無いという零斗の考えがよぎる。

「しかしまあ、解せないわ。貴方達の行動には」

地面に這い蹲っている零斗を見下ろしながらノエルは言う。

勝者の余裕。

それが今、零斗の無事を構築している。

「何故私が聖書を持つまで見てたの？ 聖書を取り出す前に邪魔すればよかったのに」

「決まって……るだろ」

零斗は少し顔をあげ、その冷たい視線を送ってくるノエルの顔を見る。

そして思う。違う、と。

「信じれなかったってのはある。けど、ここに、茜々崎市に聖書がそんなもの

あり、そしてお前達はそれを取り出す方法を知っている。……だつたら後は簡単だ。わざと取り出させ、後で俺達が回収し、廃棄する」それが考えた作戦だ。平真の予測は零斗の言った通り、相手は聖書を取り出す方法を考えていた。

「はっ？ 何よそれ。聖書を使える人がいたらそれにも勝てる、って思ってたの？ 馬鹿じゃない」
呆れつつノエルは言う。

「勝つ。俺達は負けな——がっ！」

零斗の少し上げた頭を無理やり地面へと押し付けられる。

零斗は今まで分析し、術式のタイプを見極めようとしており、一つ答えに辿り着く。

恐らく、ノエルが使っている術式は練成術式という何かしらの『材料』から大量の『物質』を作り出す術式。

その材料というのはおそらくこの『闇の世界』そのもの。

無限に広がるそれは大量の『材料』だ。

「もう一つ」

ノエルは完全に地面へと押し付けられている零斗を見ながら、言う。

「何故お前は、ノエル・カーリスエッジを気にかける。殺そうとした相手なのに」

「……知るか」

少し考えた後、零斗は言った。

——俺だって、わからないんだよ。

「は？」

「知らないな。そんなの、自分でもわからない。けどな！ 俺はノエル・カーリスエッジってやつを助けたと思って思ってる。何故かそう思ってるんだよ！」

あの時、男が連れ去った後からずっと気にかけていた。ずっと思ってた。

「俺は、お前を元に戻す！ 今のお前は『ノエル』じゃない。お前

を抑え——聖書を取り上げる」

体を起こす。今度こそ邪魔は——来なかった。

否。邪魔するものは、全てかき消されていたのだ。

「なんっ……」

ノエルは絶句する。今確かにノエルは零斗に向かって術式を展開し、攻撃した。けれど、その魔術は零斗のすぐ近くで消滅した。

確かに、零斗の所持する黒魔道書は『その区域の魔力濃度を0にする』術式を使える。

しかし、その区域の中に自分が入っていれば自分の魔力も同時に消滅する——はずだった。

零斗は1月14日に一度は自分の中にある魔力を消滅させたことがある。

けれど今は違う。

自らの魔力を奪ってはいない。

だが今、確実に黒魔道書の術式は零斗を包んでいた。

「ははっ……」

零斗は笑う。一一年間まったく見せたことも無かった笑いが何故か零れる。とてもとても、深く黒い笑いが。

「あっはははは！」

零斗は立ち上がる。

「なん、なのよそれは……」

彼女は恐怖していた。聖書の魔術が通用しないことに、今の零斗の様子がおかしいことに。

まだ聖書は数十分の一度の力しか出せてはいない。暗号術式を全て解読しなければ完全な力は扱えない。

けれど、それだけでも通常の魔術師など雑魚。

黒魔道書や禁魔道書デューチャだろうと相手にはならないはずのだが。

——わからない、わからない……これは一体なんなの……。

ノエルには何故効かないのかわからなかった。理解できなかった。

目の前の零斗が右腕をノエルのほうへと上げ、握る。

「——いつ!？」

彼女は声にならない叫びを上げ、右腕に激痛が走る。反射的にその右腕を見る。

そこに、

何も無い。

ぞわり、といやな感覚が体の中を突き抜ける。

感触はある。けど、何も無い。何も存在しない。そこは無^むしかない。

背筋に何物にも表現しがたい寒気が走る。背筋は凍え、息がしにくい。体も震えだす。

聖書という絶対的な力を持っていながら、ただの黒魔道書を使う零斗に恐怖を感じる。

「う、あ、うあああああああ!!」

ノエルの叫び声とともに目の前に巨大な術式が展開され、闇という材料を喰らい、巨大な剣を構築する。

全ての剣はまるで拳銃から放たれた弾丸のように真っ直ぐ零斗へ向けて射出される。

それを見ても零斗は動かない。動じない。

「ははっ……ははははは……」

この状況下で零斗は笑っていた。

諦めでも、侮蔑でも無い。そこにあるのは確信のみ。

巨大な剣は零斗へと迫り、何かに飲み込まれるように消えていく。どのような魔術だろうと、魔力を使っている限り魔力を断^たっている空間の中では存在できない。

零斗は、ゆっくりと前へと進みだす。

何かを、歪めながら。

「やめ、ろ。やめろ来るなやめてええええ！」

零斗の周囲三六〇度に殺傷能力が高そうな刃物が出現する。その数百もの刃は一斉に零斗へ向け、放たれる。

それでも、ザッ、ザッ、という足音は止むことを知らない。通常の魔術師、人間ならば既に肉片になっているところだろう。

「そんな……」

後悔の念が押し寄せる。早く、殺しておくべきだった、と。しかし、もはや遅い。遅すぎた。

彼女の思考というのは停止しかけていた。何も考えられない。

「なあ、ノエル」

零斗のその一言で再びノエルの思考は動き出す。

「その聖書。それを俺に渡してくれ」

「駄目……に決まってる、でしょ」

「そう、か」

零斗はもう一度腕を動かす。

ノエルは反射的に防御術式を展開する。

が、その『何か』は防御術式の内側へと入り、ノエルの腹に強い衝撃をもたらす。

「がっ……」

胃から何かが逆流してきそうなくらい嫌な感覚。痛みよりも苦しい寒気。

「——なん、で……これは、何？」

予測の出来ない攻撃ほど効くものは無い。何の準備も、覚悟も出ないのだから。

相手の『何か』は確実に入り。

こちらの『全て』は何も届かない。

これほどまでに絶望的な状況があるだろうか。

体が、心が、折れかける。

「——これ……が。」

これが、黒魔道書。これが——。

そして思う。禁断の思考を。

『勝てるわけが無い、彼が怖い』と。

ノエルは膝をつき、零斗の顔を見上げる。それは事実上の敗北宣言。

勝負というのはどれだけ強い武器を持ってようが、強い体を持つていようが。

心が折れたほうが、負ける。

ゆつくりと、しっかりと、闇より深い黒が迫る感覚がする――が、その感覚は唐突に消失する。

零斗は膝をつき、体を屈め、彼女と同じ目線となる。

二人は数秒見つめあう。

「帰る、ぞ」

零斗はたった一言、それだけを告げる。

その言葉にノエルは長い沈黙の後、

「――はい！」

そう、答えると同時に世界が元へと戻った。

ガラガラと、音を立てて世界へと溶けていく物質があった。『材料』がなくなった影響で存在することも出来なくなり、張月の真上で『物』の腕は掻き消える。

「村雨！」

一番初めに声を発したのは平真。その場にいた他の皆は何も声がでなかったのだろう。

急に特殊術式は解除され、ノエルと零斗が『二人』で現れたのだ。「ふざけるなよおおお！ 何で生きてやがる！ 聖書で殺せなかったってのか！」

その男、ラグイアの驚愕と不可解が入り混じった叫びを聞き、零斗は冷静に答える。

「ああ、だからいる」

「おおい！ ノエル『あっち』はどおしたあ！」

次に発せられたフィラスの言葉に、ノエルも答える。

「『あっち』は『彼に恐怖し内へと逃げた』。だから――」

だから、その次の言葉を発するためにノエルは決意する。

「だから、私はもうあなた達の人形じゃない！ ……世話をしてくれたのは礼を言うけど。これ以上はもう、ついていけない！」

それは確信を持ったフィラスからの、ギルドからの離反宣告。

「おい、フィラス一度引くぞ！」

以外にも状況を冷静に判断したラグイアはフィラスに言う。

状況からしても勝てる状況ではなくなっている。けれど、フィラスはラグイアを睨み返す。諦められない、という気持ちが前面に出ている。

「分かれ！ 今の状況を！」

ラグイアは叫ぶ。フィラスに今の状況を再確認させるように。

零斗、平真、鏡、そして聖書を持ったノエル。それに対してラグイアと右腕の使えないフィラス。

「つち、くしょおおおおおがああああ！」

そのフィラスの叫び声を最後に――二人は消えた。初めから仕込んでいたのか転送術式を使用する。

決着がついた瞬間だった。

五人（張月は気絶している）は集まっていた。

「張月は私が持っていますよ。……して、貴女がノエルさんですか」

「は、はい。ノエル・カーリスエッジといいます。今回はご迷惑を

おかけしました」

急に話を振られノエルは驚きつつも、頭を下げながら自己紹介をする。

「澄崎鏡です。私は目的を達成できたのでかまいませんよ」

鏡の目的は張月を守ること、初めからそれだけなのだ。

「はふう……」

と、そこで平真がかなり気の抜けた声とともに地面へとへたり込んでしまう。

「平真、大丈夫か」

「はは、ごめん。ちよつと疲れちゃった、座らせて……って、あ」

平真はそこで一度止まり、次にはノエルを見た。

正確にはその手に持っている物を。

「聖書……どうしようか？」

未だにノエルの手には聖書が握られている。

それは暗号術式が傷つき、聖書を扱える者であれば扱える今までに無いものだ。

珍しい、というレベルではないそのさらに上に行く。

「現状、どうしようもありませんね。使用できるものが持ち、守るのが賢明かと」

鏡は言う。確かにそれは正論だ。聖書は使えない人が持ったところで毒にしかない。

「そう、だな」

「んでさ、もう一ついい？ さっきから気になってたんだけど。『あっち』とか『内に逃げた』とかどういうこと？ さっぱり状況がわからないんだけど」

その問いにノエルは一度思索する様子を見せるが、すぐに平真の方を向く。

「あ、あの。私は二重人格といいますか。そういう『もう一つ的人格』を作らています。聖書を上手く扱え、かつ好戦的な人格を」

でも、それはノエルの言ったとおり『零斗に恐怖し内へと逃げた』

。

つまり、

「この人がいてくれる限り、確実に『あっち』の人格は出てくることはありません」

「そういうことがあるものなのですね……」

鏡は少し感嘆し、言う。流石の鏡の初めての経験だったようだ。

零斗はちなみに黙っている。というよりも、こういった状況では基本的に話すのが苦手なのだ。

「んじゃあさ」

そこで何か考えていたらしい平真が言う。零斗は少し嫌な予感を感じていた。これは単なる直感だ。

「零斗とノエルちゃんさ——」

けど、その直感は当たっていたと言えるかもしれないし、言えないかもしれない。

「一緒に住めばいいんじゃない？」

「は？」 「え？」

流石にそこでは零斗も声を出す。無駄にシンクロを見せた二人は平真の顔を見る。

「だってそうじゃない？ ノエルちゃんは『村雨が近くにいるから大丈夫』なのであって『いつでも大丈夫』ってわけじゃないんだよね」

「い、いえですが、ですが。あのそれって……えと……」

「それにさ、ノエルちゃん。これから行く所って、あるの？」

「……それは、皆目検討もつかないぐらいありませんけど」

「私の家はダメだし、桐野くんはそもそもダメだし。泉涼は……多分いいだろうけど、巻き込めないし」

え、と……、としどろもどろしながら零斗の顔を見る。その零斗はというと。

いや、俺を見られてもな。と困っていた。ひたすらに。

「ふむ、ですがそれが一番安全。というのはそうでしょうね」

そこで鏡から説得力のある。とどめの一撃が届く。
ノエルの処遇が決定した瞬間だった。

同日。午後一二時頃。

零斗は目を覚ます。硬い床で寝ていたせいでやや腰に肩が痛い。
何故床で寝ていたといえば理由は至極単純だ。

「すう……」

——……はあ。

零斗の部屋に唯一あるベッドでノエルが寝ているからである。

もはや何一〇回目かわからない溜息をつきながら零斗は着替え、
外へと出る。

「——で、何で平真はあそこにいたんだ」

開口一番。目的地、例の人のいない公園に零斗と平真、二人はい
た。内容は昨日のことだ。

「あのさ、聖書についても教えてくれたの鏡ちゃんなんだ。それで
「自分で話します」って言うから私はあれ以上は言えなかったんだ
けど、ごめんね。昨日は合流だけするつもりだったんだ。けど、桐
野くんがあんなことになって、鏡ちゃんも心配だったし、傲慢な考
えなんだけどね。私はみんなを助けたかったし、守りたかったの」
「そう、か」

ただ心配だった。平真が言うにはそういうことらしい。

そして、これ以上は聞くこともなく、すぐに二人は別れ、零斗は
家へと戻る。

家の戸を開くとノエルがベッドに腰掛けていた。戸を開く音で気
づいたのであろう、視線を零斗の方へ向ける。そして、こう言う。

「おかえりなさい」

ノエルは自然とその言葉を発する。

けれど、今度は急に顔を赤くして俯いてしまう。おそらく反射的にそう言ってしまったのだろう。

今までどこかで生活していた時の癖だろうか。

「……………ただいま」

零斗も若干目線を外し、表情は変わらぬまま言う。一一年ぶりにその言葉を使う。

「……………そうだ、ノエル。まだ返してないものがあつたな」

「あ……………」

その零斗の言葉と同時に零斗は一冊の魔道書をノエルへと渡す。それを受け取ったノエルは大事に抱きしめる。そしてゆっくりと目を開き、下を向いたまま言い始める。

「これ、私の師匠といえますか。生まれて、捨てられてからクロイクス・ラメイション十字架に拾われるまで世話をしてくれた人の――形見なんです」

ノエルは抱きしめたまま言う。『形見』というからにはすでにその人はこの世にいないのだろう。

「それで、あの、その……………」

何か言葉に窮しているノエルを見つつ、零斗は今更ながらに気づく。

「俺は、村雨零斗という」

自己紹介をまだしていないのだ。

「改めましてノエル・カーリスエッジです。よろしくお願いします、村雨零斗さん」

1月22日 第三章・終（後書き）

もしもここまで読んでくださった人がいるならば歓喜にのた打ち回ります。

どうもおはこんばんにちはららと申します。

3章 聖書と魔術師 無事（？）終わりました。今まで書いてきました魔術師シリーズ。これで一応ひと段落のつもりです。

メインメンバーは大体これで決まりだと思ってます（つまり未定）。

次回を書くとしたら零斗とノエルがメインにしようと思ってます。一番最初から名前は出ていながら、2章でも間章でしか出てこなかった3章にいたっては登場すらしてない魔道書回収集団、その第三階。その辺を出していく感じで書いてみようと思います。

よろしくお願いします。

1月23日（前書き）

稚拙な文でございますが、よろしくお願いいたします。

1月23日

2023年1月23日（月）

「お、おかえりなさい」

放課後、村雨零斗は当然のように何もすることもなく家へと到着。
次に戸を開けたら女性の声がした。

声の主はノエル・カーリスエッジという髪の長さが腰ぐらいまであり、赤みがかかっている茶色。背丈は一六〇程の女性だ。

この二人はある理由から同居（ノエルが居候）しているのだ。理由の一部に零斗もノエルも同じ者だということがある。

それは、魔術師。

現代に生きる魔術を使う者。この事実是一般の人には秘密なのだが、零斗の知り合いである魔術師ともう一人は知っている。

二人は家族でも親戚でもない。本日は同居しだして三日目となる。

「……ただいま」

零斗はたっぷり一〇秒程ためてから言う。

——……慣れないな。

昔、零斗が排他的になってから一年ずっと一人で過ごしていた零斗にとってこの現状はあまりにも不可解だ。今年に入ってからやけに周りが騒がしい。

ノエル・カーリスエッジは前所属していた『ギルド』から追われている身である。

ギルドとは魔術師が集まった集団のことを指し示す。

『魔道書回収手段』——日本では通称『図書館』と呼ばれる組織から身を守るために結成された集団の総称のことである。

現在のところ、ギルドからの追手は来ていないが、今の安全をそのまま享受するのは多大な危険性を孕む事だ。

何時何処で崩壊するか分からない安全。それほどに安心できない物はない。

その最中、結局のところノエルは零斗の家にいる。――三人の考えでやはりそれが一番安全だと考えたからだ。

しかし、リスクが多いということは変わらない。

「……」

零斗は基本的に無口、無表情だ。自ら話を切り出そうともしないし、する気もない。

「あの……」

と、ノエルが何かを口にしようとした時。ピリリリリリ。と軽快に零斗の電話が鳴る。

『やっほー！ 今って暇ー？』

何だか前にも同じようなことを聞いたような気がした。

「ああ、別に何も無い」

『そう？ じゃあ、今から村雨の家行ってオーケー？』

急な提案ではあったものの、拒む理由も必要も今の零斗には存在しない。

「構わないぞ」

なので、零斗は肯定の言葉を電話の主平真華里へと告げる。たいらまかり

平真華里は零斗やノエルと同じく魔術師の一人。零斗が通っている高校の生徒会長でもある。

『よっし！ じゃあ行くね〜』

そしてブツツ、という音ともに電話は切れる。

――しかし、何故来る？

前回のようになにかしらの『情報』があるわけではないだろう。――零斗が考えたところでわからないのだが。

「そういえばノエル。さっき何か言いかけてなかったか？」

「え？ ああいえ、何でも無いです。今の電話は平真さんですか？」
「ん？ ああ、そうだ。よくわかったな」

「受話器から声が漏れていたものでそれで。……仲が本当にいいのですね」

今の零斗と平真の状況を仲が良いと言うのならそうなのだろう。

零斗は人間関係に疎い。

一一年前の零斗が父を殺してしまったあの時から、周りとの関係を絶ってきたから。

去年までの零斗は人間関係に排他的で、一人でいたくて、周りとは話さない。

そのような人だったはず、だ。だから零斗はこう答える。

「……さあな。いつも平真が話しかけてくるだけだからな。それに会ってまだ二週間ぐらいだ」

「それでも、私より長いですよ。………なあ」

「どうかしたか」

最後の部分がよく聞こえなかったので零斗が聞くとノエルは顔を上げ、笑顔で言う。

「いいえ、何でも無いですよ」

その数分後、ピンポン。とインターフォンが鳴る。零斗がドアを開ける。

「おじゃまんさー！」

いつにも増して奇奇怪怪な掛け声で平真が入ってきた、もはや意味がわからない。

この元気を常に垂れ流して撒き散らしているような女性が平真華里だ。

「えと、あの……」

その平真の後ろでドアの端で少しだけ身を乗り出している女性がいた。

「黄希島さん、どうかしたか？」

彼女は黄希島泉涼^{ききしまみず}。平真の親友である。

髪は肩ほどもで伸びており、今は身を縮こませ、腰が引けているように見える。

零斗や平真を魔術師と知っているが、黄希島自身は一般人であり、魔力は持っていない。

けれど、一つ特異なところがある。それは『一般人だが、魔力を感じれる』というところだ。

が、魔力を感じることができると言っても、一概に——どころか全く——得となることは先ずないだろう。

「い、いえ！ どうにもしていません！」

今日は平真と二人で来た。というより、平真に連れてこられたのだろうか。

黄希島はいつも丁寧な言葉遣いを崩すことはない。

「そうか」

いつもより気合の入った返事とともに黄希島は零斗の家へとあがつていく。しかし、次はすぐに目を丸くし硬直した。

「こんにちは平真さん。……それと、貴女は？」

ノエルはそう挨拶をするが、黄希島はノエルを見てから固まる。動かない。

「……………」

数秒経つても何故か黄希島に反応は無い。目と口を開き、硬直している。

——あ、そういえばノエルのこと知らなかったか。黄希島さん。

「あつははは、ノエルちゃんごめんね。この子は黄希島泉涼、っていうの、私の親友！」

平真が空気を察したのか、黄希島の紹介を始める。

そんな三人のやり取りを見ながら零斗は思う。

——…流石に四人が部屋に入るといっぱいいっぱいなんだが。
零斗の部屋はワンルームのアパートだ。

頑張って三人が軽く過ごせる限度であり、四人にもなると窮屈感が押し寄せてくる。

「……はあ」

そうしている間にも、三人の話は続いており。今は黄希島にノエルのことを説明している。

「あの……黄希島……さん。大丈夫ですか？」

「は、はい！ 大丈夫ですますよ！」

「泉涼、そんな緊張しなくても大丈夫だよ？」

三人の話は続いている。それをよそに零斗は座っていた。

同日 フランス

魔道書回収集団は表面上はいわいる教会だ。

そして、本部が建っている場合は『魔術特区』——魔術特区は魔力濃度が高い地域一〇〇個のことを示す。

魔道書回収集団は上層部が『第三階』『第二階』『第一階』と分けられており、そのうち『第三階』が協会の運営を任されている。その第三階は『東』『西』『北』『南』と四人で構成されている。

お互いがお互いの名前は誰も知らない。

否、知っている者が一人だけいる。それは魔道書回収集団の頂点に立つ者。魔道書回収集団第一階であり、創始者である者。

その創始者は人間にも、同士である魔術師にも正体を知らず、姿も名前も声すらも聞いた者はいないという。

深夜、魔道書回収集団本部から約三キロ地点。

そこには一人の男を数十人の魔術師が囲んでいた。その魔術師の全員が魔具、術式を展開するための道具を持っている。

種類も魔道書、杖、メイス、魔術刀と様々だ。

「んだ？　こんな時間に起こすんじゃないよ。……何か用かよ」

その男――『東』は十数人の武装した集団に対し、丸腰。

数十人に武器を持ちつつ囲まれながらも、何一つ怖気付いていない。むしろ、その表情には悦楽が見え隠れしている。

「うるせえよ」

集団の先頭にいる男が声を出す。恐らく、この集団のリーダー格なのだろう。

「っへ、そうかよ。じゃ、さっさと始めちまうか」

しかし、そのようなことは『東』には何ら関係もない。ただ、目の前にいる者達は敵。それだけで十分だった。

「皆、構えろ！」

その言葉を皮切りに両者は構えを取る。そして『東』が腰を屈めたかと思うと、次の瞬間にはリーダー格と思しき男の前に君臨する。

「うーッ！？」

『東』の拳が男の腕を薙ぎ払う。

男は声をあげきる前に宙を舞い、落下。そして静寂。

「い、今の見えたか？」 「いや……全く」 「こんな、こんなのもって

……」 「化け物め……」

集団へ動揺が一瞬にして拡散。集団心理。不安が一人一人に感染し、全員が不安になり集団が自然崩壊しかねない状態へとなる。

動揺を収めるためにも、飛ばされた男は右腕が完全に折れていることを理解しながらも立ち上がり、一喝。

「落ち着け！　敵は一人だ！　囲め！」

その声に集団は落ち着きを少しだけ取り戻す。集団の配置は『東』を取り囲むように布陣。

「っは！　ちったあ楽しめそうじゃねえか、来いよ！」

「かれ！」

「あの馬鹿野郎どもが！」

同刻、一人の男は戦場へと駆ける。男——さねぎしがろう実岸我狼はギルド守護ウォリアのリーダーである。

現在彼は非常に焦っている。

ギルドの仲間が勝手に……否、実岸のせいで動き出してしまったのだ。

しかも目的地は魔道書回収集団の本部。ただ行っても殺されるのが落ちである。

——……間に合ってくれえ！

——集団の攻勢から約三分後。その場は静寂に包まれていた。その中心に、一人の男だけが立っていた。

その男の名前は『東』。

「ばけ、もの、め……」

リーダー格と思しき男は地面と密着。右手はもう動かない。折れた事に加え、さらに殴られた影響で完全に骨が砕けていた。

激痛に耐えながらも男は『東』を敵として見る。

まだ、その目は諦めてはいない。

けれど、『東』は退屈していた。

「はああ、こんなもんか。こんなもんならあーしときゃよかったぜ。

……お前ら、もうくんじゃねーぞ！ 面倒くせえ」

この有象無象の雑魚相手に本気を出す必要性を感じない『東』は集団を一人も殺さずに立ち去ろうとする。

これは、教育と言っていていいかもしれない。

圧倒的な力量差を見せ、敵の戦意を喪失させる。これは第一階の指示でもあった。

「ほう、意外と甘いんだな図書館さんよ」

集団とは違う声が場に割り込む。声の主は闇の中から現れた。

右手に剣を持ち、腰にはポーチ。身長は一八〇センチほどで、右目には眼帯。その眼帯は白いガーゼのようなものではなく、恐らく鉄製。そこから推測されることは、彼が隻眼かもしれないということだ。

「ああ？ テメエ何者だ」なにもん

「リーダー……すいません、俺達の力不足で……」

「それ以上しゃべんなっての、お前らはよくやった」
そのまま『東』の前に向かい、剣を構える。

「どうも初めまして、仲間が世話になったようで」

「誰だテメエは」

ふっ、と男が一度息を吐く。

「俺はギルド守護固持ウォリアーズヘントのリーダー実岸我狼。覚えててもらえたら光栄……だねえ！」

自己紹介と共に、間髪いれず実岸は横薙ぎに刀を振るういながら前へと直進。

「へっ、直線か。そういうの嫌いじゃないぜ」

一見、自殺行為ともとられかねない行動が、『東』は嫌いではない。
い。

『東』はその自らの拳こぶしを以って刃へと立ち向かう。

ガキンツ、と重い金属音。拳と刃で金属音が鳴った。それがどれだけ不可思議な事実か理解する。

「……わからないねえ、本当にお前達は理解できない」

実岸は一度離れ距離をとる。

「一体、何を使っているのかねえ？」

瞬間、実岸は地面へと刀で地面へ刃を走らせる。描き出している

のは術式。――術式とは魔術師が魔術を行使するために必要な陣のこと。

実岸が術式を描く間、『東』はただ構え、待つ。まるで実岸の出方を楽しんでいるかのよう。

「待っててくれるのは嬉しいが……後悔しても遅いからな」

術式を描き終わり、その中心にポーチから取り出した紙を突き刺し、詠唱。

同時に『東』も動き出す。瞬間、実岸の眼前へと出現した『東』は拳を振り上げる。

「剛毅！」

実岸が唱え終わると同時に『東』の拳が実岸の首へと迫る。当たれば首の骨が折れ、即死――のはずだった。

ガギン、という鈍い音。それは骨が折れた音でも、ましてや頭が吹っ飛んだ音でもない。

「ふいゝ、危ないねえ。ちょっと遅れてたら首飛んでたなこりゃ」

『東』の右腕を止めたのは紛れも無く実岸の腕だ。

人間の腕で、正体不明の力を受け止める。

受け流すでもなく、打ち消すでもなく、真正面から受け止める。

大の男を大きく吹き飛ばすぐらいの力を持つそれを、実岸は無傷で受け止めたのだ。

「……ああ？」

『東』は不可解な表情をする。同時に、一瞬の隙が生じた。

「ふっ！」

その時を見計らったかのように実岸は刃を『東』の顔の下から振るう。

再び鈍い金属音。

「な……ん……」

驚愕の声、声にならない声をあげる。声の主は斬られた『東』ではなく、実岸のもの。

「あー、くそ。よくもやりやがったな」

対し、『東』は何の変哲もなくそこに立つ。
実岸の刃は『東』の顔面へと入り、右側を切り裂いたはずだった。
手加減もしていない、けれど、そこにあったのは――

「ぜってえ殺すぞサネギシイイイイ！」

「……まずいねえ、こりゃ」

身体強化の術式である実岸特有の魔術『剛毅』^{ゴウイ}には時間制限が存在する。

何一つとして攻撃が通らなくなる代わりに魔力の消耗も激しい。
魔力の消耗が激しいこの魔術は、一分ほどで解除しなければ自分自身が動くことが出来なくなるのだ。

――どうするかねえ……。

と考えた時に、実岸の周りから光が発せられる。それは巨大な術式。巨大な魔力が練りこまれているのを感じる。

――術式……？ この術式は……！

術式の正体に気づいた実岸は叫ぶ。さらに、展開しているのが何者かも。

「お前等！ やめろ！」

術式を展開しているのは周囲に飛ばされたギルドの仲間達。全員が周囲へと散開し、一つの巨大な術式を描き出す。

光は拡散。実岸の周りを囲んでゆく。そして、細い光が入り、地面へと細かな術式が刻まれてゆく。

「ここで死んで良い人じゃないんだよ、リーダーは！」

「やめ――」

その光が実岸と『東』を包み、空へ光が突き抜ける。
その光が消え、その場に残るのは静寂。

場に残されたのは『東』唯一人。実岸は跡形もなく消えていた。

「……空間転移かテメエ等!!」

その場に残された『東』は激昂する。戦いを楽しんでいたところだというのに邪魔をされたことに激怒している。

その『東』が見るのは地面へと這い蹲っている男。

その顔は嫌味ったらしく笑っていた。

「つへ、どうよ……」

そう、周囲に飛ばされたギルドのメンバー全員で一つの巨大な術式を作り出し、実岸を転送^{とば}した。

彼らは実岸が勝つという可能性を否定して、逃がすことを選んだ。その行為がどれだけ実岸のプライドに傷をつけるか理解していようと、実岸に死なれることだけは絶対に許されない。

その気持ちが強かった。

だからギルドのメンバーは全員助ける事を選ぶ。

「お前みたいなやつに殺されている玉じゃねえんだよ。リーダーは」
傷つきながら、腕の一本が粉碎している男は言う。

そして立ち上がる。

「皆、立てるか？」

「ああ……」「なんとか、な」「大丈夫、ではないけどね」「ふん……」

皆が皆立ち上がる。

もはや実力の差は絶対だ。どれだけ束になろうと勝てることは無いのかもしれない——いや、無いだろう。

けれど、それでも、全員の思っていることは一つだけだ。

いつも実岸が言っていた言葉。

『生きて帰って来い。危なくなったら俺を呼べ、絶対にお前らを死なせたりしねえ』

そして、全員が受けた恩。

「行くぞ」

そして今一度始まる――絶望に満ちた戦いが。

「が……ッ！」

実岸は背中からどこか芝生へ落ちる。背中を突き抜ける衝撃で息が一瞬止まった。

そのまま転がった実岸は空を仰ぐ。

「ここ……は」

ゆっくりと体を起こす。同時に何故ここに居るのかも思い出す。

――そうだ、あいつらは！

同時に、何をされてここに居るのかも思い出す。

「……そう、か。そうだったな。……まったく、生意気なやつらだねえ……」

実岸はどこかの河原に座りながら自然と目から何か熱いものがこみ上げてくる。

「全部、俺のせいだ……」

全ては実岸の一言。たった一言だった。

別に命令でもなんでもなかった一言。

『図書館なんてさっさと無くなっちまえばいいのにねえ』

誰が聞いていたかわからない。けれどそれはリーダーでありながら誰かが聞いているという可能性を考慮していなかったのは実岸のミスだ。

ギルドの仲間がたかがそれだけで動くことも知っていたのに。

――ちくしょうが……。

「其れ程、大事、か」

「当たり前――ッ!？」

急に後ろから聞こえたその声に実岸は声の方を向く。

そこには、見た目一三歳程の銀髪であり、長さは肩ほどまである

少女が実岸のすぐ横に立っていた。

『……………』

両者は黙り、視線が絡まる。

——…この感じは。

実岸はその少女に何か知っている感覚を感じていた。その少女が『何』なのか。

だが、それは実岸の知っている『それ』とあまりにもかけ離れている。

話しかける、などありえない。

少女は音も無くその場から姿を消す。

——どうして、こんなすぐに会ってしまうかねえ。

「人形さんよ」

実岸はその正体を口にし、立ち上がる。もう、目からは何も出てはいない。

「……さて、ここは何処なのかねえ？」

太陽は真上を向いている。先ほどまでは深夜だったはずだ。ということはかなり遠くまで飛ばされたのだろう。

実岸は魔具を持っていない、自ら術式を描き、ポーチの中に所持している紙を触媒として魔術を使う。

だから、図書館の人形から狙われることはない。

実岸は歩き出す。仲間を助けるためには先ず、ここの情報を集めなければならない。

「ここは……日本か」

実岸は河原から歩いてきて人が多くなるとその国の名前を言い当てる。

それもそのはず周りの人が全員日本語を話しているから、なのだ

が。

——しかしまあ……こんな形で帰ってきちまうとはねえ。

実岸は名前からでもわかるとおり日本人であり、生まれも育ちも日本だ。

六年前から海外へ渡っていたので、以来一度も帰ってきたことはなかった。……帰ってくるころがなかったのだ。

実岸の両親は離婚しており、母親に引き取られていたが、その母親も心労か、それとも別の理由があったのか今となっては分からないが、実岸の前からいなくなった。

搜索願い虚しく、今ではもう探されてすらいないかもしれない。その最中、実岸は旅に出た。自分でお金を稼ぎ、世界を旅していた。その時の実岸はまだ自分が魔術師と言うことを知らなかった。今思えば故意に親は教えていなかったのかもしれない。

魔術師が魔術を使うところをみられるとその土地では生きられないかもしれないのだから。

そして、実岸はその旅の中で出会ったのだ。

魔術師である孤児達に。

魔術を人に見られ生きる場所を失ってしまった子供達を。

実岸はその子供達を助けた。

何故迫害されてしまっているのか理由を聞くことはしなかった。

ただ、ただ単に、実岸は——見てみぬふりを出来なかったただけなのだから。

後々、その子供達に「一緒に行かせてくれませんか？」と言われた。

嬉しかった。

その時はただ、そう思っていた。実岸が魔術師と気づいたのはその後の話になる。

——ちくしょう……。

そこまで思い出したところで現実^{いま}を思い出す。歯が痛くなるほど
食いしばり、拳も爪が食い込みそうなほど握る。
何処へにも発散しようのない思いが募る。
思いを胸に、歩き続ける。
当てる無い線路を。

1月24日

1月24日（火）

零斗はやや学校で噂になっている節がある。特に不思議なのが「平真との接点」である。

平真は誰にでも話しかけるし、誰にでも挨拶をするが、周りから見ても仲がいいと見える零斗は生徒達から見ても全くの予想外。

この二週間で零斗は変わったのかというところだろう。零斗はただ一一年前の事柄で人との関係を絶ち、現在の性格になっってしまった。

元々の性格と言うのはもはや誰にもわからない。

「村雨おっはー！」

やや古くなったであろう挨拶をしながら平真は零斗に挨拶をする。

「……おはよう」

零斗が遅れ気味にそう言うと、平真は満足した顔をし、うんうんと頷きながら去っていく。

——……本当に、何だってんだ……。

その疑問はこの前の問題などではない。ただ、平真が自分に挨拶をすることを未だに理解できないでいた。

結局のところ結論は得られることも無く、机に突っ伏そうとした時。

「な、なあ村雨」

聞き覚えのない声がした。零斗はその声のほうを向くと見知らぬ男子が少し顔を引きつらせながら立っていた。

「……何か用か」

「お、お前ってさ、会長とはどういう関係な訳？」

この時、零斗は心底『どうでもいい』と心で思っていた。

「俺が、何故お前にそんなことを言う必要がある」

当然だ。何故わざわざこの一度も話したことが無い男へ平真との関係を話す必要があるか。

魔術師だということを話せばいいのか。ふざけている。

「え？ いや、その……」

男が言葉に窮しているところに零斗は追い討ちをかける。

「それだけか」

「あ……ああ、邪魔した」

男はそそくさとその場を去っていく。

——……何をしたかったんだ？

そして今度こそ零斗は机へ突っ伏した。

何事もなく学校は終わり、家へ帰り、ドアを開く。

「……………は？」

かなり長い時間を要しながらも零斗は中を見て、反応する。

「れ、零斗さんっ！」

ノエルが困った様子で迫り、見上げてくる。それもそのはず、零斗の見覚えのない人物が部屋の中にいたからである。

その男は手をひらひらと振りながら、

「おお、家主さんかい？ ちょっとここの前で倒れていたところをその娘に助けてもらってねえ。いや、ほんと助かった。……つと、

俺は実岸我狼って名前だ、よろしく」

「……村雨零斗」

一応警戒しつつも自己紹介を済ませると、実岸の顔が一瞬驚いたような表情をする。

「……へえ、あんたがそうなのか。噂は少し聞いている」

「噂……？」

「ああ、確か『特殊術式を単独で破った』とか聞いたような気がする

るねえ」

場所は移り、フランス。

魔道書回収集団第三階の『北』はソファに座り、天井を見上げていた。

「まったく、『東』の独断専行には相変わらず困られますね」
あきれたように言う。が、『北』としては独り言のつもりだったのだが、予想外にもう一人、そこにはいた。

「ええ、本当にそうでございますよね。あの性格はもうどうしようもないかもしれません」

「おや？ 『南』いたのですか？」

その声の主は『南』。魔道書回収集団第三階の一人である。

長い黒髪のストレートが特徴の清楚な雰囲気を漂わせる女性だ。ただ、顔付きは外国の人のそれであるため、ややアンバランスである感否めない。

「ええ、大体『東』さんのく、と言っていたところからでしょうか」
「……まったく、貴女という人は。その性格も直した方がいいのではないですか？」

「あら？ 何のことでしょうか？」

「……いや、もういいですよ……はあ」

「それで、『東』さんはどこへ向かったのですか？」

「『魔術特区』茜々崎市ですよ。「あれ」のお気に入り」

「ああ、『彼』のいたあそこですか。最近なにやら色々動きがあるようですね」

「『王室の残党』に『ギルド』。そしてここ。この短期間で『彼』を中心として色々変わりましたから」

「……そうなのですか、やはり『北』さんは物知りですね」

「そんなことは無いですよ。ただ情報を集めて知識として使ってい

るだけですから。……さて、『東』は無事に帰ってこれるのでしょうかね」

「あら？ それはどういうことかしら？」

『東』は実戦担当。が、他のことがまるで出来ないのだ。けれど、そんな『東』が第三階にいるのは『第一階』——つまりは魔道書回収集団のリーダーである者が推薦したのだ。

「いえ、なんとなくですよ、なんとなく、ね。万が一計画に支障をきたすことがあれば問答無用で消しますが」

「あらあら物騒な。そんなに急がずともいいではないですか」

『南』は天使のようにも悪魔のようにも取れる笑顔を『北』へ向ける。

それに臆することも無く、『北』は答える。

「ええ、そうですね」

「噂……？ お前、何者だ」

零斗はさらに警戒を強め。質問をする。特殊術式という言葉を知っているということは実岸は魔術師であることで間違いは無いだろう。

噂の内容も気になったが、今はそんなことはどうだって良かった。ただ、近くに、ノエルの近くに魔術師がいる。それが問題なのだ。今ノエルはあくまで追われている身。ギルドから離反し、『聖書』を所持し、如いては扱える。

そのような人物を放って置く者がいないとは考えられないのだ。

——特に、ノエルが所属していたギルドなど。

「そんな怖い顔をしないでくれ、俺は危害を加えるつもりは無い。むしろそのお嬢ちゃんに感謝してるんだよねえ。……改めて、俺はギルド守護固持のリーダー」
ウォリアーズハント

——また、か。

この間ノエルがそうだったように、実岸もまたギルドの者。さらにはリーダーときたものだ。

「何が目的だ」

「……さあ、わからないねえ」

実岸の声は急にトーンが落ち、上を向いたまま言う。

「——なんで、ここなのかわからないんだ」

「……あの、実岸、さん。何があったのですか？」

雰囲気から察したのか、ノエルは実岸にそう聞いた。

「まあ、昨日のことだ——」

そこから話を聞いた。ここに来る前にギルドと図書館で争ったことを。『東』の手によって壊滅的状态に追い込まれていたことを。

そして、ギルドの仲間によってここに飛ばされたことを。

「……そんな、ことが。じゃあ、もしかして実岸さんの仲間は……」

そのノエルの言葉とともに沈黙が訪れる。けど、その沈黙を破ったのは実岸だ。

「ああ、もう。全員……この世にはいないかもねえ」

その言葉が零斗は嫌いだった。

ダン！ と机を叩く音がする。その音の主は零斗だ。

「れ、零斗さん……？」

「悪い……事情はわかった。それで、一つだけ聞きたいことがある」
ある意味、零斗が聞きたかったことはそれだ。「ああ」と軽く実岸は答える。その言葉を聞くや否や零斗は質問する。

「お前の見た『人形』。それはどんな姿をしていた」

「……ん？ 人形か。確か、少女の見た目で銀髪。これ以上はすまないがわからないねえ」

「……あいつだ……」

「そう、か」

あの1月14日に助けてくれた図書館の魔術師だと零斗は確信する。

——けれど、何故そんなところに……。

河原に転送されてきたということはそこに魔力の歪みがあったはずだ。それを察知して行ったのだろうか。

その前に先ず、茜々崎市に図書館の魔術師がいることも疑わしいのだが。

「そんじゃ、俺はそろそろお暇いしましますかねえ」

すつ、と実岸は立ち上がり。外へと向かっていく。

「どこに、行くのですか」

ノエルはそう実岸に声をかけると、実岸は軽く答える。

「いんや、無いかな。けど、これ以上ここにいたら迷惑になるからねえ。じゃあな、世話になった」

答えると、あまりにもあっさりとドアを開き、

「お幸せにな」

そう言い残して外へと出て行き、ドアが閉まる。

「……はあ」

零斗はいつものように溜息をつく。何も言葉を発するつもりにはなれない。

——しかし……。

何故にこうも立て続けにこういう者達に会うのだろうか。

ふと、ノエルに視線を移すと、

「……………」

と、無言のまま立っている。それだけならばまだいいのだが、どうにも雰囲気が違う。

まるで何かを悟ったかのような、感じたかのような、そんな雰囲気を醸し出している。

そのままノエルは少しだけ口を動かし何かを言っている。

「……に、……て。いや……わ……そ……じゃ」

「……どうした、ノエル」

断片的にしか聞こえない言葉を聞き、自然と零斗はノエルの肩に手をポン、と置く。

「ひゃ!？」

と、大きな声を上げて飛び上がる。そのままの勢いでしゃがんでしまい、そのまま座り込む。

その状態のままノエルは零斗を見上げる形になり、

「……あ、れ、零斗、さん」

と、呂律が上手く回っていない。よほど何か考え事でもしていたのか、完全に呆けている状態だ。

「あ、あはは。すいません、何でもありませんので——」

ノエルは取り繕うように言いながら立ち上がろうとする、が。その途中で動作は止まり、ある一点を見つめる。

「あ……」

彼女の視線の先には眼鏡をかけた零斗の姿がある。じっと見つめ、まるで蛇に睨まれた蛙ように動かない。けれど、それは萎縮ではない。

「何か、あるのか」

疑問系になっていないが、零斗の言葉は確実に訊いていた。

『何か思うことがあるのか?』と。

「あ……の……」

ゆつくりと、ノエルの口が開かれる。それを零斗はじっと待つ。

「あの人……実岸さんは——」

零斗は強制しているわけではない。ただ、そういった様子を見せるノエルが気になったのだ。

「死ぬつもりではないのでしょうか」

そして、ノエルの言葉の核が吐き出される。

実岸は思う。

——魔術師にも、やっぱ色んな人がいるもんだ……。

彼が助けた人達のように迫害された魔術師。

図書館のような目的不明の魔術師。

そして、先ほどのような魔術師。

ギルドを組み、一つの集団として過ごす魔術師達。

実岸は歩く。初めの場所へ。あの河原へ。

——そろそろ、かねえ。

それはただの直感だった。ただ、そう思っただけ。しかしこういう時の直感というのは、何故か当たるものなのだ。

「よおー……サネギシ」

実岸の周りが世界から断絶される。魔術師という魔力を感じれる存在意外気づけない場所。そこに二人の魔術師は立っている。

「まったく、お早いお着きだねえ。もう少しぐらい、ゆっくりしててもいいんだぞ？」

「るせえ。殺す」

実岸の軽口を一言で実岸の眼前に立つ男——魔道書回収集団第三階の『東』は拳を構え。実岸へとじわじわ迫っていく。

「やれやれ、せっかちなのはモテないぜ？」

実岸は素早く刀を右手に出現させ、土の地面へと何かを描いている。

「この顔の礼はゼツテエさせてもらうぜ、サネギシイイ！！」

『東』は今回は前回の戦いのように待つようなことはせず、ただ純粹に実岸に向かって敵意を向ける。

そして、『東』はその拳を、実岸は剣を以^もって——

ガキイ！！ という激しい金属音とともに、戦いは始まった。

守るべきものを無くしたものと、戦いを楽しむものの戦いが。

一合、二合、三合。と刃と拳を次々に重ねてゆく。実岸の剣は宝刀、妖刀の類ではなくただの剣だ。例えばフランベルジュ、村正、天叢雲剣、バルムンク、そのような魔力を含んだ魔具でもない。

もしかしたら、先の刀であれば『東』と対等に渡り合うことが出来たのかもしれない。

魔具の能力が直に魔術師の力へとされる場合もあるのだ。

「っち……」

実岸は絶対的に押され気味になる。

一瞬の隙を突き、先に地面へ描いておいた術式へ紙を一枚落として真上から中心へ刀を突き刺す。

『東』のスピード、パワーは圧倒的だ。生身で拳を一度でも受ければ骨が折れるだろう。下手をすれば即死かもしれない。

一撃がそのまま死へとつながる。

この状況で術式を一から描く。実岸が一つの術式を描くのにかかる時間は三秒ほどだ。最近では魔具という物があり、即席で術式を展開させることが出来る。けれど、実岸の魔術というのは通常とは少し違う。自分専用の術式を作り出し、描かなければならないのだ。――こいつが……仲間をやってくれたこいつが……憎い……。

「『戦車』！」

実岸の魔術はタロットの『大アルカナ』に呼応している。大アルカナ『戦車』の意味は『復讐』。

復讐心を増幅させ、身体能力の上昇効果を得る。

一時的なものであるが、『剛毅』よりは消費する魔力は少なく。持続時間は長くなる。

それでも、五分程度ではある。

実岸の魔術を以って無理やり身体能力の上昇させ、戦っていく。だが、

「っぐ……」

押されるのは絶対。それはただの命の延長戦でしかない。

「ツハツハハ！！ どうしたオイ！！」

『東』が嘲笑う。既に腕にも力が入りにくくなってきていた。握力がなくなってきた。

――もう、限界かねえ……。

もうすぐ、仲間のところにいけるのか。そう思ってしまった。それは諦め。それは白旗。実岸の中から、戦意が無くなりかけて

いる。

剣の刃が欠け、ひびが入り今にも折れそうになる。剣のスペアはある。けれど、それを取り出す気力が無い。もうこの世界に仲間が、ウォリアーズハント守護固持が無いのなら、生きている意味など、無いに等しい。

刃が折れ、その破片が実岸の頬を浅く切り裂く。血が流れ、もうすぐ来る死を直感し、目を瞑った、が。

予想していた衝撃は無い。

代わりに、

「サネギシ、オマエはまた仲間を死に場所へ誘うんだな」

『東』の動きは止まり、そう言う。

死を覚悟していた実岸は目を開くと、目の前に、一メートルほどしかない距離に『東』は立っていた。さらには何もしてこない。

今ほど殺すチャンスは無いだろうに、『東』は『それ』を見ながら動きを止める。

直後、巨大な刃が実岸の目の前を通過する。刃は『東』を巻き込み、十メートル程度吹き飛ばされる。

実岸が刃が来たほうを見ると、そこには二人の男女が立っていた。

——なん、でだ。

紛れも無く、村雨零斗とノエル・カーリスエッジ。二人だった。

「実岸、お前は死ぬつもりだったのか」

村雨零斗は告げる。

大アルカナ『戦車』には意味はまだある。その一つ、それは——『援軍』。

零斗とノエルは実岸へと近づいて、問い詰めるように零斗は言葉を重ねる。

「答えろ」

そこには迫力と、言葉では言い表せれ無い何かがあった。

「……ああ、そうだ。俺がここで殺されれば迷惑も——っぐ！」

零斗の拳が、実岸の頬へと入った。体勢を崩すが、すぐに実岸は立ち直る。

「れ、零斗さん！？ 何をしてるんですか!？」

「……………」

零斗は答えない。永遠に続くかと思われるほど重い沈黙が続くが、そこでもう一人の男の声が入る。

「……テメェ、ナニもんだ」

零斗には見知らぬ男だった。実岸と対立していることは確かなのだが、それ以外は分からない。

けれど、一つ分かることがあるとすれば、この『空間断絶魔術』は図書館特有の術式だ。

つまり、この男は魔道書回収集団の一員。そこに間違いは無いだろう。

「村雨零斗、お前は……『何』だ」

力の一部しか引き出せていないとはいえ、聖書の一撃を受けて無傷の男を見て疑問と同時に確信する。

この男は、侮っては自分が負けると。

「……ああ？ ムラサメ？ ツハ、マジかよ。ムラサメの子供かよ

！ ……オレはテメェらの言う魔道書回収集団の『東』だ」

——は？

零斗はその言葉が一瞬分からなかった。図書館の——『東』——つまりは——第三階。

魔道書回収集団の中でも屈指の実力者。

それに、

「あの村雨、ってどういうことだ……」

そう、確かに『東』は「ムラサメの子供かよ」といった。つまりは、村雨の父。村雨玄界のことを知っているということなのだろうか。

「ムラサメゲンカイ、テメエの親だろ？」

零斗の疑問と疑念を跳ね除け、一一年前に零斗が殺してしまった父の名を、『東』はいとも簡単に言う。

「何故、お前らは父さんの名前を——」

——お前、ら？

また、引かなかった。

頭の中に思うのは前に会った図書館の魔術師のこと、図書館の魔術師もまた、村雨玄界のことを知っていた。『偉大な魔術師、村雨玄界』と。

一体、図書館と何の関係があるのだというのか。

「お前らは……」

拳を握り、歯を食いしばっていたが、すぐに力を抜き、

「何を、知っている」

「テメエが知らないだけだろが。——待ち時間は終わりだ」

『東』は会話の余地はないと言いたげに拳を構える。

「つけ、時間かかったな……。んだあ？ この魔術はよ」

——聖書をノエルが持っていることを知らない……？

魔具に関しての知識は最上級であろうと思われる図書館の魔術師達。

けれど、この『東』は『聖書』で使われた魔術を解らないようである。

それはただ『東』が知らないだけなのか、意図的に知らないということにしているのか。

どちらにせよ、知らないのならばノエルと聖書が存在を知られるわけにはいかない。これ以上、危地へ踏み込ませてなるものか。

「（ノエル、後ろに下がれ。今はもう、聖書それを使うな）」

念のため、小声でノエルに言う。聖書という単語も出さない。

「（で、ですが……）」

「頼む」

零斗はノエルの問いを待たずに即答する。彼女が心配だったから。

——…俺は、心配、しているのか……？

零斗は自らの心中に疑問を持つ。自分の感情がわからない。そもそも、今零斗の中にあるこの気持ち「心配」なのかすらも、わからない。

けれど、やることは決まっている。

「……分かりました、でも、でも——」

ノエルは最後の言葉が出ずに、零斗を見上げる。自分も何かしたい、と訴えているようにも見えた。

けど、だけれど、これからを考えるならば今のノエルは聖書を使っ
てはいけない。

絶対に。

「大丈夫だ。安心しろノエル」

零斗は言う。その言葉を。初めは「……え？」と呆けていたノエルだが、時が経つにつれ次第に表情を和らげてゆく。そして答える。
「はい」

「つけ、んだあれはよ」

『東』は面倒くさそうに言葉を吐く。それに実岸は答える。

「美しいと思わないかい？ ああいうのってねえ」

実岸と『東』は五メートルほどの間合いを保ったまま、両者動かない。

否、ここは『東』が待っているというべきか。

「しかしまあ、あんたも結構紳士だよねえ。殺す相手を待つなんてさ」

「うっせえ、オレは全力の相手を全力で潰すだけだ。不意打ちなんざして勝っても嬉しくもねえ」

その時、実岸の後ろから「はい」と声がする。

「……終わったみたいだねえ。……さて、どうする、『東』さんよ」

『東』はその言葉に、一回笑い声を漏らすと、
「決まってるだろ、先ずサネギシ、オマエを殺しす」
静かに、二人は剣と拳を構える。

零斗がノエルを後ろに残し、『東』と実岸の元へと戻ってくる。
戻るや否や、実岸が零斗に言う。

「君のおかげで、目が覚めた。……見つけたよ」

「……そうか」

零斗は実岸に一度視線を合わせるが、即座に外し、共通の敵に向
かって視線を合わせる。

「どうする？」

今はこの状況の打破が最優先。

「俺のせいでこうなったのは変わりない。巻き込んでしまったこと、
すまなかった。責任は取る。けど、少し手伝ってはくれないかねえ
？」

零斗は眼鏡を外し、しまう。黒魔道書ブラックスペルを取り出し、——それが合
図となった。

『東』は直線に突っ込んでくる。性格なのか、回りくどいことが
苦手なのか。

けれど、その速さ、力は真正面からでも対抗できるか分かったも
のではない。少なくとも零斗にはそれだけの運動能力は有していな
い。

ガキィ！ と金属音が響く。零斗に『東』の動きに対抗する運動
能力は無い。ならば、前衛を実岸に任せ、零斗は後ろから黒魔道書ブラックスペル
で援護する。

「『剛毅』！ 」

眼前で繰り広げられる戦いを見ながら零斗は思う。

——『東』は何で、そうしなかった……。

思い浮かぶのは先ほどの情景。魔術断絶空間イクテイスピエスを実岸の前に展開した時、『東』は動きを止めた。

実岸を殺すのが目的ならば、それを無視しても構わないはずだ。けれど、動きを止めた。そこに何の意味があるのかは分からないが、それは零斗にとって突くべき穴だ。だが、先ほどのように上手くはいかないだろう。

今は実岸も『東』も動いているのだ。動いている相手に対して魔術断絶空間イクテイスピエスは使いづらい。

実岸だって魔術師だ。巻き込んでしまったら魔力を奪い取ってしまう。

相手は図書館の『東』。実岸が動けなくなってしまうたら敗北は必死だ。

零斗の魔術断絶空間イクテイスピエスは術式を展開した後、『座標を決める』という作業が入る。この魔術の効果範囲の基本形は一メートルの立方体。それをどこへ展開するかを決めるのだ。

それには○、五秒ほどかかるが、実際ならあまり気にはならないレベルである。

だが、『東』は速い。その○、五秒の間にすでに効果範囲から出ているのだ。

実岸も『東』と今のところ渡り合っているが、やはり実力は拮抗していない。よく言って四対六というところか。

零斗も黒魔道書の乱用は出来ない。それは魔力を根こそぎ持っていく自殺行為だ。

けれど、集中して冷静にするからこそ、『東』を捉えられない一因にもなっている。

——くそっ！

「五秒だ！」

零斗に実岸の声が届く。

「五秒稼いではくれないかねえ！ その後は俺がやる！」

「——了解した」

「よし、じゃあいぐぞ。三、二、一」

カウントダウンを始める。それは前衛と後衛を交代する合図。

「零！」

実岸は大きくバックステップし、零斗は前へと出る。

「逃げんなオラァー!!」

『東』は構わず突進してくる。零斗には拳を止める武器も、腕力も無い。けれど――魔術がある。

イクティスレエス
「魔術断絶空間！」

さらに、

――導く……薄く、もっと広く！

前述の通り効果範囲は一メートル四方の立方体。それを薄く広く導くことで効果面積を格段に広くする。

「ツケ、面倒くせえな、くそっ」

思ったとおり、『東』は歩みを止め、零斗の目の前で止まる。一メートル前方に『東』はいる。

「テメエは何でアイツの肩を持つ」

「……さあな」

「……キライだぜ。そんな目はよ」

「――ありがとよ、村雨君。後は俺に任せとけ」

零斗の隣に実岸が立ち、もう一度カウントダウンを始める。

「三、二、一……」

零斗は後ろに下がる準備を開始する。

「零！」

魔術を解くと同時に実岸が『東』へと突き進み、組み合う。

「テメ……何のつもりだ！」

組み合った『東』は言う。腕力で勝てるわけが無い、と零斗は思う。真正面から力で勝負をしにいくなど無謀だ。

「どうしようもこうしようも無い。こういうつもりなんだよねえ！」

「――死ねッ!!」

『東』は実岸の左腕を殴る。けれど——またガキイ、という金属音。

そう、先ほどから『剛毅』^{ゴウイ}の効果はまだ残っているのだ。

「『死神』！」

『東』と実岸の影。その二つの影が重なり合い一つへと交わる。次に、頭から消えていく。

「何……してんだお前！」

零斗は叫ぶ、けれど魔力を使いすぎたのか頭がぼーっとして体が上手く動かない。

「これは俺の責任だ。だから俺が……終わらせる。一緒に逝こうぜ、『東』さんよおおお！！」

——……く……そ。

魔術を使いたいが視界が定まらない。集中できない……。

実岸と『東』の影が——存在が——半分以上消えた時、一つに交わっていた影が一瞬にして二つに再び分かれた。

二人の間に、舞い降りる。——少女——が——。

掠れる視界でその少女を捕らえたかったものの、どうしても焦点が合わない。

——おま、え……は……。

そこで零斗の意識は途絶えた。

「村雨、零斗」

少女は倒れている男の名を口にする。けれど、それ以上は何も語らない。

「何でオマエがここにいやがる！」

そう声を荒げているのは『東』だ。

「『東』、ここで、何を、している」

けれど、逆に少女はそう『東』に質問をする。

「……オレはただこの顔に傷をつけやがったやつを殺しに来たんだよ、なんか悪いか？」

「特に、けど、このまま、では。『東』、死ぬ、かもしれない」

「ハ？ そんな訳あるかよ」

「すぐに、分かる」

——あ……あ……あ……。

目の前で、零斗が倒れた。倒れた。倒れている。動かない。

「れい、とさん……？」

ノエルは、その場に立ち尽くしていた。が、今の状況を飲み込み始めるとすぐに、駆け足で走り出す。

「零斗さん！！ 零斗さんっ！！」

すぐに零斗の近くによる。息はしているが、目は覚まさない。

その事実にもエルの肩は震えだす。

——ゆる……せない。

「貴方は……貴方達はッ！！」

激怒が憎悪に変わった瞬間。ノエルの脳裏に『声』が響く。

【変わりましたようか？ ノエルカーリスエッジ】

——……え？

何か聞こえた。声が、何かの声。

【あら、何をそんなに驚いているのかしら。私は別に消えたわけじゃないのよ。ただ、その男が怖いだけ】

——まさか、『貴女』は……。

【ええ、そうよ。『私』は『貴女』】

——何を、いきなり。

【何か不思議なことがあるの？ 『私』は『貴女』より上手く『聖書』を扱える、わかるでしょ？】

——だけ、れど……。

【『貴女は』あの忌々しい男を守りたいんでしょう？ それくらい分かるわよ】

——……うん、守りたい。

【素直ね。……ちよつと調子狂うわ。じゃあ変わりましたようか、私が戦ってあげる】

「任せなさい」

「……ああ？」

『東』は『それ』に不信感を持つ。先ほどまでとまるで雰囲気が違う彼女に。先ほどまでは気にする余地も無いほど希薄な存在だったはずの彼女に。

違う。今の彼女は根本的に違う。

「その——『東』さん、だったかしら？ どうもありがとう、お

かげで出て来れたわ」

「テメエは……誰だ」

「さあ？ 想像にお任せするわよ。まあ、今は簡単に言っただけだ」
『敵』なのは間違いないのだけれど

彼女は聖書を取り出す。同時に半径二メートルほどの巨大な術式『東』の真上へと展開。

彼女の使う術式は『練成術式』。その場にあるものの全てを材料とし、新たに物質を練成する術式。

甘く見ているのか、『東』はその場で防御の構えのみを取る、が。『そんな構えで大丈夫？』

彼女の声と同時に数十もの刃が術式より練成され、そして——その全てが同時に一点へ向けて射出される。

地面を抉り、砂埃が立ち込める。視界は遮断されるが、地面を抉る音は未だ消えない。

「……っち、んだよこりゃあ……」

数秒後、地面を抉る音が消え、砂埃も消え始めた頃。『東』は立

っていた。が、全身に切り傷がある。

「ふふ、貴方。見えているけど、いいのかしら」

「ケ……テメエの名前は何だ、言え」

「嫌よ。だって、貴方しつこそうだし。そもそも『東』なんて本名には到底聞こえないし、何で相手の名前を知らないのに教えないといけないの?」

そこで、少女が『東』の隣へと立つ。今までどこに隠れていたのだろうか。

「どうする、引く、死ぬ」

「クソッ! ……わかったよ」

『東』はそういう。分かったということは引くということだろうか。

「逃がさないわよ」

今度は彼女の前に巨大な術式が展開され、中心から刃渡り三メートル以上はあろうか巨大な刃が出現し射出される。

刃は一直線に『東』を真一文字に切り裂かんと向かったが――

「何よ、それ……」

刃は『何か』に阻まれる。彼女は驚いた。

その光景に。

その『光』に。

白すぎるほどに白く、神々しいほどの光に彼女の刃は消えた。その刃は普通の防御術式など一撃で切り裂くであろうに。

光が収束すると、既に二人はいなくなっていた。空間を分けていた魔術も解除され元の世界が戻ってくる。

彼女はその場でずっと呆けており、何分かした頃だろうか、サイレンの音が鳴り響いた。

1月25日 第四章 終

1月25日（水）

「う……」

零斗が目を覚ますと純白の天井が先ず目に入った。

——ここ……は……。

記憶を掘り返す。どうにもあの後からの記憶が完全に抜け落ちていた。一体何がどうなってここにきたのか。

「すー……すー……」

そして、ふと零斗の横から声が聞こえた。そちらを見ると、寝ているノエルがいた。ベッドに手を枕にしながらいかにも眠りにくそうな体勢だ。

背中にはやや厚めの毛布がかけられている。

零斗はここが病室なのだとやっと気づく。

——実岸は……、『東』はどうなった……。

周りを見渡す限りどこにもいない。それどころか周りにはノエル以外誰もいない。

焦りと焦燥が零斗を襲うが、

「すー……すー……」

という規則的な寝息がそれを落ち着かせる。一応零斗は病人として運ばれたのだろう。けど、今日になってもノエルがここにいないということは一晩中いたということになる。

時計を見ると、午前七時。

なんとなく、何もすることが見つからなかった零斗はノエルの頭を撫でる。

「ん……」

少し綻んだ表情をノエルはする。それがさらに安心させる。それとほぼ同時にドアが開かれる。

「あ、目が覚めたんですね」

「はい」

見るからに看護師の女性は言う。

「そちらは彼女さんですか？ 昨日はここにいと押し切られてしまっています。このこと、他の誰かに聞かれても内緒にしておいてくださいね」

ふふふっ、となんだか楽しそうな笑みを零しながら彼女は言う。

零斗は「わかりました」と返す。やはり無理を言っていたようだ。

零斗は過労ということで運ばれたらしい。間違いではないだろう。
ブラックスベル 黒魔道書の使用過多、これが原因であろうことは想像に難くない。
かた

「あの、すいません。もう一人、運ばれては来ませんでしたか」

零斗は質問する。もう一人の男——実岸のことを。

零斗はその日のうちに退院できた。検査では異常無し。その他もなんら問題というのとはなく健康そのものだったそうだ。

そして実岸はというと——今日の朝にはいなくなっていたそうだ。どうやら夜の間に抜け出したらしく、朝にはもぬけの殻だったらしい。

「本当に、零斗さんが無事でよかったです」

「……ノエル、ありがとな」

「え……な、何を突然!？」

「助けてくれたの、ノエルなんだろ」

あの状況から『東』が逃すわけがない。実岸も生きているということは、あの場には後ノエルしかいなかった。ならば助けてくれたのはノエルであろうことは想像に難くない。

けれど、同時に聖書を使わしてしまったことだろう。

零斗は改め決意する。

「あ、いえ……その……」

「ありがとな」

「……そ、そういえば実岸さんはどこへ行ったのでしょうか？」

「――さあな、けどあいつは強い。今は失ってても、見つけて生きていくだろう」

一日ぶりの家へと帰ってきて、携帯が光っているのを見つける。
内容は、

『着信3件（平真2件） メール5通（平真4通…黄希島1通）』

これは後で説明するのが大変そうだ、と思いながら零斗は携帯を閉じた。

1月25日 第四章 終（後書き）

ここまで読んでくださった人がもしもいれば泣けます。

というわけでおはこんばんにちはららと申します。

言うなればここから第二部、みたいなものです。

あくまで自分の中で、の話ですのであまり気にしなくても構いません。

ここまで読んでくださった方、改めてありがとうございます。
1%でも面白い、と思われた人がいればとても嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7384w/>

魔術師達のシン

2011年10月21日03時24分発行